

# 新東京国際空港 埋蔵文化財発掘調査報告書VI

—成田市木戸下遺跡・富里町七栄古込遺跡—

1990

新東京国際空港公団  
財團法人 千葉県文化財センター

# 新東京国際空港 埋蔵文化財発掘調査報告書VI

—成田市木戸下遺跡・富里町七栄古込遺跡—

1990

新東京国際空港公団  
財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

千葉県は温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれ、古くから農業・漁業が盛んであります。また、首都に近接していることから、その社会・経済・文化等の各分野における役割・責任が、年々増加してきております。成田市・芝山町・多古町にまたがる新東京国際空港は、日本の新しい表玄関としての役割を担っていますが、開港以来、旅客数及び取扱い貨物量が増大の一途を辿り、これ以上の航空機の増発は限界に近い状態になってきております。これらを解消するために、新東京国際空港公団は新しい滑走路や閑連施設等一連の建設事業として成田市野毛平地区と富里町七栄・古込地区に農業用代替地の造成事業を計画しました。

このため、千葉県教育委員会は、予定地内に所在する遺跡の取扱いについて、空港公団と慎重な協議を重ねた結果、事前に発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずることになり、財團法人千葉県文化財センターが調査を担当することになりました。

発掘調査は、昭和56年度に木戸下遺跡、昭和57年度に七栄古込遺跡について実施しました。その結果、木戸下遺跡では、大規模な集落跡の一部と思われる平安時代の住居跡群を検出することができました。七栄古込遺跡では、绳文時代の資料を提供することができたものと思います。

このたび、調査成果を刊行するに当たり、本報告書が学術的な資料としてはもとより、文化財の保護・普及のために広く一般の方々に活用されることを望んでやみません。

終わりに、発掘調査に御協力をいただいた新東京国際空港公団をはじめとして、発掘調査から報告書刊行まで、いろいろと御指導・助言をいただいた千葉県教育庁文化課・成田市教育委員会・富里町教育委員会並びに地元関係諸機関各位にお礼を申し上げるとともに、調査に携わっていただいた調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

平成2年3月

財團法人千葉県文化財センター

理事長 岩瀬 良三

## 凡　例

1. 本書は、新東京国際空港建設に関わる代替地造成事業地内に所在した木戸下遺跡、七栄古込遺跡の発掘調査報告書である。

木戸下遺跡 遺跡コード 211-023 成田市野毛平字木戸下1010-5他

七栄古込遺跡 遺跡コード 324-002 印旛郡富里町(村)七栄字古込503-3他

2. 発掘調査は、新東京国際空港公団の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに千葉県文化財センターが実施した。

3. 本書は、新東京国際空港関連の発掘調査報告書の第VI集に当たるものである。

4. 発掘調査及び整理作業は以下のように実施した。

年度	遺　跡		組　織			
	木戸下	七栄古込	部　長	補　佐	班　長	担当職員
56	発　掘		白石竹雄	中山吉秀	西山太郎	西川博孝、麻生正信
57	発　掘	白石竹雄	天野　勢	西山太郎	西川博孝	
58	水洗・注記	水洗・注記	白石竹雄	根本　弘	西山太郎	田坂　浩
59	復　元	復　元	鈴木道之助	岡川宏道	田坂　浩	田坂　浩
60	実　測	復元～ レイアウト	鈴木道之助	岡川宏道	高橋賢一	宮　重行、小高春雄 麻生正信
元	トレース ～刊行	原稿～刊行	堀部昭夫	阪田正一	藤崎芳樹	金丸　誠、矢本節朗

5. 墨書き器の判読については、国立歴史民俗博物館教授平川　南氏に御協力を戴き、また、銅製品の螢光X線分析については、同博物館助教授永嶋正春氏にお願いし、その結果について御教示いただいた。

6. 発掘調査から本書の刊行にいたるまで、千葉県教育庁文化課、新東京国際空港公団の関係者をはじめ、多くの方々から御指導・御助言をいただいた。深く謝意を表する。

# 本文目次

## 序 文

## 凡 例

## 本文目次・挿図目次・図版目次

### 第1章 木戸下遺跡

第1節 発掘調査に至る経緯 .....	1
第2節 発掘調査の方法と経過 .....	1
第3節 遺跡の位置と環境 .....	2
第4節 検出された遺構と遺物 .....	7
1. 住居跡 .....	7
2. 土 壇 .....	50
3. 溝 .....	55
4. グリッド出土の遺物 .....	56
第5節 ま と め .....	63

### 第2章 七栄古込遺跡

第1節 発掘調査に至る経緯 .....	75
第2節 発掘調査の方法と経過 .....	75
第3節 遺跡の位置と環境 .....	78
第4節 検出された遺構と遺物 .....	81
1. 遺 構 .....	81
2. 遺 物 .....	81

## 挿図目次

第1図 トレンチ・グリッド配置図.....	2
第2図 グリッド呼称図.....	2
第3図 木戸下遺跡周辺主要遺跡分布図.....	3
第4図 木戸下遺跡地形図.....	4
第5図 木戸下遺跡構造配置図.....	6
第6図 1号住居跡実測図.....	7
第7図 1号住居跡出土遺物実測図.....	7
第8図 2号住居跡実測図.....	9
第9図 2号住居跡出土遺物実測図.....	10
第10図 3号・4号・5号住居跡実測図.....	11
第11図 3号住居跡出土遺物実測図.....	13
第12図 5号住居跡出土遺物実測図.....	16
第13図 6号・7号住居跡実測図.....	17
第14図 6号住居跡出土遺物実測図－1 .....	20
第15図 6号住居跡出土遺物実測図－2 .....	22
第16図 7号住居跡出土遺物実測図.....	23
第17図 8号住居跡実測図.....	24
第18図 8号住居跡出土遺物実測図.....	25
第19図 9号・10号・11号住居跡実測図.....	26
第20図 9号住居跡出土遺物実測図.....	27
第21図 10号住居跡出土遺物実測図－1 .....	30
第22図 10号住居跡出土遺物実測図－2 .....	31
第23図 11号住居跡出土遺物実測図.....	33
第24図 12号・13号住居跡実測図.....	34
第25図 12号住居跡出土遺物実測図－1 .....	38
第26図 12号住居跡出土遺物実測図－2 .....	39
第27図 13号住居跡出土遺物実測図.....	40
第28図 14号住居跡実測図.....	41
第29図 14号住居跡出土遺物実測図.....	42
第30図 15号住居跡実測図.....	43

第31図	15号住居跡出土遺物実測図	43
第32図	16号住居跡実測図	44
第33図	17号・18号住居跡実測図	45
第34図	17号住居跡出土遺物実測図	48
第35図	1号・2号・4号・6号・8号土壤実測図	51
第36図	8号土壤出土遺物実測図	52
第37図	9号土壤実測図	53
第38図	1号・2号溝実測図	54
第39図	1号溝出土遺物実測図	55
第40図	グリッド出土遺物-1	57
第41図	グリッド出土遺物-2	58
第42図	グリッド出土遺物-3	59
第43図	グリッド出土遺物-4	61
第44図	住居跡の主軸方向	67
第45図	住居跡の規模	67
第46図	集落展開図	70
第47図	七栄古込遺跡構及びグリッド配置図	76
第48図	七栄古込遺跡周辺地形図	77
第49図	七栄古込遺跡周辺主要遺跡分布図	79
第50図	1号土壤実測図	82
第51図	グリッド出土遺物-1	83
第52図	グリッド出土遺物-2	85
第53図	グリッド出土遺物-3	86
第54図	グリッド出土遺物-4	88
第55図	グリッド出土遺物-5	89

## 表 目 次

表 1	類別土器共伴関係表	66
表 2	墨書き一覧	68

## 図 版 目 次

図版 1	木戸下遺跡航空写真	図版 6	出土遺物 - 1
図版 2	1. 2B・3Aグリッド全景	図版 7	出土遺物 - 2
	2. 3A・4Aグリッド全景	図版 8	出土遺物 - 3
図版 3	1. 3号住居跡全景	図版 9	出土遺物 - 4
	2. 同上 カマド内遺物出土状況	図版10	出土遺物 - 5
	3. 同下 出土遺物(鎌)	図版11	1. 七栄古込遺跡遠景 2. 七栄古込遺跡近景
	4. 6号住居跡全景	図版12	1. 1号土壤全景 2. 同上 土層断面
図版 4	1. 2号住居跡全景	図版13	出土遺物 - 1
	2. 9号・10号・12号住居跡全景	図版14	出土遺物 - 2
図版 5	1. 12号住居跡全景	図版15	出土遺物 - 3
	2. 13号住居跡全景		

# **第1章 成田市木戸下遺跡**

## 第1節 発掘調査に至る経緯

千葉県の北総地域においては、新東京国際空港の建設に伴い各種の地域整備事業が進められている。その一環として新東京国際空港公団は成田市野毛平木戸下地先に代替地の造成を計画した。

これに伴い、公団より千葉県教育委員会へ事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があった。そこで、千葉県教育委員会は現地踏査を実施したところ、遺跡の所在が確認されたため、その旨を公団へ回答し遺跡の取り扱いについて慎重に協議を重ねた。その結果、隣接地に所在する古墳の保存を考慮し、一部を現状保存とし、他については事業計画の変更が困難であるため、やむなく記録保存の措置を講じることで協議が整い、千葉県教育委員会は財団法人千葉県文化財センターを調査機関として指定した。

これに基づき、昭和56年4月に公団と財団法人千葉県文化財センターとの間で発掘調査の委託契約が締結され、調査の運びとなった。

千葉県教育委員会の指導を受け、発掘調査の方法としては、調査対象地に確認調査を実施しその結果をもとに、本調査を実施することになった。

## 第2節 発掘調査の方法と経過

**発掘調査の方法** 調査は対象面積2,747m<sup>2</sup>について、最初に上層の遺構確認のための確認トレンチを設定し、その結果に基づいて本調査を行う事になった。下層については上層の遺構調査と平行して、遺構のない所から順次2m×2mの確認グリッドを設定し、対象面積の4%について実施した（第1図）。

調査区内のグリッド設定は、調査対象地域が南北55m×東西45mと比較的狭いので、大グリッドを20m×20mとして公共座標に合わせた。更にその中を2m×2mの小グリッドに分けることにした。グリッドの呼称は大グリッドが東西方向をA～Dまでのアルファベットにし、南北方向を1～4までの数字にして、A1～D4グリッドとした。小グリッドは北西隅の00から南東隅の99まで100個に細分した（第2図）。遺構番号は各大グリッド毎に001から番号を付け、例えば3A-1001のようにした。遺物は原則的には全点ドッティングし、図面作製は簡易造り方で行い、一部平板実測を取り入れた。

**発掘調査の経過** 調査区の北西に所在する塚については、その大部分が調査区外に含まれることから、千葉県教育委員会と新東京国際空港公団でその取扱について協議を行った結果、調査対象から除外して、現状で保存することになった。

発掘調査は7月1日から開始し、当初は幅2mの確認トレンチを大グリッドの基準杭に沿っ



第1図 トレンチ・グリッド配置図

00				09
10				19
20				29
30				39
40				49
50				59
60				69
70				79
80				89
90				99

第2図 グリッド呼称図

て東西・南北に設定した。南西側から調査を進めていった結果、比較的遺構が集中していることが分かり、確認調査と平行して、南西側から重機によって表土層の除去を開始した。表土層の除去が終わり、遺構の検出作業が出来たものから順次遺構調査を進めた。

調査対象地の北東部は南西側に比べると遺構の密度は薄いが、土壤や溝を検出したので、最終的には調査対象地の全てについて本調査を実施した。重機による表土層の除去が終わり、遺構の分布状況が分かってきた時点で、下層の確認グリッドを設定し、確認を実施した。その結果、1か所だけで遺物が出土し、その周辺を拡張してみたがそれ以上広がらず、単独出土と判断し、本調査への移行はしなかった。9月2日に全ての調査を終了した。

### 第3節 遺跡の位置と環境

木戸下遺跡は、成田市野毛平字木戸下1010-5他に所在する。今回報告する部分は、成田市の中心部より北東に4.6km程行ったところで、国道51号線に面し、野毛平工業団地と国道を挟んで接している。

成田市は、下総台地の東側にあたる通称北総台地と呼ばれる地域にある。北総台地は、標高が30m以上の所が多く、最高では40m前後を測る。本遺跡の所在する台地は39m前後である。成田市をはじめ富里町・芝山町・多古町などを含めた周辺地域は、利根川に注ぐ根木名川水系と太平洋に注ぐ栗山川水系との分水界となっている。

本遺跡はこの内の根木名川水系に属している。根木名川は、成田市の中央をほぼ南北に縦断



1. 成田市木戸下遺跡      2. 推し古墳      3. 野毛平向山遺跡      4. 野毛平木戸下遺跡  
 5・6. 野毛平植出遺跡      7. 瓜生池遺跡      8. 野毛平古墳群      9. 円妙寺遺跡  
 10. 長田香花田遺跡      11. 長田稚子ヶ原遺跡      12. 長田舟久保遺跡  
 13. 野毛平千田ヶ入遺跡      14. 長田和田遺跡      15. 妙福寺裏遺跡

第3図 木戸下遺跡周辺主要遺跡分布図 (1/25,000)



第4図 木戸下遺跡周辺地形図(1/5,000)

して利根川に注いでいるが、成田市の北で、東から流れ込む取香川と合流し、下流に進むにつれて、西からの小橋川、再び東からの荒海川と合流している。大きく見ると、この取香川と荒海川とによって挟まれた台地上に所在していることになる。この台地は、両川から派生する小支谷によって、更に、複雑な樹枝状に開析される。本遺跡は取香川から延びる小支谷の谷頭に位置している。この付近は、北からは荒海川から延びる小支谷が真近に迫ってきている。

本遺跡周辺の台地上には数多くの遺跡が知られているが、発掘調査等が実施されて、その内容が明らかになっているものは少ない。しかし、取香川を望む台地上については、当センターによる東関東自動車道建設に伴う調査と、近年の印旛郡市文化財センターによる調査によって明らかになっている。これらから周辺の遺跡の在り方を概観してみたい。

先土器時代は、円妙寺遺跡・長田舟久保遺跡・野毛平向山遺跡等から石核・ナイフ形石器・剥片などの出土が報告されているが、いずれも規模の小さいものである。

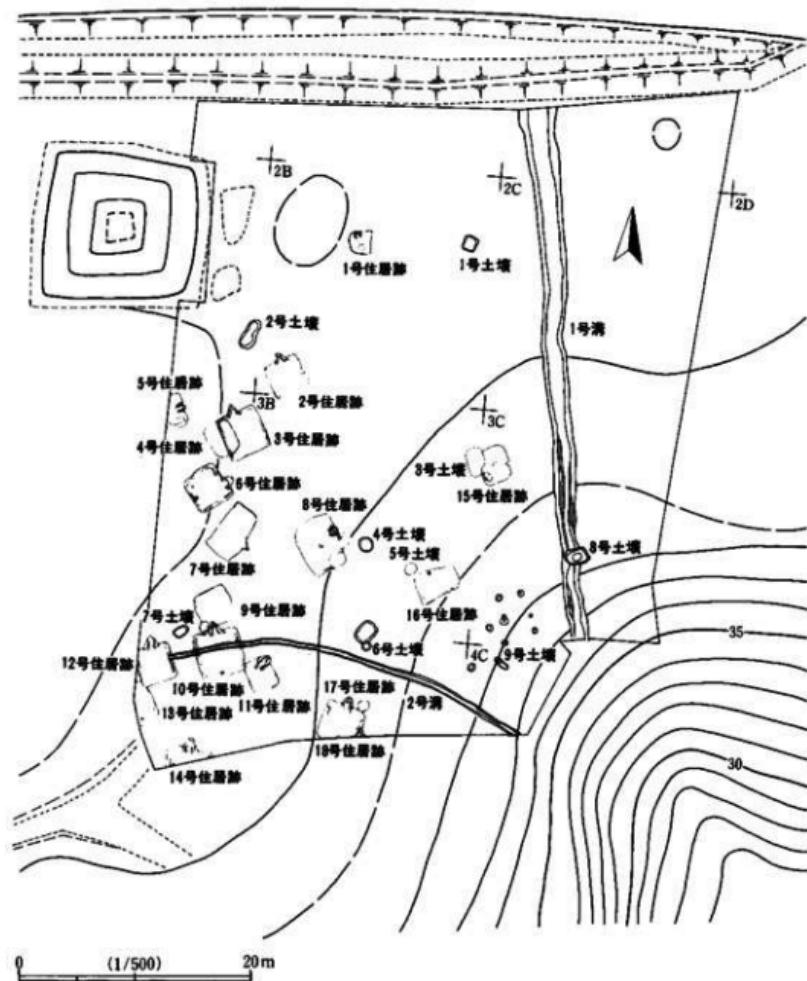
縄文時代は、長田和田遺跡で前期の集落跡が検出されており、長田堆子ヶ原遺跡・長田香花田遺跡・野毛平木戸下遺跡では中期から後期の集落跡が検出されている。長田和田遺跡に隣り合う野毛平千田ヶ入遺跡や、野毛平木戸下遺跡の対岸に当る野毛平植出遺跡や本遺跡では縄文の遺構は全く検出されないことから、大規模な集落ではなく、小規模ないし中規模な集落が点在しているものと思われる。

弥生時代から古墳時代は、長田和田遺跡で弥生時代後期と古墳時代前期の集落が検出され、更に、これ以降の時期の集落も存在しているなど複合遺跡の様相を見せている。古墳時代の集落跡が所在している遺跡としては、長田香花田遺跡・野毛平千田ヶ入遺跡・妙福寺裏遺跡・円妙寺遺跡で後期の集落跡が存在している。

歴史時代は、本遺跡も含めほとんどの遺跡で当該時期の遺構が存在しており、この時期になって周辺地域の開発が盛んに行われるようになったことの証しだろう。また、これらの遺跡は鉄滓などが出土しており、製鉄に関連する生産活動も行われていたと考えられる。

#### 参考文献

- 『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区－』 千葉県教育委員会 1985年
- 『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書 I－成田地区－』 日本道路公团東京第一建設局
- 財團法人 千葉県文化財センター 1985
- 『財團法人印旛郡市文化財センター年報 2－昭和60年度－』 財團法人 印旛郡市文化財センター 1986
- 『財團法人印旛郡市文化財センター年報 3－昭和61年度－』 財團法人 印旛郡市文化財センター 1987



第5図 木戸下遺跡遺構配置図

## 第4節 検出された遺構と遺物

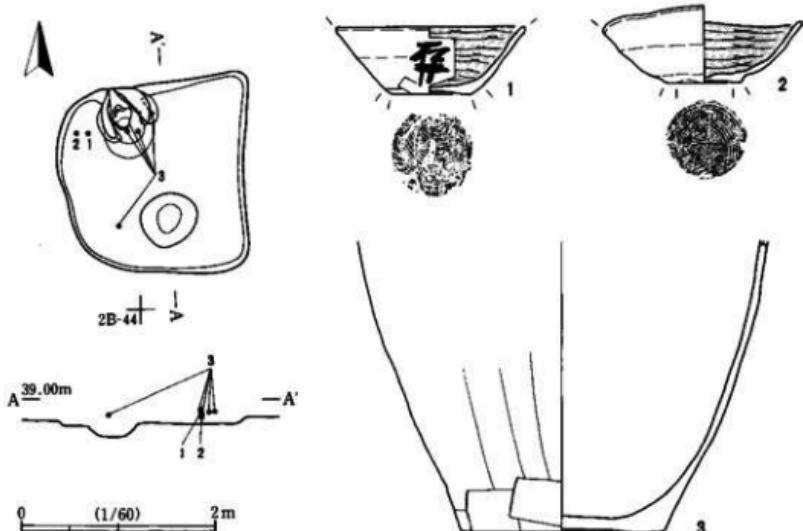
### 1. 住居跡

1号住居跡（第6・7図）-2Bイ002

調査区内で最も北の、2B-33・34グリッドの地点に所在し、周辺は谷頭よりやや奥まった平坦面である。他の住居跡とは離れており、一番近い2号住居跡からは10m程の距離がある。

**規模と形状** 規模は東西1.9m×南北は東壁で2m、西壁で1.5mを計り、形状は台形である。主軸方向はN-5°-Wである。壁溝及び柱穴は検出されなかった。検出面から床面までの深さは深いところで7cm、平均して3cm前後を計り、立ち上がりは余り明確ではない。床面は踏み固められている。堀方面は床面より10~20cm下がり、底面は凹凸である。南壁よりの所から長径60cm、短径50cm、深さ11cm前後の浅い皿状の堀込みが検出されたが、本住居跡を切って掘り込まれており、性格は不明である。

カマドは北側のやや西に偏った位置に構築されている。住居跡の掘り込みが浅いため、遺存状態は悪い。カマドの主軸方向はN-22°-Wで、住居跡のそれと大きく異なる。壁への掘り込



第6図 1号住居跡実測図

第7図 1号住居跡出土遺物実測図

みはほとんど無く、煙道部を30°～45°の角度に削り込んでいるだけである。構築材は粘土と山砂で、袖部は壁より手前に35cm程の長さで突出した。火袋部の幅は28cmを計る。袖部の内側は焼成によって赤化している部分も見られるが、底面にはほとんど見られない。カマド内の遺物の出土状況から、掛け口は煙道部端部から20～30cm内側の位置にあったものと推定できる。壠方は底面が浅く皿状に掘り埋められているだけである。

遺物は比較的少なく、破片資料が多い。図示したものはカマド内及び袖部の左側に集中していた。カマド内から出土した3の甕は上半部が欠失しているものの、ほぼ正立した状態であった。これらは遺構の廃棄段階の状況をとどめているものと思われる。墨書のある1の土器は2と共に正立した状態で出土した。また、覆土中から銅製の鉢の一部が出土したが、その時点で既に破損が著しく、原形を保持して取り上げることが困難な状態であった。その為、実測図及び写真などの記録をのせることは出来なかった。表面観察及び蛍光X線材質分析によると、銅地に非常に薄い銀板をはりついている事が確認された。

**遺物** 1は内面黒色処理された土師器杯で、口縁部の一部を欠失する。口径は13cm、器高は4.6cm、底径は5.4cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部内面には横方向7単位の、底部内面には一定方向のヘラ磨きが施される。体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は回転糸切り離しの後、一部に手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面には杯を正立させた状態で、「石井」の墨書が見られる。色調は暗褐色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。

2は内面黒色処理された土師器杯で、ほぼ完形品である。全体にゆがみの大きい土器である。口径は13.7cm、器高は5.2cm、底径は5.3cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内面には横方向で、ヘラどうしの重複がやや大きい5単位のヘラ磨きが施される。底部は回転糸切り離しの後、周縁部には手持ちヘラ削りが施される。色調は黄褐色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。

3は土師器甕で、胴部下半部以下が遺存する。現存高は19.7cm、底径は14cmを計る。胴部内面は横方向へのヘラナデで、底部内面は指頭によるナデが施される。胴部外面は上から下へのヘラ削り調整で、下端部は横方向のヘラ削り調整が施される。底部は器面が荒れ、調整等は不明である。色調は明褐色で、胎土中には砂粒を少量含み、焼成は良好である。

## 2号住居跡（第8・9図・図版4）－2Bイ001

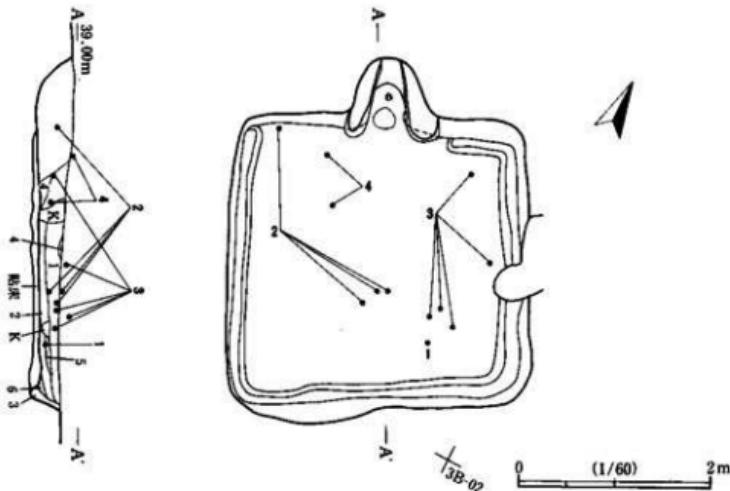
調査区中央のやや西寄りで、2B-90・91グリッドを中心とする平坦部に所在する。3号住居跡とは2m程の距離で近接している。調査中にカマドの対壁付近から焼土がブロック状に認められたが、床面より浮いた状態であり本跡に伴うものではないと考えられる。

**規模と形状** 規模は東西3～3.2m×南北2.9～3mで、形状はいくぶん東側の辺が短い台形

であるが、ほぼ正方形と言つて良いかと思う。主軸方向はN-26°-Wである。壁溝はカマドの下とカマドの左側を除いて検出された。幅は20cm前後で、深さは東側と南側は浅く3~6cmで、西側は10~12cmを計る。柱穴は検出されなかった。検出面から床面までの深さはカマド側では30cm程でそれ以外では20cm前後を計る。立ち上がりは直線的で、70°の角度をもつ。床面はカマドの前面から中央部分が堅く踏み固められている。堀方は浅く、床面から全体に5~10cm下がるだけである。

カマドは北側壁のはば中央に構築されている。主軸方向はN-23°-Wで、住居跡のそれとはほぼ同じである。壁を幅80cm、奥行き60cm程の砲弾状に掘り込み、煙道部を40°前後の角度にしている。横断面は鍋底状になる。構築材は山砂と粘性の強い暗褐色土を主体とし、スサを混入する。裾部は壁より手前ではほとんど検出されず、すべて壁外の堀方の内部で納まっていたものと思われる。火袋部の幅は35cm前後を計り、底面は比較的良く焼けて赤化している。カマド内から土製支脚がほぼ完形で正立した状態で出土した。この遺物から、掛け口は煙道部端部から40cm内側の位置にあったものと推定できる。

遺物の出土状況は全体的にやや散漫で、特に集中する部分は見られない。土器の他に磁着度の強い鉄滓（鉄塊系）が1点出土している。



1. 黒褐色土 山砂・ローム粒をやや多く含み、炭化物焼土粒を少量含む。堆積はやや密である。
2. 黒色土 1層よりローム粒を多く含み、堆積はやや密である。
3. 暗褐色土 ローム粒が主体で黑色粒を斑に含み、堆積は疏である。
4. 黑褐色土 山砂のブロックを含み、堆積は密である。
5. 暗褐色土 ローム粒とやや多くの山砂を含み、堆積はやや密である。
6. 赤褐色土 烧土粒を多く含み、堆積はやや疏である。
7. 暗褐色土 ローム粒が主体で黑色粒と一緒に含む。堆積はやや密で幾分粘性がある。

第8図 2号住居跡実測図

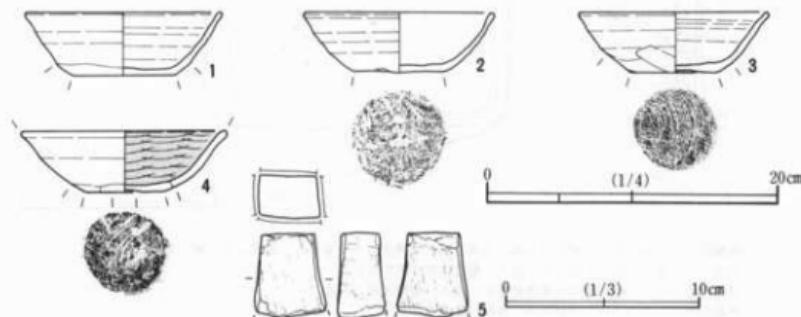
遺物 1は土師器杯で、全体の $\frac{1}{2}$ が遺存している。口径は13.4cm、器高は4.2cm、底径は7.1cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部内外面にロクロ痕が残る。体部下半部には回転ヘラ削り調整が施される。底部は回転ヘラ削り調整が施される。色調は黒褐色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。

2は土師器杯で、底部の全てと口縁部から体部の $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定口径は13.2cm、器高は4cm、底径は6.2cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、外面に弱いロクロ痕が残る。体部下端部の一部には手持ちヘラ削り調整が及んでいるが、基本的にはナデのみである。底部は右回転の回転糸切り離しの後、一定方向への手持ちヘラ削り調整が施される。色調は暗褐色と黒色で、胎土中には白色砂粒と砂粒が含まれ、焼成は良好である。

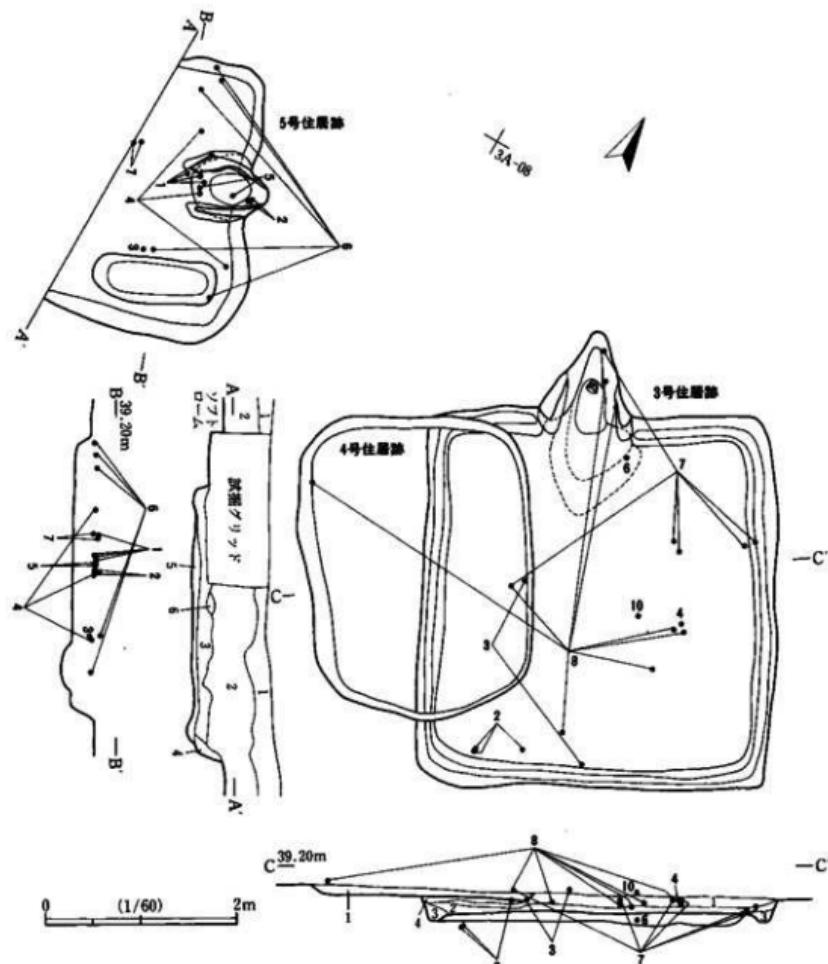
3は土師器杯で、底部の全てと口縁部から体部の $\frac{1}{2}$ が遺存している。口径は13cm、器高は4.5cm、底径は5.8cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は右回転の回転糸切り離しの後、周縁部と中央部の一部に手持ちヘラ削り調整が施される。色調は内面が黄褐色で、外表面が黒褐色、胎土中には砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

4は内面黒色処理された土師器杯で、全体に $\frac{1}{2}$ が遺存している。口径は14.1cm、器高は4cm、底径は5.1cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下端部には手持ちヘラ削り調整が施される。内面には横方向のヘラ磨きが施される。底部は右回転の回転糸切り離しの後、中央部を残して手持ちヘラ削り調整が施される。色調は暗褐色で、胎土中には1mm前後の小石と砂粒が含まれ、焼成は良好である。

5は砥石の破片である。現存で長さ4.3cm、幅3.7cm、厚さ2.4cm、重量53.6gを計る。四面とも使用されている。石材は粘板岩である。



第9図 2号住居跡出土遺物実測図



#### 3号住居跡

1. 黒褐色土 ローム粒と山砂を少し含み、堆積はやや緻密である。
2. 黒褐色土 1層よりローム粒を多く含み、堆積はやや緻密である。
3. 暗褐色土 ローム粒とブロックを含み、堆積は緻密である。
4. 暗褐色土 ロームブロックを含み、堆積はやや緻密である。
- 4号住居跡の貼床になる。

#### 5号住居跡

1. 表土
2. 黒褐色土 ローム粒を少し含む。
3. 暗褐色土 ローム粒と山砂を含み、堆積はやや緻密である。
4. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
5. 暗褐色土 ロームブロックと黒色土との混合土による貼床で堅い。
6. 山砂ブロック

#### 4号住居跡

1. 黒褐色土 ローム粒を少し含み、堆積は緻密である。

第10図 3号・4号・5号住居跡実測図

### 3号住居跡（第10・11図・図版3）－3Aイ001B

調査区中央の西寄りで、3A-19グリッドを中心とする平坦部に所在する。4号住居跡と重複しており、4号住居跡が本住居跡より新しい。

**規模と形状** 規模は3.8m×3.8mで、形状はほぼ正方形である。主軸方向はN-30°-Wである。壁溝はカマドの下を除いて検出され、幅は10~15cm、深さは5~7cmを計る。柱穴は検出されなかった。検出面から床面までの深さは20cm前後を計る。壁の立ち上がりは直線的で、75°~80°の角度をもつ。床面は全体的に堅く踏み固められているが、細かな凹凸が見られる。堀方は南東部分を除いて10cm程度床面から下がり、底面は比較的平坦である。

カマドは北西側壁の中央に構築されている。主軸方向はN-22°-Wで、住居跡のそれと同じである。壁を幅80cm奥行き1.1mの二等辺三角形状に掘り込み、煙道部を40°前後の角度にしている。横断面は逆台形状である。構築材は山砂で、裾部は壁より手前に25cm前後の長さで検出した。火袋部の幅は60cm前後を計り、火床部は底面中央部が幅30cm、長さ55cmの範囲にわたって焼けて赤化している。カマド内の遺物の出土状況から、掛け口は煙道部端部から50cm前後内側の位置にあったものと推定できる。

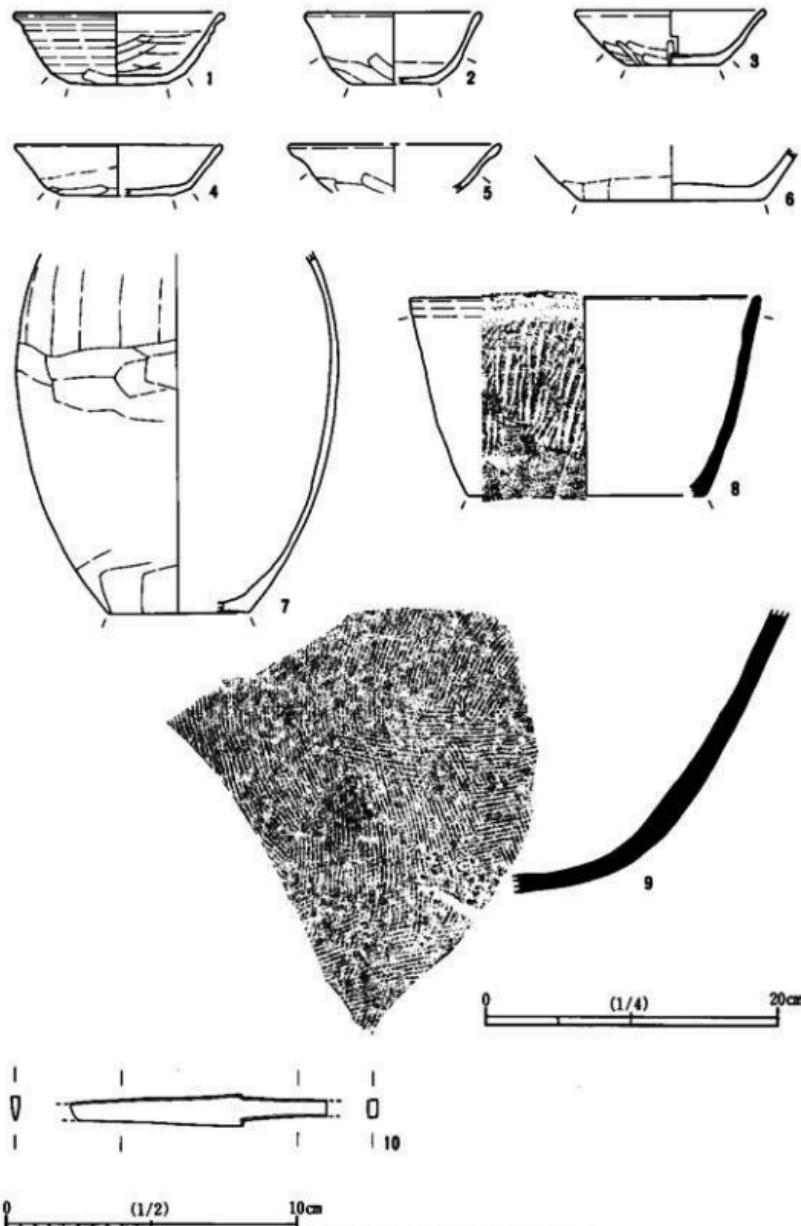
遺物の出土状況は中央よりも壁よりの部分に多く見られる。カマド内からは土製支脚がほぼ完形で正立し、その上に1の杯が伏せたような状態で出土した。

**遺物** 1は土師器杯で、底部が約3%、口縁部から体部がわずかに1%程度の遺存である。推定口径は14.6cm、器高は5cm、底径は6.6cmをそれぞれ計る。体部内面には横方向のヘラ磨きが施されているが、単位などは不明である。成形はロクロ成形で、外面にはロクロ痕が残る。体部下半は手持ちヘラ削りによる面取りを行う。底部は一定方向へのヘラ削り調整を行うが、やや難で、きれいな平坦面を作り出していない。色調は明褐色で、胎土中には白色砂粒が多く含まれ、焼成は良好である。

2は土師器杯で、全体の約1/4が遺存している。推定口径は12.2cm、器高は5cm、推定底径は6cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下半は手持ちヘラ削り調整を施している。底部は手持ちヘラ削り調整を施し、切り離しは不明である。色調は明褐色で、胎土中には砂粒が比較的多く含まれ、特に白色砂粒がやや目立つ。焼成は良好である。

3は土師器杯で、ほぼ完形である。口径は13cm、器高は3.8cm、底径は6.2cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下半は手持ちヘラ削り調整を施す。また、この部分のヘラケズリ調整は、最後に縦方向のヘラケズリを意識的に数か所施している。外面にはスヌ状の付着物が著しく見られる。色調は淡褐色で、胎土中には砂粒が含まれ、焼成は良好である。

4は土師器杯で、全体の1/4が遺存している。推定口径は14.2cm、器高は3.5cm、推定底径は7.6cmをそれぞれ計る。内外面はナデを施すが、外面には輪積み痕が残る。体部下端部は手持ちヘラ削りによる面取りを行う。底部は回転糸切りの後、一定方向へのヘラ削り調整を全面に施す。



第11図 3号住居跡出土遺物実測図

色調は明褐色で、胎土中には赤色砂粒を含み、焼成は良好である。

5は土師器杯で、口縁部から体部にかけて約1/3程度が遺存している。推定口径は14.3cmを計る。内外面共にナデを施し、体部下半は手持ちヘラ削り調整を施す。色調は淡褐色で、胎土中には微細砂粒と雲母粒が多く、赤色砂粒を少量含んでいる。焼成は良好である。

6は土師器壺で、底部から胸部の一部のみが遺存している。底径は12.7cmを計る。外面はヘラ削り調整で、内面はやや荒いヘラナデ調整が施されている。底部は土器製作時の圧痕が残る。色調は明黄褐色で、胎土中には砂粒を多く含み、焼成は良好である。

7は土師器壺で、胸部から底部にかけて約1/2程度が遺存している。現存高は24.3cm、推定底径は9.5cmを計る。胸部最大径は中位よりやや上にあり、約22cmと推定される。外面はヘラ削りの後、ヘラナデを行ってヘラ削りの痕を消している。内面はナデ調整で、スヌ状の付着物が部分的にみられる。底部はヘラ削りを施す。色調は赤褐色で、胎土中には雲母片と、1mm前後の砂粒が多く含まれる。焼成は良好である。

8は土師質須恵器鉢で、全体の約1/2が遺存している。推定口径は24.1cm、器高は13.5cm、底径は16.2cmをそれぞれ計る。成形は叩き成形で、内面は指頭による押さえの後ナデ調整を施す。口縁部内外面はより明確なナデを施す。胸部下半部はヘラ削り調整を施す。底部の調整等は不明である。色調は暗褐色と黒褐色で、胎土中には白色砂粒と微細砂粒を含み、焼成は良好である。

9は須恵器大甕の底部から胸部下半部にかけての破片である。底部は丸底である。外面は叩き成形で、底部にいくにしたがって叩き目の方向が一定しなくなる。内面はナデである。内外面に降灰の痕がみられる。色調は外面が小豆色で、内面が茶褐色である。断面では内部は淡灰色である。胎土中には黒色と白色の微細砂粒を含み、焼成は良好である。

10は刀子で、刃部先端部と茎の端部を欠失している。現存長は8.7cmで、刃部の現存長が5.8cm、茎の現存長が2.9cmを計る。厚さは背部分で2mm、茎は3mm、幅は闊の部分で1.1cm、茎は6mmをそれぞれ計る。

#### 4号住居跡（第10図・図版3）-3A-1001A

調査区中央の西寄りで、3A-28グリッドを中心とする平坦部に所在する。3号住居跡と重複し、本住居跡が3号住居跡より新しい。

**規模と形状** 規模は短辺2.4m×長辺3.1mで、形状は長方形である。主軸方向はN-35°-Wである。壁溝及び柱穴は検出できなかった。検出面から床面までの深さは10cm程を計り、壁の立ち上がりはなだらかで、掘り込みが浅いこともあり、やや不明確である。東側の3号住居跡と重複している部分は、同住居跡の覆土中に掘り込まれている。床面はさ程堅く踏み締められておらず、凹凸が見られ、堀方面をそのまま床面にしている。

カマドは構築されていない。

遺物出土状況は全体的に散漫で、遺物は破片資料がほとんどであり、図示できるものはない。

### 5号住居跡（第10・12図・図版2）-3Aイ006

調査区中央の西端で、3A-6・3A-16グリッド地点の平坦部に所在する。西側の半分程度が調査区外に入る。3号住居跡とは2mの距離で接している。

**規模と形状** 規模は南北が3mで、東西は検出部分で2mを計る。主軸方向はN-70°-Eである。壁溝及び柱穴は検出されなかった。カマドの右側から、長軸方向を住居跡と同じくするピットを検出した。形状は隅丸の長方形で、長さ約1.3m、幅50cm、深さ4~5cmをそれぞれ計る。検出面から床面までの深さは25~30cmを計り、立ち上がりは直線的で、70°程の角度をもつ。床面は全体的に堅く踏み固められている。堀方は床面から5~6cm程度下がるだけで、ほとんどそのまま床面にしているところもある。

カマドは北東側壁の中央よりやや北に構築されている。主軸方向はN-75°-Eで、住居跡のそれとほぼ同じである。壁を幅60cm奥行き70cmの三角形状に掘り込み、煙道部を45°前後の角度にしている。横断面は逆台形状である。構築材は山砂と粘性の強い暗褐色土で、スサを混入する。裾部は壁より手前に60~70cmの長さで検出された。火袋部の幅は40cm前後を計り、袖部の内側は40cm程の範囲で焼けて赤化しているが、火床部は特に赤化している部分は認められなかった。火床部は浅い皿状に掘り窪められている。

遺物の出土状況は散漫で、カマド内から1・2~5が出土しているが、底面からやや浮いた状態であり、住居跡の廃絶後に流入してきたものと思われる。

**遺物** 1は土師器杯で、口縁部の一部を欠失するだけで、ほぼ完形に近い。口径は13.3cm、器高は4.5cm、底径は6.1cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下半には手持ちヘラ削り調整を施す。底部は右回転の回転糸切り離しの後、周縁部に手持ちヘラ削り調整を施す。色調は赤褐色で、胎土中には微細砂粒を多量に含み、焼成は不良である。

2は土師器杯で、底部の $\frac{1}{3}$ と口縁部から体部の $\frac{1}{3}$ が遺存している。推定口径は12.6cm、器高は4.5cm、底径は6.7cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、底部は一定方向へのヘラ削り調整を施す。色調は暗黄褐色で、胎土中には白色砂粒と石英粒を含み、焼成は良好である。

3は土師器杯で、底部が $\frac{1}{3}$ 、口縁部から体部が $\frac{1}{3}$ が遺存している。口径は12.7cm、器高は4.2cm、推定底径は6.5cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、底部は一定方向への手持ちヘラ削り調整を施す。色調は明褐色で、胎土中には白色砂粒を含み、焼成は良好である。

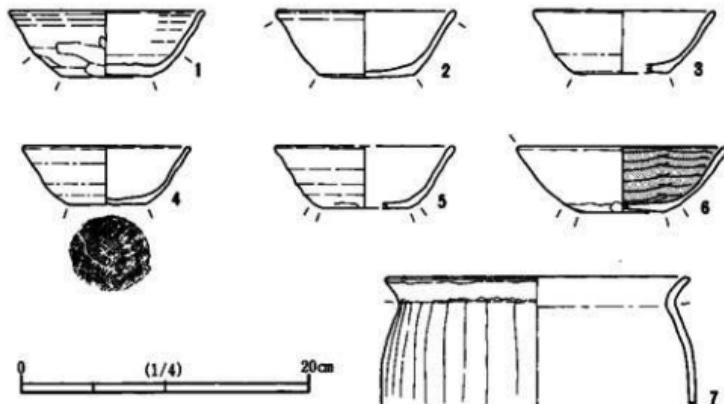
4は土師器杯で、底部から体部の $\frac{1}{3}$ と口縁部の一部が遺存している。推定口径は11.6cm、器高は4cm、底径は5.3cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、底部は不定方向へのヘラ削り調整を施す。色調は明褐色で、底部は黒色で、胎土中には微細砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

ある。

5は土師器杯で、全体の $\frac{1}{4}$ 程度が遺存している。推定口径は12.2cm、器高は4.3cm、推定底径は6.1cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下端部には手持ちヘラ削り調整を施す。底部は手持ちヘラ削り調整を施す。色調は淡褐色で、内面は黒褐色で、胎土中には多量の螢母粒と微細砂粒を含み、焼成はかなりあまい。

6は内面黒色処理された土師器杯で、全体の $\frac{1}{4}$ 弱が遺存している。推定口径は14.6cm、器高は4.5cm、推定底径は5.8cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内面には横方向のヘラ磨きが施される。体部下端部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は回転糸切り離し無調整である。色調は淡褐色で、胎土中には微細砂粒が含まれ、焼成は良好である。

7は土師器甕で、口縁部から胸部上半の $\frac{1}{4}$ が遺存している。推定口径は21.2cm、現存高は8.9cm、最大径は胸部にあり21.8cmをそれぞれ計る。口縁部内外面はナデ調整を施し、胸部内面はヘラナデを行う。胸部外面は甕を正立させて下から上へのヘラ削り調整を行う。内面の口縁部と頸部にスス状の付着物がみられる。色調は茶褐色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。

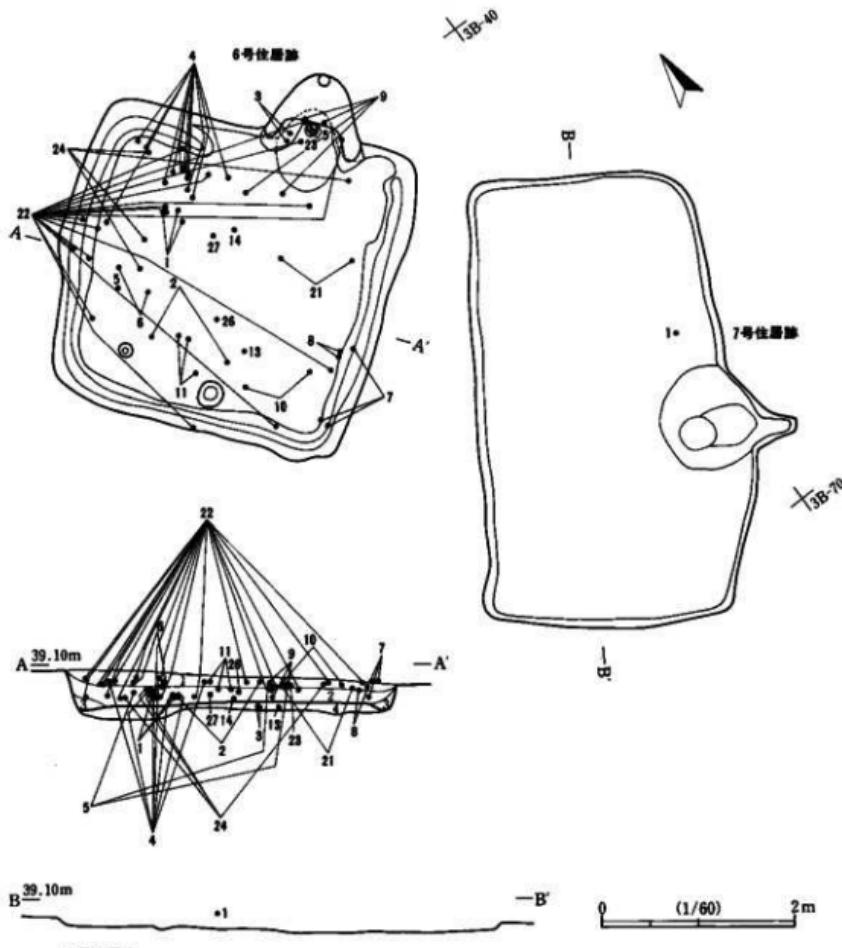


第12図 5号住居跡出土遺物実測図

#### 6号住居跡（第13～15図・図版3）-3Aイ002

調査区中央の西端で、3A-48グリッドを中心とする平坦部に所在する。4号住居跡とは1mに満たない距離で接している。

**規模と形状** 規模は東西3.1～3.4m×南北3.2～3.4mで、形状はほぼ正方形である。主軸方



- 5号住居跡
1. 黒褐色土 ローム粒と砂粒を含み、堆積はやや緻である。
  2. 暗褐色土 ローム粒・砂粒・焼土粒を含み、堆積はやや緻である。
  3. 暗黄褐色土 ローム粒を多く含み、やや粘性を持つ。堆積はやや緻である。
  4. 黒褐色土とロームブロックとの混合土による貼床。

第13図 6号・7号住居跡実測図

向はN-45°-Eである。壁溝はカマドの両側を除いて検出され、幅は25cm前後、深さは5cm前後を計る。柱穴は検出されなかったが、カマドの対壁のほぼ中央に長径28cm、短径23cm、深さ17cmのピットが検出できた。更に、南西コーナーに径16cm前後で、深さ37cmの小ピットが検出された。これらのピットは床面精査の段階では検出できず、貼床を除去して、壠方面の精査をしている段階で検出したものである。検出面から床面までの深さは20~30cmを計る。壁の立ち上がりは直線的で、75°~80°の角度をもつ。床面は中央部付近が堅く踏み固められている。壠方は北西コーナー付近とカマド対壁のピット付近が特に深く掘られており、深いところで20cm、平均して10cm程で、凹凸が目立つ。

カマドは北東壁の中央よりやや南東壁によった位置に構築されている。主軸方向はN-51°-Eで、住居跡のそれとほぼ同じである。壁を幅1m、奥行き70cmの三角形状に掘り込み、煙道部は35°前後の角度にしている。横断面は逆台形状である。構築材は山砂で、裾部は壁より手前に25~30cm前後の長さで検出した。火袋部の幅は35cm前後を計る。底面は短径60cm、長径85cm、深さ約20cmのやや深い皿状に掘り窪め、その中に土製支脚を埋め込むようにして底面を作り直している。カマド内の遺物出土状況から、掛け口は煙道部端部から60cm前後内側の位置にあったものと推定できる。のことから、袖部は本来はもっと長かったものと考えられる。

遺物の出土総点数は多いが、器形を復元できるような遺物はカマド内及びその周辺に多く見られる。カマド内出土の土製支脚はほぼ完形で正立し、その上に5の杯と23の鉢が伏せた状態で重なり合うようにして出土した。鉄器は幾分浮いてはいるがかなり床面に近い位置で出土している。10の墨書き器は南西コーナー付近で、比較的上層から出土しているので、本住居跡の廃絶後に流入した可能性がある。その他に木炭痕の見られる炉内滓が出土している。

遺物 1は土師器杯で、全体の $\frac{1}{4}$ が遺存している。推定口径は12.7cm、器高は4.5cm、推定底径は6cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下半は手持ちヘラ削り調整が施される。底部は回転糸切りの後、周縁部に手持ちヘラ削り調整を施す。色調は明褐色で、胎土中には砂粒が含まれ、赤色の砂粒が少量見られる。焼成は良好である。

2は土師器杯で、全体の約 $\frac{1}{2}$ 程度しか遺存していない。想定口径は12.9cm、器高は4.3cm、想定底径は7.5cmである。成形はロクロ成形で、体部下半は手持ちヘラ削り調整を施す。底部は手持ちヘラ削り調整を施し、切り離し技法は不明である。色調は乳橙色で、胎土中には微細砂粒を多量に含み、焼成はややあまい。

3は土師器杯で、口縁部が $\frac{1}{2}$ 程度欠失しているだけである。口径は12cm、器高は3.7cm、底径は5.6cmをそれぞれ計る。体部内外面はナデで、体部下半は手持ちヘラ削り調整を施す。底部は手持ちヘラ削り調整である。体部外面にやや不鮮明であるが「石井」の墨書きが、杯を正立した状態で書かれている。色調は明褐色で、胎土中には微細な砂粒が含まれ、焼成は良好である。

4は土師器杯で、全体の $\frac{1}{2}$ 程度が遺存している。口径は12.6cm、器高は3.8cm、底径は6.2cm

をそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、外面にはロクロ痕を残し、体部下半は手持ちヘラ削り調整を施す。底部は不定方向への手持ちヘラ削り調整を施す。外面にスヌ状の付着物が見られる。色調は明褐色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。

5は土師器杯で、全体の%程度が遺存している。口径は14.5cm、器高は4.4cm、底径は6.4cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下半は手持ちヘラ削り調整を施す。内面は横方向で5単位のヘラ磨きを施す。底部は手持ちヘラ削り調整を施す。色調は赤褐色で、胎土中には砂粒が多く含まれ、その中にやや白色の砂粒が目立つ。焼成は良好である。

6は土師器杯で、口縁部から体部の一部まで約%が遺存している。推定口径は14.8cmを計る。成形はロクロ成形で、体部下半は手持ちヘラ削り調整を施す。内面は横方向のヘラ磨きを施す。色調は橙褐色で、胎土中には多量の微細砂粒と少量の赤色砂粒を含み、焼成は良好である。

7は土師器杯で、底部が%、それ以上については%程度の遺存である。推定口径は14cm、器高は4cm、底径は7cmを計る。成形はロクロ成形で、内面は横方向のヘラ磨きを施す。底部は不定方向へのヘラ削りを施す。色調は明褐色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。

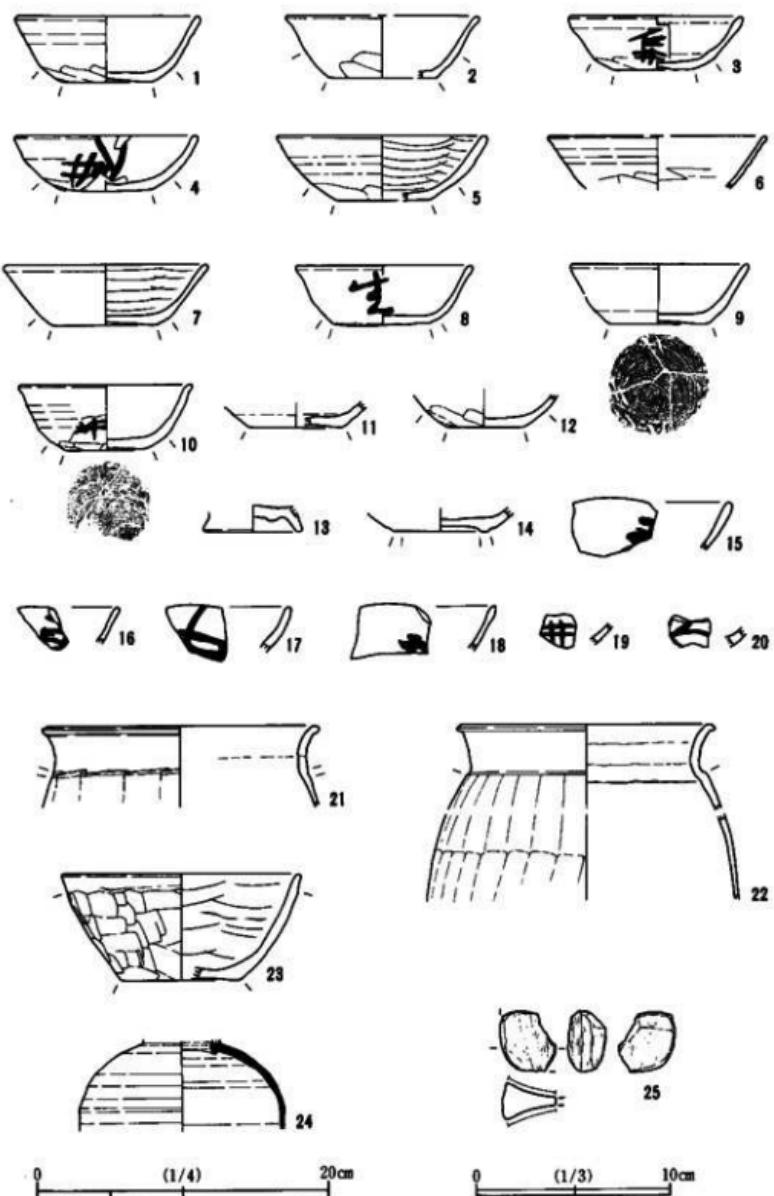
8は土師器杯で、全体の約%が遺存している。口径は12.4cm、器高は4cm、底径は6.6cmをそれぞれ計る。内外面共にナデを施し、底部は一定方向のヘラ削りを施す。体部外面に正立して「生」の墨書が見られる。色調は黄橙色で、胎土中には1mm前後の砂粒を含み、焼成は良好である。

9は土師器杯で、底部の全部とそれ以上については%程度の遺存である。推定口径は12.4cm、器高は4cm、底径は7cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、底部は右回転の回転糸切り離しの後、周縁部に一部ナデが施される。色調は褐色で、胎土中には赤色砂粒を含み、焼成は良好である。

10は土師器杯で、底部のほぼ全部と口縁部から底部の一部が遺存している。推定口径は11.8cm、器高は4.5cm、底径は5.8cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部外面にはロクロ痕が残る。体部下端部には手持ちヘラ削りが施される。底部は回転糸切り離し無調整である。体部外面の下半部には墨書が見られるが、文字は判読できない。また、周辺部分が欠けているので、前後あるいは左右に他の文字が続くのかどうかも分からぬ。色調は淡褐色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。

11は土師器杯で、底部と体部下端部の%程度が遺存しているだけである。現存高は1.6cm、底径は6.4cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内面にはロクロ痕が比較的明瞭に残る。底部は右回転の、回転糸切り離し無調整である。色調は暗褐色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。

12は土師器杯で、底部と体部下端部の%程度が遺存しているだけである。現存高は2.2cm、底径は5.2cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下半は手持ちヘラ削り調整を施す。底部



第14図 6号住居跡出土遺物実測図-1

は回転糸切り離しの後、不定方向への手持ちヘラ削り調整を施す。色調は黄褐色で、胎土中には赤色砂粒と微細な砂粒を含み、焼成は良好である。

13は内面黒色処理された土師器高台付椀で、高台部のみ遺存している。高台径6.8cmを計る。高台の接合部にはロクロナデが施されている。椀部内面はヘラ磨きが施されている。色調は乳橙色で、胎土中には微細砂粒と雲母粒が少量含まれ、焼成はややあまい。

14は土師器杯で、底部のみ $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定底径は6.6cmを計る。成形はロクロ成形で、底部は回転糸切り離し無調整である。底部は上げ底になっている。色調は淡褐色で、胎土中には多量の砂粒と少量の赤色砂粒が含まれ、焼成は良好である。

15~20は土師器杯の小破片で、外面に墨書きのみられるものである。15~18は口縁部で、19・20は体部下半部にあたる。

21は土師器壺で、全体の $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定口径は19cm、現存高は5.3cmをそれぞれ計る。口縁部内面はナデで、胴部内面はヘラナデを行う。胴部外面は縦方向のヘラ削り調整で、ヘラの當て初めのところは、意識的に強く押し付けて稜を作り出している。頸部内面には輪積み痕が残る。色調は褐色で、胎土中には砂粒が含まれ、焼成は良好である。

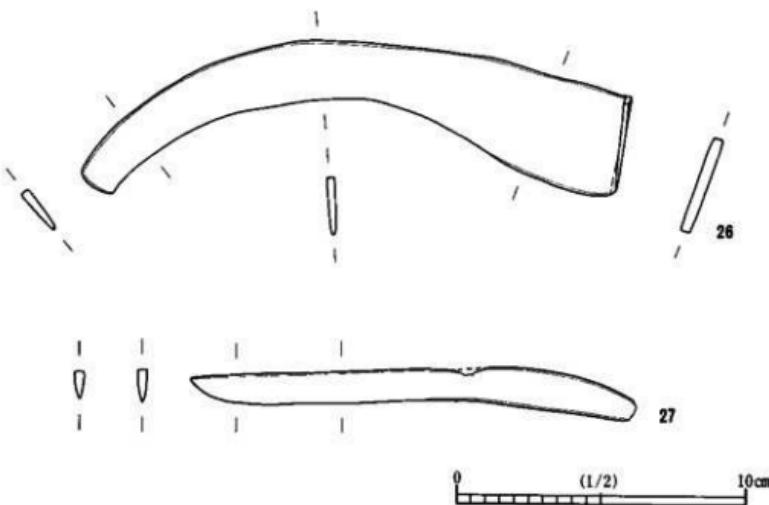
22は土師器壺で、全体の $\frac{1}{2}$ 程度が遺存している。口径は17.7cmを計る。口縁部内外面はナデで、胴部内面はヘラナデを施す。胴部外面は縦方向のヘラ削り調整で、壺を正立させた状態で、上半が下から上へ、中位が上から下へ行っている。口縁部と頸部内面に輪積み痕を残す。色調は淡褐色で、胎土中には1~2mmの小石と砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

23は土師器鉢で、全体の $\frac{1}{2}$ が遺存し、底部中央部が欠失する。口径は16.3cm、器高は7.2cm、底径は8cmをそれぞれ計る。口縁部外面はナデを施し、外面の口縁部以下の調整はヘラ削り痕を残し、やや凹凸が目立つ。内面はやや雜ではあるが、横方向のヘラ磨きを施す。底部は一定方向へのヘラ削りを施す。器面内外面の一部に輪積み痕を残す。色調は外面が明褐色で、内面が茶褐色で、胎土中には2mm前後の砂粒が少量とそれ以下の砂粒が多く含まれる。焼成は良好である。

24は須恵器長頸瓶で、肩部の破片資料である。頸部は二段接合である。内外面共に丁寧な回転ナデを施しており、ヌタ痕は頸部接合部付近のごく一部を除いてほとんど見られない。ロクロの回転方向については判然としない。外面の残存部全面に褐色味を帯びた淡緑色の灰釉が見られるが、頸部の付け根と胴部下半の釉が薄いなどの状況から、自然釉と考えられる。内面はほとんど無釉であるが、頸部のごく一部に降灰が認められる。色調は灰白色で、胎土中には1mm以下の長石粒を比較的多く含み、黒色の挟雜物も若干含む。焼成は良好である。

25は砥石の小破片である。現存で長さ3.1cm、幅2.9cm、厚さ1.9cm、重量12.8gを計る。二面が主に使用され、中央部がかなり擦り減っている。

26は鏡で、破損しているが、復元によりほぼ原形を知ることができる。長さは19.6cm、幅は



第15図 6号住居跡出土遺物実測図－2

鎌先で1.3cm、柄に近い部分で3.4cmで、厚さは平均で3mm程度で、柄に近い部分は4mmをそれぞれ計る。

27は刀子で、茎の部分が欠失している。現存長は15.5cm、幅は1.1cm、厚さは2.5cmをそれぞれ計る。

#### 7号住居跡（第13・16図）－3 Aイ003

調査区南東部のやや西寄りで、3A-59・69グリッドを中心とする平坦面に所在する。6号住居跡とは1m程の距離で接している。

**規模と形状** 規模は長辺約4.2m×短辺2.4～2.9mで、形状は長方形である。主軸方向はN-121°-Eである。壁溝及び柱穴は検出されなかった。検出面から床面までの深さは5cm前後と極めて浅い。床面は木の根などによる搅乱を受けており、遺存状態は余り良くない。また、貼床は明確に認められず、堀方面をそのまま床面にしているものと思われる。

カマドは南東壁の中央よりやや南に寄った位置に構築されている。主軸方向はN-125°-Eで、住居跡のそれとほぼ同じである。検出面からの掘り込みが浅いので、カマドの遺存状態は極めて悪く、袖部などはわずかに山砂が散っていた程度で、堀方が検出できたに止どまる。壁を一旦幅80cm、奥行き30cm程の三角形状に掘り込み、更に幅30cm前後、奥行き40cm程の長方形に掘り込んでいる。構築材は山砂及び粘土を用いている。底面は径1m、深さ約2cmの浅い皿状に掘り窪めている。

遺物の出土総点数は掘り込みが浅いこともあって少なく、図示できた遺物はカマド左脇から出土した1点のみである。

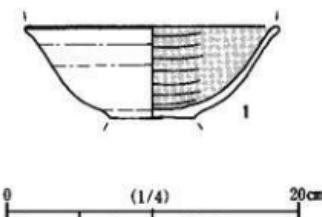
遺物 1は内面黒色処理された土師器碗で、口縁部から体部が1/6と底部がすべて遺存している。推定口径は17.4cm、器高は6.2cm、底径は5.8cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内面は横方向のヘラ磨きが施される。底部は手持ちヘラ削り調整が施される。底部はやや突出する。色調は褐色で、胎土中には2mm前後的小石と白色、黒色の砂粒が含まれ、焼成は良好である。

#### 8号住居跡（第17・18図）-3Bイ002

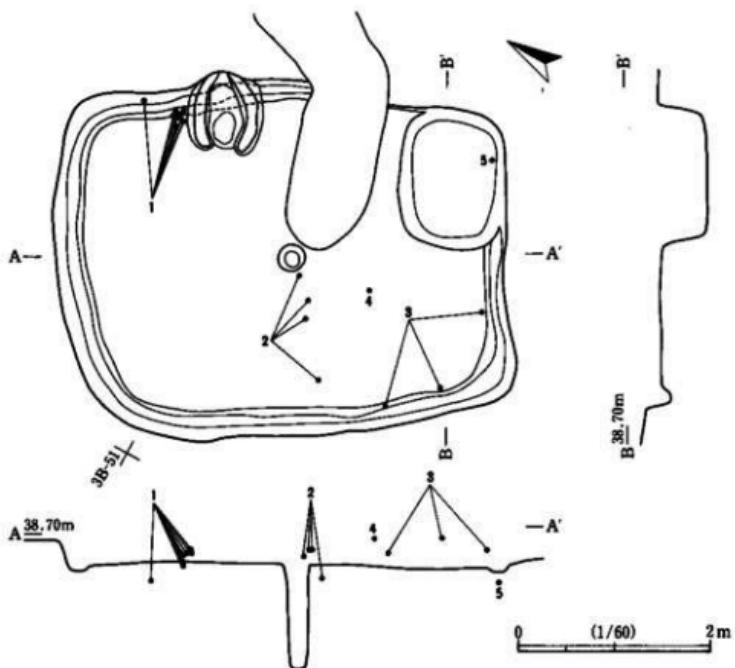
調査区の南寄りで、3B-53・63グリッドを中心とする地点に所在し、周辺は南東方向の谷に向かって緩やかに傾斜する。7号住居跡とは3~4mの距離で接している。東壁から住居跡の中央部にかけて、90cm程の幅で床面まで達する蒂状の攪乱を受けている。

規模と形状 規模は南北4.7m×東西3.7mで、形状は長方形である。主軸方向はN-60°-Eである。壁溝は南東コーナー部分を除いて検出され、幅は15~20cm、深さは6cm前後を計る。柱穴は検出されなかったが、住居跡のはば中央に径26cm、深さ50cmのピットを検出した。更に、南東コーナーに短辺1.1m、長辺約1.5m、深さ45cm前後を計る土壌を検出した。形状は隅丸の長方形である。底面はほぼ水平で平坦である。このピットと土壌は床面精査の段階では検出できず、貼床を除去して、堀方面の精査をしている段階で検出したものである。検出面から床面までの深さは深いところで25cm、浅いところで5cmを計る。カマドのある北東壁は、攪乱を受けていることもあり、立ち上がりはやや不明確である。壁の立ち上がりは直線的で、65°~70°の角度をもつ。床面はさほど堅く踏み固められていない。堀方は北西側のみ床面より下がり、貼床が施されている。このためこの部分が他に比べて床面が高くなっている。

カマドは北東壁の中央より北に寄った位置に構築されている。主軸方向はN-63°-Eで、住居跡のそれとほぼ同じである。構築材は山砂で、裾部は壁より手前に70cm前後の長さで検出した。火袋部の幅は35cm前後を計る。袖部内側及び火袋部底面は特に赤化している部分は認められなかった。煙道部底面は堀方のままである。堀方は壁をわずかに幅80cm、奥行き15cmの三角形状に掘り込み、煙道部は30°前後の角度にしている。底面は壁際の幅80cm、手前に50cm、深さ10cmの三角形状の浅い皿状に掘り窪めている。



第16図 7号住居跡出土遺物実測図



第17図 8号住居跡実測図

遺物の出土総点数はさほど多くなく、出土状態も特に集中しているところは見られない。1の土器はカマドの左側からまとまって出土し、6号土壙内出土土器と接合関係にある。3の土器は破片資料を復元したもので、壁際で出土位置も深くないことから、本住居跡に直接伴うものではないと思われる。この他に10cm前後の炉内滓が3点出土している。

遺物 1は内面黒色処理された土師器高台付き椀で、高台部の全てと椀部の $\frac{1}{4}$ が遺存している。推定口径は16.7cm、器高は7.4cm、高台径は7.1cm、高台高は1.4cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部外面にロクロ痕が残る。椀部内面には横方向のヘラ磨き調整が施され、体部外面の一部にも及んでいる。高台は貼り付けで、中央部は指頭によるナデつけが行われている。色調は明褐色で、胎土中には白色砂粒と多量の微細砂粒が含まれ、焼成は良好である。

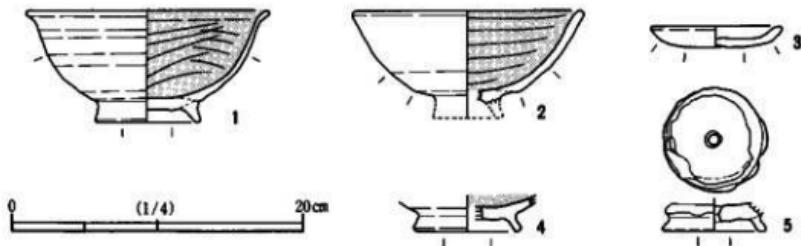
2は内面黒色処理された土師器高台付き椀で、椀部のみ $\frac{1}{4}$ 程度が遺存している。推定口径は16cm、現存高は6cm、底径は7.4cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内面には横方向のヘラ磨き調整が施される。体部中位以上にもヘラ磨きが及び、ロクロ痕を消している。高台部内面にも黒色処理が施されている。色調は明褐色で、胎土中には白色砂粒を含み、焼成は良好で

ある。

3は土師質土器の小皿で、全体の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定口径は9cm、器高は1.4cm、底径は4cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、底部は右回転の回転糸切り離し無調整である。この糸切り痕が体部下半部に残っている。色調は明褐色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。

4は内面黒色処理された土師器高台付き椀で、椀部底部と高台部の $\frac{1}{2}$ が遺存している。現存高は2.5cm、推定高台径は7.4cmを計る。成形は右回転のロクロ成形で、椀部内面にはヘラ磨き調整が施され、体部外面と高台部はナデ調整である。色調は橙褐色で、胎土中には多量の雲母粒と砂粒が含まれ、焼成は良好である。

5は紡錘車で、土師器高台付き椀の高台部の底部中央部に孔を開けて、転用したものである。高台径は7.1cm、高台高は8mmを計る。杯部内面はヘラ磨き調整が施され、高台部はナデである。孔は両側から開け、孔径は上部で1.1cm、下部で0.8cmを計り、ほぼ中心部に稜を作る。色調は赤褐色で、胎土中には雲母粒と砂粒を含み、焼成は良好である。



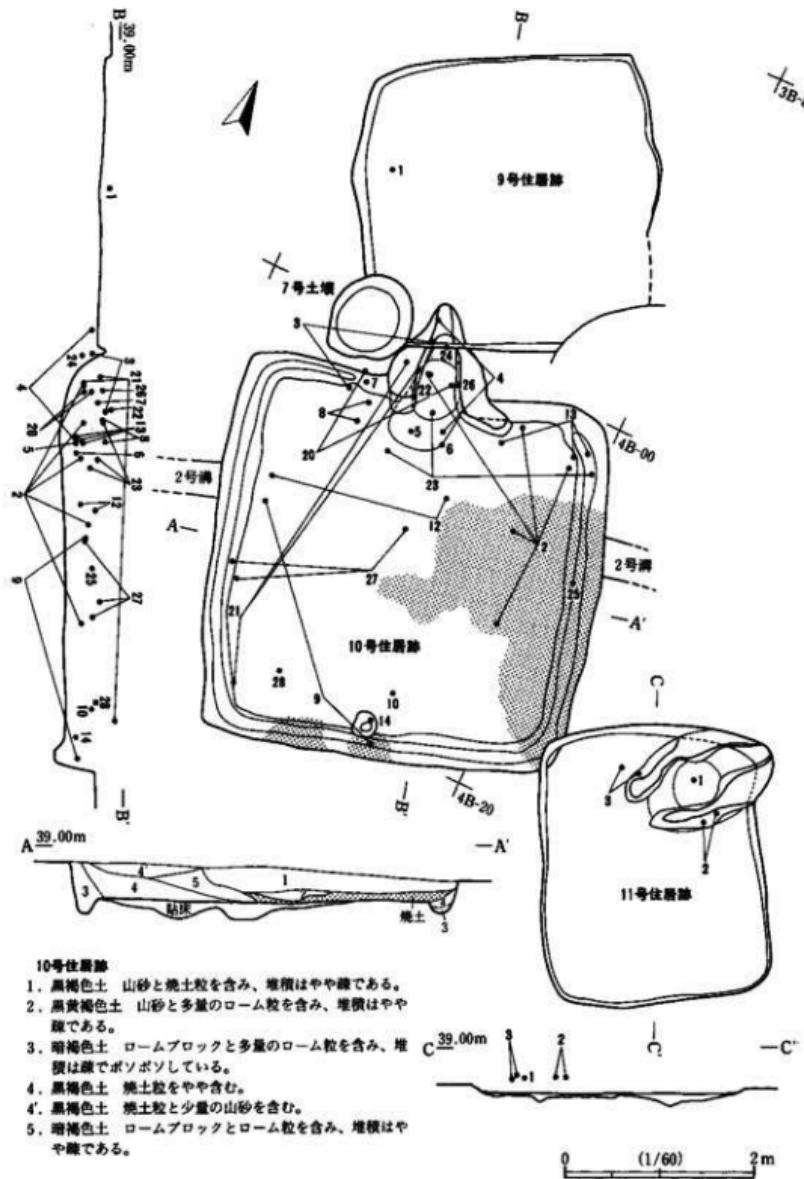
第18図 8号住居跡出土遺物実測図

#### 9号住居跡 (第19・20図・図版4) - 3Aイ004A

調査区の南西部で、3A-98・99グリッドを中心とする平坦面に所在する。7号住居跡から南に2mの距離で、南東壁部分で10号住居跡のカマドを壊して構築している。更に、南西コーナーは7号土壤によって切られている。南東コーナーは搅乱を受けており、壁は検出できなかった。

**規模と形状** 規模は一辺約3.1mで、形状は正方形である。主軸方向はN-64°-Eである。壁溝及び柱穴は検出されなかった。検出面から床面までの深さは8cm前後と非常に浅い。床面はさほど堅くなく、堀方面をそのまま踏み締めて床面にしている。床面は平坦であるが、北から南に向かって最大で10cm程傾斜している。

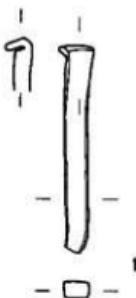
カマドは検出できなかった。当初、北西壁のほぼ中央部に山砂と焼土粒が散っていたので精



査してみたが、カマドと判断できる根拠は見出だせなかった。

遺物の出土点数は少なく、土器はいずれも小さい破片資料ばかりで、図示できるものはなかった。

遺物 1は角釘で、先の部分を欠失している。現存長は7.2cm、幅は8mm、厚さは5mmをそれぞれ計る。頭部は1cm程直角に折れ曲がる。



第20図 9号住居跡出土遺物実測図

#### 10号住居跡（第19・21・22図・図版4）-3 Aイ004B

調査区南西で、4A-8・9・18・19グリッドを中心とする地点に所在し、周辺は東側に緩やかに傾斜していく。カマドの一部を9号住居跡に、南東コーナーを11号住居跡に切られている。更に、住居跡のほぼ中央部を東西方向に2号溝によって切られるが、床面までは達していない。北西壁から中央部付近までの範囲と南東壁際の一部に、床面に密着する形で焼土を検出した。しかし、炭化材はほとんど見られなかった。

**規模と形状** 規模は南北3.9~4m×東西3.9~4.1mで、形状は東西壁の中央部がわずかに膨らむ正方形である。主軸方向はN-18°-Wである。壁溝は北東コーナーからカマドの左側までを除いて検出され、幅は20~25cmで、深さは12~15cmを計る。柱穴は検出されなかつたが、カマドの反対側の壁溝に一部掛かる位置に、径20cm、深さ35cmのピットを検出した。検出面から床面までの深さは深いところで36cm、浅いところで20cmを計る。壁の立ち上がりは直線的で、75°~80°の角度をもち、ほぼ直角な部分もある。床面は全体的に比較的堅く踏み固められている。堀方はおおむね浅いが、西側が比較的深く、大きな凹凸が認められるが、貼床を施して床面を水平にしている。

カマドは北西壁のほぼ中央に構築されている。主軸方向はN-17°-Wで、住居跡のそれとはほぼ同じである。堀方は壁を上部幅1.05m、底面幅65cmで、奥行き1.1mの三角形状に掘り込んでいる。構築材は山砂と暗褐色土の混合土である。裾部は壁より手前35cm前後の長さで検出した。火袋部の幅は40cm前後を計る。袖部内側はやや不明瞭であるが、火袋部底面は赤化している部分が認められた。煙道部底面は堀方の段階では50°の角度をもっているが、煙道部から火袋部にかけて、底面に10cm程の厚さで山砂を貼り付けており、煙道部を35°前後の角度にしている。また、火袋部では土製支脚をそれによって埋込んで固定している。底面は堀方の段階では浅い皿状に掘り窪められている。この土製支脚から、掛け口は煙道部端部から65cm内側の位置にあ

ったと推定できる。

遺物の出土総点数は多いが、破片資料がほとんどである。図示できたものも完形品ではなく、比較的床面から浮いた状態で、床面上にみられた焼土より上面で出土している。

遺物 1は土師器杯で、底部が $\frac{1}{4}$ と口縁部から体部の一部が遺存している。推定口径は13.3cm、器高は4.3cm、推定底径は6.3cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内外面共にナデ調整を施す。体部下半は手持ちヘラ削り調整を施す。底部は一定方向への手持ちヘラ削り調整が施される。色調は橙褐色で、胎土中には砂粒が含まれ、焼成は良好である。

2は土師器杯で、全体の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。口径は16.4cm、器高は5.3cm、底径は7cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下半は手持ちヘラ削り調整が施される。内面は全面に丁寧なヘラ磨きが施される。底部は回転糸切り離しの後、不定方向への手持ちヘラ削り調整を施す。色調は黄褐色で、胎土中には微細砂粒を含み、焼成は良好である。

3は土師器杯で、全体の $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定口径は15.2cm、器高は4cm、推定底径は6.9cmをそれぞれ計る。体部外面はナデで、下端部はヘラ削り調整が施されている。体部内面はヘラ磨きが施される。しかし、内外面共に摩滅あるいは剥離がみられ、いずれもやや不明瞭である。底部は回転糸切り離し無調整である。色調は明褐色で、胎土中には赤色砂粒が少量含まれ、焼成はやや軟質である。

4は土師器杯で、全体の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定口径は12.3cm、器高は4.3cm、推定底径は5.6cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、底部は回転糸切り離し無調整である。色調は黄褐色で、胎土中には微細砂粒を含み、焼成は軟質である。

5は土師器杯で、口縁部から体部までは $\frac{1}{2}$ 程度で底部は全て遺存している。推定口径は12.8cm、器高は4.1cm、底径は6.2cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下端は手持ちヘラ削り調整を施す。底部は右回転の回転糸切り離し無調整である。色調は明褐色で、胎土中には白色砂粒を含み、焼成は良好である。

6は土師器杯で、口縁部の一部を欠失する。口径は12.7cm、器高は4.1cm、底径は6.8cmをそれぞれ計る。底部はやや上げ底になる。成形はロクロ成形で、外面にロクロ痕を残す。体部下半にはナデが施されている。底部は回転糸切り離し無調整である。また、底部には窯印と思われる、焼成前の線刻が見られる。体部外面には、「井」の墨書きが杯を正立させた状態で書かれている。文字の上部は欠失している。色調は明褐色で、胎土中には微細砂粒を多く含み、焼成は良好である。

7は土師器杯で、全体の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定口径は13cm、器高は3.8cm、底径は6.2cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内外面にロクロ痕を残す。体部下半は手持ちヘラ削り調整を施す。底部は右回転の回転糸切り離し無調整である。色調は明黄褐色で、胎土中には多量の微細砂粒と赤色砂粒を含み、焼成は良好である。

8は土師器杯で、全体の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定口径は12.1cm、器高は4.5cm、推定底径は6.9cmをそれぞれ計る。口縁部と内面はナデ調整で、体部は手持ちヘラ削り調整を施す。底部は手持ちヘラ削り調整を施す。色調は淡褐色で、部分的に黒班が見られる。胎土中には少量の雲母粒と多量の微細砂粒を含み、焼成は良好である。

9は土師器杯で、口縁部から体部の $\frac{1}{4}$ 弱が遺存している。推定口径は11cmを計る。成形はロクロ成形で、体部下半は手持ちヘラ削り調整を施し、更にナデを行う。色調は乳橙色で、胎土中には少量の赤色砂粒と多量の微細砂粒が含まれ、焼成は良好である。

10は土師器杯で、口縁部から体部の $\frac{1}{4}$ が遺存している。推定口径は12.3cmを計る。成形はロクロ成形で、体部下半にナデ調整を施す。色調は乳橙色で、胎土中に少量の赤色砂粒と多量の砂粒を含み、焼成は良好である。

11は土師器杯で、口縁部から体部の一部までの $\frac{1}{4}$ 程度が遺存している。推定口径は13.4cmを計る。成形はロクロ成形である。色調は暗橙褐色で、胎土中には微細砂粒を少量含み、焼成は良好である。

12は土師器杯で、底部の $\frac{1}{2}$ と体部の一部が遺存している。現存高は3.4cm、推定底径は6.8cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、底部内面には弱いヘラ磨きが施される。体部下半は手持ちヘラ削り調整が施される。底部は回転糸切り離し無調整である。色調は淡褐色か暗褐色で、胎土中には多量の微細砂粒が含まれ、焼成は良好である。

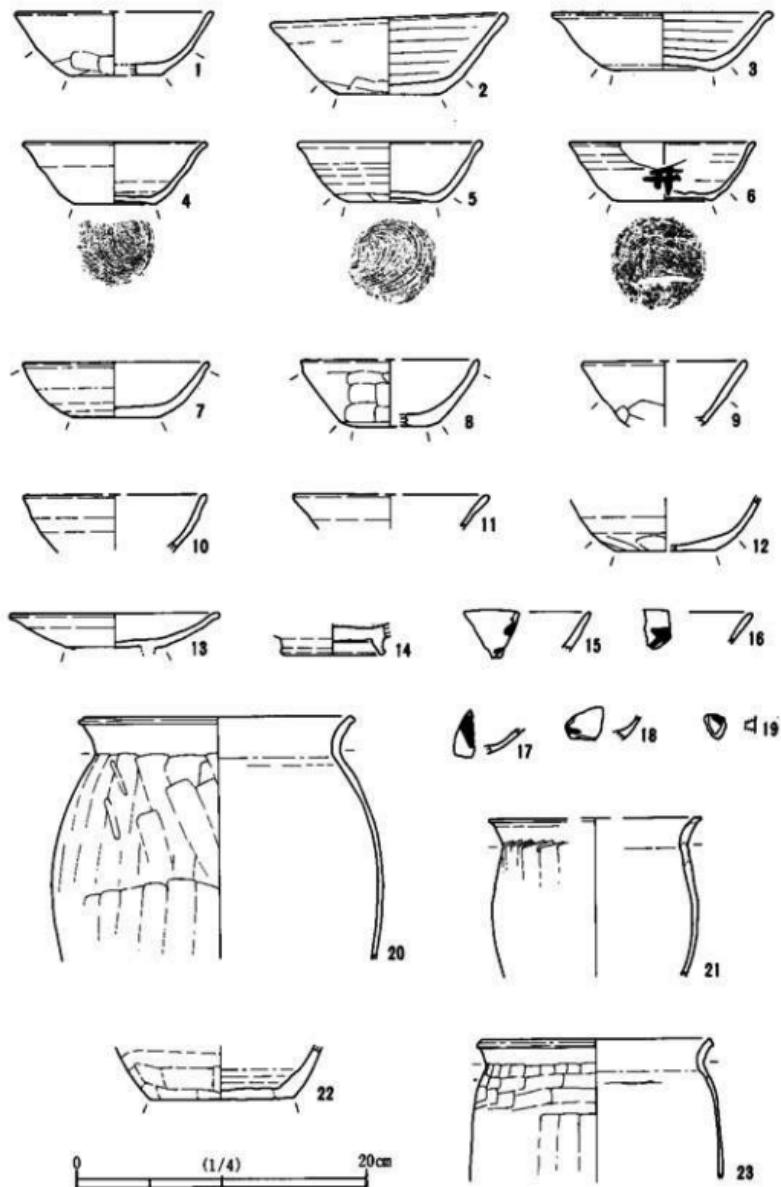
13は土師器の高台付き皿で、底部の約 $\frac{1}{2}$ と口縁部から体部の一部が遺存している。推定口径は14cmで、推定の接合部分での高台径は5.5cm、皿部の器高は2.3cmを計る。成形はロクロ成形で、内面には横方向のヘラ磨きが施される。底部は回転糸切り離しで、体部下端部はヘラ削り調整を施す。高台は貼り付けである。色調は橙褐色で、胎土中には微細砂粒を多く含み、焼成は良好である。

14は内面黒色処理された土師器高台付き碗で、高台部分のみが遺存している。高台径は7cm、高台高は1.1cmをそれぞれ計る。内面は弱いヘラ磨き調整が施され、高台部は全面にナデ調整が施される。色調は乳橙色で、胎土中には微細砂粒が多量に含まれ、焼成はややあまい。

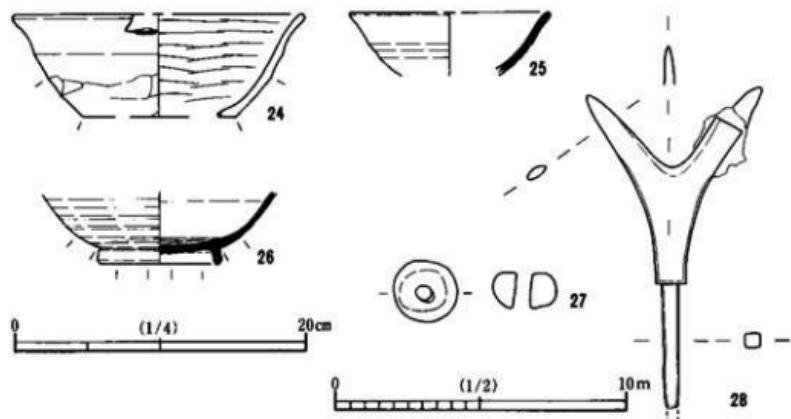
15~19は土師器杯の小破片で、外面に墨書きのみられるものである。15~16は口縁部で、17~19は体部下半部である。

20は土師器甕で、口縁部の $\frac{1}{4}$ と胴部の一部が遺存している。推定口径は19cm、現存高は16.1cm、胴部最大径は22.8cmをそれぞれ計る。口縁部内外面はナデで、胴部内面はヘラナデを施す。胴部外面は甕を正立させた状態で、中位以上は下から上へ、それ以下は上から下へのヘラ削り調整を施す。色調は淡褐色で、胎土中には多量の砂粒と赤色砂粒を含み、焼成は良好である。

21は土師器甕で、胴部の $\frac{1}{2}$ と口縁部の一部が遺存している。想定口径は14.5~15cm、現存高は10.5cmをそれぞれ計る。口縁部内外面はナデで、胴部内面は横方向の荒いナデが施され、器



第21図 10号住居跡出土遺物実測図－1



第22図 10号住居跡出土遺物実測図-2

面全体に細かな凹凸が残る。胴部外面は下から上へのヘラ削り調整を施す。頸部のヘラを離すところは意識的に強く當て、溝状の痕跡が残る。色調は淡褐色で、胎土中には1~2mmの小石を少量含み、焼成は良好である。

22は土師器壺の底部と胴部の一部である。約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。現存高は3.6cm、底径は9.8cmをそれぞれ計る。内面はナデ、外面はヘラ削り調整を施す。底部は器面が荒れており、調整等は不明である。色調は明褐色で、胎土中には2~3mmの小石と砂粒を含み、焼成は良好である。

23は土師器壺で、胴部上半以上の約 $\frac{1}{4}$ 程度が遺存している。推定口径は15.8cm、現存高は9.7cmをそれぞれ計る。口縁部内外面はナデで、胴部内面はヘラナデ調整を施している。外面は、頸部直下が下から上へ、以下は横方向、中位以下は上から下へのヘラ削り調整を施す。胴部内面には輪積み痕が残る。器壁は他に比べ薄く作られている。色調は灰褐色で、胎土中には砂粒を少量含み、焼成は良好である。

24は土師器鉢で、全体の約 $\frac{1}{4}$ が遺存している。推定口径は19.5cm、器高は7cm、推定底径は10.4cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内面には横方向のヘラ磨きが施される。体部下半は手持ちヘラ削り調整が施される。底部はヘラ切りである。口縁部付近の外面に墨痕が見られる。色調は淡褐色で、胎土中には多量の赤色砂粒などが含まれ、焼成は良好である。

25は須恵器杯で、口縁部から体部の $\frac{1}{4}$ が遺存している。推定口径は13.5cmを計る。成形はロクロ成形である。色調は黒褐色で、いわゆる土師質須恵器である。胎土中には雲母粒と大量の微細砂粒が含まれ、焼成は良好である。

26は灰釉の高台付き碗である。底部と体部の一部が遺存している。現存高は4.8cm、高台径は

4.5cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下端は回転ヘラ削り調整を施す。底部は回転糸切り離しの後、回転ヘラ削り調整を施す。高台は貼り付けで、外面の接合部は回転しながらヘラによる押さえを行い、その後内外面にロクロナデ調整を施す。底部内面には重ね焼きの際の溶着が残る。施釉方法は刷毛塗りで、底部内面は重ね焼部分を円形に塗り残したうえで、更にその中を一塗りしている。釉調は淡横緑褐色に発色し、微発泡が見られる。色調は明灰白色で、胎土は緻密で、1mm前後の長石粒を含み、焼成は良好である。

27は球状土錠で、ほぼ完形である。長さ2.2cm、幅2cm、厚さ1.1cmをそれぞれ計る。やや偏平な形状をしている。

28は雁股系の鐵で、両先端部が折れており、片方は銷で本体に着いている。茎はほぼ原形をとどめているものと思われる。想定される全長は約13cmで、身の長さは9cmを計る。闊の部分の幅と厚さは1cmと5mmで、茎は5mmのほぼ正方形である。

#### 11号住居跡（第19・23図・図版2）-4 Bイ001

調査区の南西で、4B-10・11・20・21グリッドの地点に所在し、周辺は南側に緩やかに傾斜する。10号住居跡とはほぼ同じ向きをもち、南西コーナーで10号住居跡の南東コーナーを切っている。

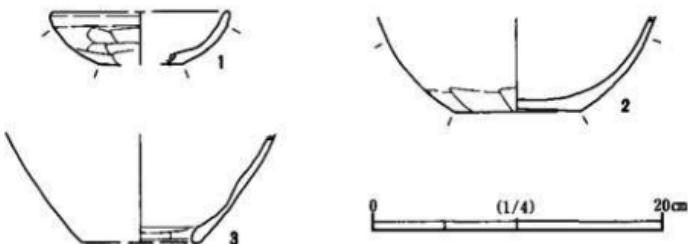
規模と形状　規模は南北2.9m×東西2.3mで、形状は長方形である。主軸方向はN-60°-Eである。壁溝及び柱穴は検出できなかった。検出面から床面までの深さは5cm未満と浅く、南側の壁の立ち上がりはやや不明確である。床面は中央部が幾分踏み固められている程度である。堀方は浅く、深いところで床面から15cm位で、貼床を施している。

カマドは北東コーナーに構築されている。主軸方向はN-39°-Eで、住居跡の中央よりもやや西側を向いている。住居跡の掘り込みが浅いため遺存状態は良くない。構築材は山砂と粘土の混合土で、裾部は壁より手前に1.1m前後の長さで検出した。火袋部の幅は40cm前後を計る。左側袖部の内側だけがわずかに赤化していた。堀方はコーナー部と言うよりは、東壁をわずかに幅65cm、奥行き40cmの三角形状に掘り込んでいる。底面は長径1.2m、短径約90cm、深さ5cm前後の浅い皿状に掘り窪めている。

遺物の出土総点数は少なく、比較的カマド周辺に集中している。

遺物　1は土師器杯で、全体の約1/4が遺存している。推定口径は11.9cm、器高は3.7cm、推定底径は5.6cmをそれぞれ計る。内面と口縁部外面はナデで、体部は手持ちヘラ削り調整が施され、底部も手持ちヘラ削り調整が施される。色調は橙褐色で、胎土中には多量の雲母粒と微細砂粒を含み、焼成は良好である。

2は土師器壺で、底部の1/3と胴部の一部が遺存している。推定底径は8.6cm、現存高は6.5cmを計る。内面はナデであるが、円形の剥落が著しい。胴部外面はヘラ削り調整を施すが、下端



第23図 11号住居跡出土遺物実測図

部はかなり明確にヘラ削り痕が残っている。また、中位以上はヘラ磨きないしへラナデを行っている。底部はヘラ削り調整を施す。色調は褐色で、胎土中には1mm前後の砂粒と白色砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

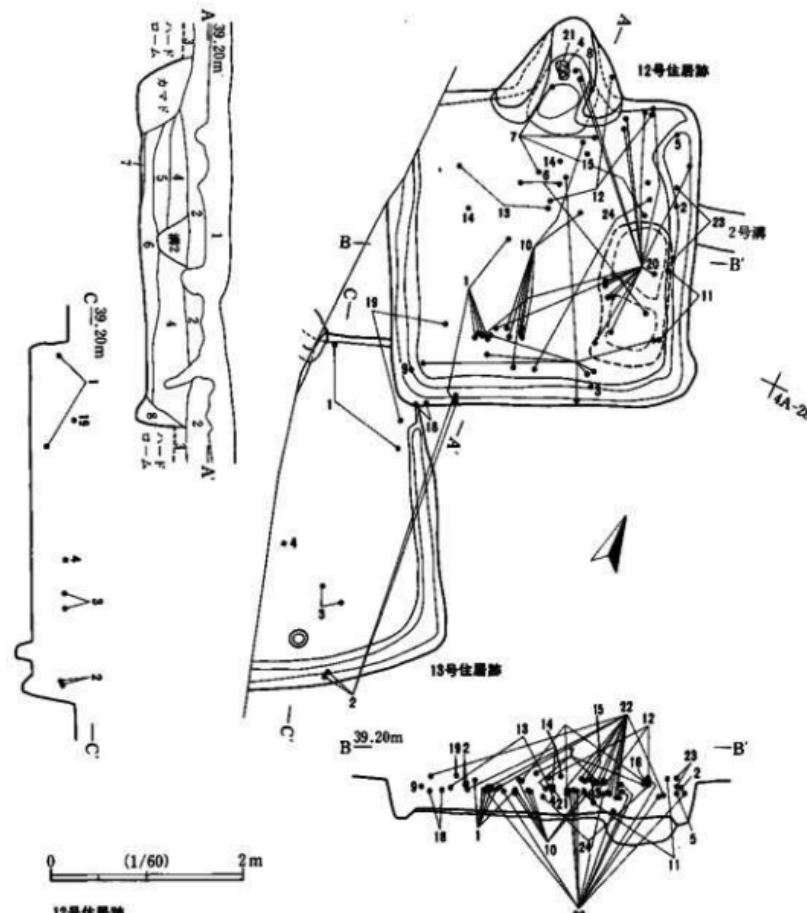
3は土師器の一孔式の瓶で、底部付近の $\frac{1}{4}$ 前後が遺存している。現存高は7.5cm、推定底径は8cmを計る。内面はヘラナデであるが、やや凹凸が見られる。外面もヘラナデであるが、比較的丁寧で綺麗に仕上げられている。孔の部分はヘラ削りのままで、一部粘土の余り土を無調整のままにしているところがある。色調は赤褐色で、胎土中には少量の螢母粒と白色砂粒、砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

#### 12号住居跡（第24～26図・図版4・5）－4A-I 001A

調査区の南西隅で、3A-27・37グリッドを中心とする地点に所在する。北西コーナーは調査区外に及んでいるため未検出である。10号住居跡の西側2m程の距離で、南西コーナーで13号住居跡の北西コーナーを切っている。また、10号住居跡同様に2号溝によって住居跡のほぼ中央部を切られている。

**規模と形状** 規模は一辺3.2mで、形状は正方形である。主軸方向はN-25°-Wである。壁溝はカマドのある北壁部分を除いて検出され、幅は20cm前後、深さは8～15cmを計る。柱穴は検出されなかった。堀方面を精査している段階で、東壁に沿って長さ1.5m、幅70cm、深さ25～30cmの土壤を検出した。底面は北側半分が10cm程高くなっている。この土壤は検出した状況などから、床面を形成した時点では完全に埋め戻されていたと考えられる。検出面から床面までの深さは35cm前後を計る。壁の立ち上がりは直線的で、80°～85°の角度をもち、ほぼ直角に立ち上がっている。床面はさほど堅く踏み固められていない。堀方面は全体に浅く、床面からは5cm前後しか下がらない。

カマドは北壁の中央に構築されている。主軸方向はN-15°-Wで、住居跡のそれとほぼ同じである。構築材は山砂と粘性の強い暗褐色土の混合土で、スサを混入している。堀方は壁を幅



12号住居跡

1. 表土
2. 黒褐色土 柔らかくカカフカした所と比較的締まっている所がある。
3. ソフトローム
4. 黒褐色土 略量の焼土粒・灰化粒と少量のローム小ブロック・ローム粒が含まれ比較的よく締まっている。
5. 茶褐色土 黒褐色土にカマドから流出した山砂が多量に混ざる。
6. 暗褐色土 黒褐色土と汚れたローム土が混ざり合った層で、比較的よく締まる。
7. 暗褐色土 焼土粒・炭化粒と多量の山砂を含む。
8. 茶褐色土 汚れたローム土で盤の崩落土。

第24図 12号・13号住居跡実測図

約1m、奥行き85cmの三角形状に掘り込み、煙道部は35°前後の角度にしている。断面形は逆台形である。裾部は壁より手前に30cm前後の長さで検出した。火袋部の幅は40cm前後を計る。底面は長径85cm、短径60cm、深さ5cm前後の浅い皿状に掘り窪めている。カマド内の遺物の出土状態から、掛け口は煙道部端部から内側に70cm程の位置にあったものと考えられる。

遺物の出土総点数は多いが、カマド内から出土したもの以外は床面から浮いた状態であった。カマド内からは、土製支脚が正立した状態で出土し、その奥からは、支脚からずり落ちたかのような状態で4と21の土器が出土した。

遺物 1は土師器杯で、全体の約半分が遺存している。推定口径は12.6cm、器高は4.6cm、推定底径は6cmを計る。成形はロクロ成形で、体部外表面にはロクロ痕が残る。体部下半部は手持ちヘラ削り調整が施され、底部は回転糸切り離しの後、周縁部に手持ちヘラ削り調整が施される。色調は茶褐色で、胎土中には細砂粒を含み、焼成は良好である。

2は土師器杯で、口縁部の一部を欠失する。口径は12.9cm、器高は4.2cm、底径は5.8cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部内外表面にロクロ痕が残る。体部下半には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は不定方向へのヘラ削り調整が全面にわたって施されているため、切り離し技法は不明である。色調は明褐色で、胎土中には赤色砂・白色砂・石英粒などを多く含み、焼成は良好である。

3は土師器杯で、底部は完存し、口縁部から体部は%が遺存している。推定口径は12cm、器高は4.2cm、底径は5.4cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下半には手持ちヘラ削り調整を施す。底部は回転糸切り離しの後、一部手持ちヘラ削り調整を施す。色調は明褐色で、胎土中には白色砂粒と石英粒が含まれ、焼成は良好である。

4は土師器杯で、全体の約%が遺存している。口径は13cm、器高は4.2cm、底径は6.3cm、をそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下半には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は回転ヘラ切り離しの後、一定方向へのヘラ削り調整が施される。色調は赤褐色で、胎土中には赤色砂粒と微細砂粒が含まれ、焼成は良好である。

5は土師器杯で、底部の%，口縁部から体部の%が遺存している。推定口径は12.4cm、器高は4.3cm、底径は5.2cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内面にはやや斜め方向のヘラ磨きが施される。体部下端部には手持ちヘラ削りが施される。底部は右回転回転糸切り離し無調整である。底部はやや上げ底になっている。色調は明褐色で、胎土中には微細砂粒が含まれ、焼成は良好である。

6は土師器杯で、底部の全てと口縁部及び体部の一部が遺存している。推定口径は19cm、器高は6cm、底径は7.6cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部外表面に弱いロクロ痕が残る。内面は横方向のヘラ磨きが施される。底部内面は直交する二方向のヘラ磨きが施される。体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は直交する二方向の手持ちヘラ削り調整が施

される。色調は橙褐色で、胎土中には少量の赤色砂粒と微細砂粒が多量に含まれ、焼成は良好である。

7は土師器杯で、全体の約前後が遺存している。推定口径は15.3cm、器高は5.5cm、底径は7.2cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部中位以下は手持ちヘラ削り調整を施す。底部は直交する二方向への手持ちヘラ削り調整を施す。色調は橙褐色で、胎土中には1~2mmの砂粒を含み、焼成は不良である。

8は内面黒色処理された土師器杯で、ほぼ完形である。口径は12.5cm、器高は4.4cm、底径は5.5cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内面には横方向の一一周5単位のヘラ磨きが施される。体部下端部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は回転糸切り離しの後、手持ちヘラ削り調整が施される。色調は淡褐色で、胎土中には微細砂粒が少量含まれ、焼成は良好である。

9は内面黒色処理された土師器杯で、全体の約程度が遺存している。推定口径は15.1cm、器高は4.6cm、底径は7.2cmをそれぞれ計る。内面は横方向のヘラ磨きが施されているが、単位などは不明である。体部外面はほぼ全面にわたって横方向のヘラ削りが施されている。底部は手持ちヘラ削りが施され、体部のものも含め比較的丁寧な調整が行われている。色調は赤褐色で、胎土中には2~3mmの小石と白色砂粒を含み、焼成は良好である。

10は内面黒色処理された土師器杯で、全体の約が遺存している。推定口径は13.2cm、器高は4.3cm、推定底径は5.8cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内面には斜め方向のヘラ磨きが施される。内外面にロクロ痕が残る。底部は右回転糸切り離しの後、周縁部に手持ちヘラ削り調整が施される。色調は黒褐色で、胎土中には微細砂粒が含まれ、焼成は良好である。

11は土師器杯で、口縁部と体部の約が遺存している。推定口径は14.5cm、現存高は4.1cmを計る。成形はロクロ成形で、体部下半部は手持ちヘラ削り調整が施される。色調は橙褐色で、胎土中には少量の赤色砂粒と1~2mmの砂粒を含み、焼成は良好である。

12は土師器杯で、口縁部と体部の約が遺存している。推定口径は12.9cm、現存高は3.4cmを計る。成形はロクロ成形で、体部下半部はヘラ削りの後ナデ調整を施す。色調は橙褐色で、胎土中には1~2mmの砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

13は土師器杯で、口縁部から体部の約が遺存している。推定口径は12.4cm、現存高は5cmを計る。口唇部と内面はナデで、体部外面はヘラ削り調整が施される。色調は暗褐色で、胎土中には1~2mmの砂粒が多量に含まれ、焼成は良好である。

14は須恵器杯で、底部から体部の約が遺存し、同一個体と思われる口縁部とで全体の器形を復元したものである。推定口径は13.4cm、推定器高は4.5cm、底径は6.7cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、外面にはロクロ痕が残る。底部下半部は手持ちヘラ削りが施される。底部は直交する二方向への手持ちヘラ削り調整が施され、ヘラによるものと思われる「エ」字状の浅い線刻が見られる。色調は暗灰褐色で、胎土中には少量の赤色砂粒と多量の白色砂粒が含ま

れ、焼成は良好である。

15は土師器の高台部分である。径は7.3cm、高台高は1.5cmを計る。杯部内面は一方へのヘラ磨きが施され、底部は回転糸切り離しの後、ナデを施す。色調は淡褐色で、胎土中には微細砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

16は土師器杯の小破片で、外面に墨書きがみられる。体部中央部付近と思われる。

17は土師器甕で、口縁部から胴部上半部の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。口径は14.8cm、現存高は10.7cm、胴部最大径は中位よりやや上にあり15.8cmをそれぞれ計る。口縁部内外面はナデで、内面はヘラナデ、外面は縦方向で、中位以下は横方向のヘラ削り調整を施す。色調は黒褐色で、胎土中には雲母粒と微細砂粒を含み、焼成は良好である。

18は土師器甕で、口縁部から胴部上半の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定口径は15cm、現存高は7.5cm、胴部最大径は14.6cmをそれぞれ計る。内面と口縁部外面はナデで、外面は斜め方向のヘラ削り調整を施す。色調は暗赤褐色で、胎土中には白色砂粒を含み、焼成は良好である。

19は土師器甕で、底部から胴部の一部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。現存高は14.5cm、推定底径は7.2cmを計る。胴部内面はヘラナデを行い、ヘラの當て痕が残る。胴部外面は縦方向のヘラ磨きが施され、スヌ状の付着物がみられる。底部は土器製作時の圧痕（木葉痕か）がみられる。色調は灰褐色で、胎土中には雲母粒と少量の砂粒を含み、焼成は良好である。

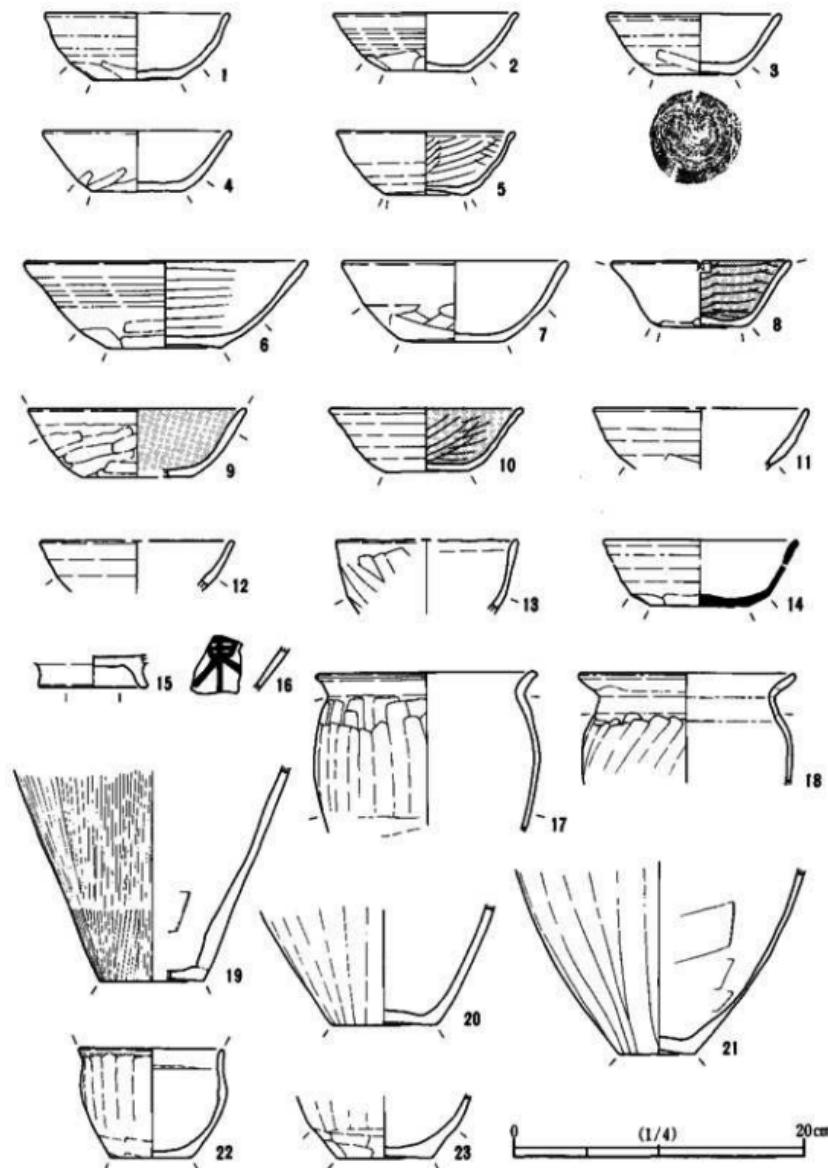
20は土師器甕で、底部から胴部の一部の $\frac{1}{2}$ が遺存している。現存高は8.2cm、底径は7.2cmを計る。胴部内面はヘラナデで、底部内面は指頭によるナデが施される。胴部外面は縦方向で、土器を正立させて下から上へのヘラ削りを施す。底部は土器製作時の圧痕が残り、凹凸がみられる。色調は暗褐色で、胎土中には微細砂粒を少量含み、焼成は良好である。

21は土師器甕で、底部から胴部下半の $\frac{1}{2}$ 程度が遺存している。現存高は12.5cm、底径は5.2cmを計る。胴部内面は横方向のヘラナデを行い、ヘラの當て痕が残る。底部内面は指頭によるナデが施される。胴部外面は縦方向のヘラ削りが施され、底部は土器製作時の圧痕が残り、凹凸が著しい。色調は赤褐色で、胎土中には少量の雲母粒と多量の砂粒を含む。焼成は良好である。

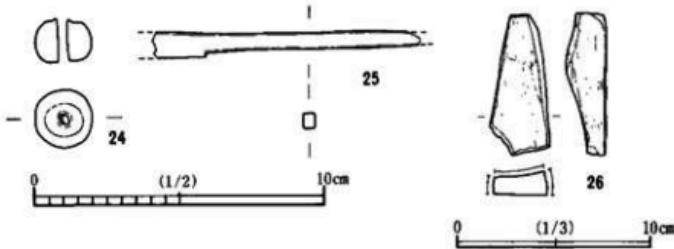
22は土師器鉢で、全体の $\frac{1}{2}$ が遺存している。口径は10cm、器高は7.4cm、底径は5.5cmをそれぞれ計る。内面はナデ調整が施され、ナデ痕が明瞭に残っている。外面は縦方向のヘラ削りで、底部付近は横方向のヘラ削りに変わる。そして更に軽くヘラ磨きが施される。底部は不定方向へのヘラ削りが施される。色調は赤褐色で、胎土中には微細砂粒が含まれ、焼成は良好である。

23は土師器甕で、底部のみが遺存している。底径は6.7cm、現存高は4.3cmを計る。内面はヘラナデで、外面は縦方向で、底部付近が横方向のヘラ削り調整が施される。底部には土器製作時のものと思われる圧痕が残る。色調は明黄褐色で、胎土中には微細砂粒が含まれ、焼成は良好である。

24は球状土錘で、完形品である。縦横の長さは2cmで、厚さは1.5cmを計る。孔径は4mmで、



第25図 12号住居跡出土遺物実測図-1



第26図 12号住居跡出土遺物実測図－2

一方向から開けられている。

25は刀子で、茎と刃部の一部が遺存する。現存長は9.3cmで、茎の長さは7.5cmを計る。茎の幅は5mm、厚さは4mmを計る。刃部の幅は8～9mmを計る。

26は砥石の小破片である。現存で長さ7.3cm、幅3.1cm、厚さ2.0cm、重量42.6gを計る。三面が使用され、中央部が擦り減って細くなっている。

#### 13号住居跡（第24・27図・図版5）－4 A 1001B

調査区の南西隅で、4 A-37グリッドを中心とする地点に所在し、西側のほぼ半分は調査区域外に入っている。北東コーナー部分を12号住居跡によって切られている。

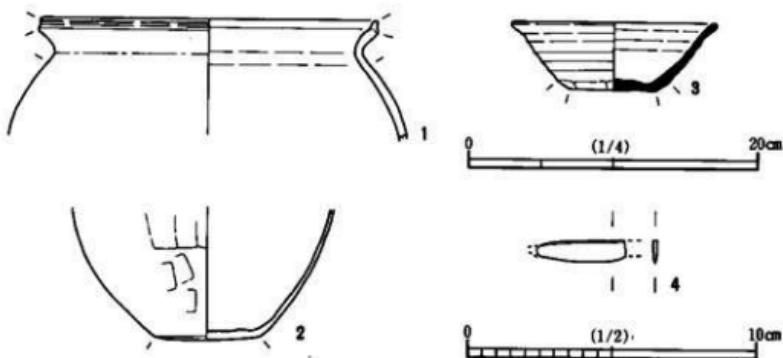
**規模と形状** 規模は遺構の全てを検出できなかったので、東西方向の規模が不明である。南北は3.6m前後を計る。東西は南壁で2.1mまで確認することができた。主軸方向はN-32°-Wである。壁溝はカマドのある北壁と北東コーナー部を除いて検出でき、幅は18cm前後、深さは4～5cmから深いところで10cmを計る。柱穴は検出されず、カマドの反対側の壁溝より10cm内側の位置に径18cm、深さ15cmの小ピットを検出した。検出面から床面までの深さは45cm位を計り、壇方面をそのまま床面にしている。床面は水平で、中央部が比較的堅く踏み固められている。壁の立ち上がりは直線的で、85°の角度をもち、ほとんど直角である。

カマドは北西壁に構築されており、ほぼ中央に位置しているものと思われる。大部分が調査区外にあるので規模などの詳細は不明である。構築材は山砂で、壁を掘り込んで構築しているものと思われる。

遺物の出土総点数はさほど多くなく、床面よりかなり浮いた状態のものが多い。

**遺物** 1は土師器壺で、口縁部から胴部の一部が1/6程度遺存している。推定口径は23cm、現存高は7.6cmを計る。口縁部内外面はナデで、胴部内外面はヘラナデを行う。色調は黒褐色で、胎土中には多量の長石粒と雲母粒を含み、焼成は良好である。

2は土師器壺で、底部と胴部下半部が遺存する。現存高は9cm、底径は7.3cmを計る。胴部内面はナデを行い、外面はヘラ削りを施す。器壁は薄く、底部内面は器面が荒れている。色調は



第27図 13号住居跡出土遺物実測図

暗赤褐色で、胎土中には微細砂粒を多く含み、焼成は良好である。

3は土師質須恵器杯で、底部の $\frac{1}{6}$ とその他の $\frac{1}{6}$ が遺存している。推定口径は14.2cm、器高は4.6cm、底径は6cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部内外面にロクロ痕が残る。底部下端部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は一定方向への手持ちヘラ削り調整が施される。色調は暗褐色と一部黒褐色で、胎土中には1mm前後の白色砂粒が多量に含まれ、焼成は良好である。

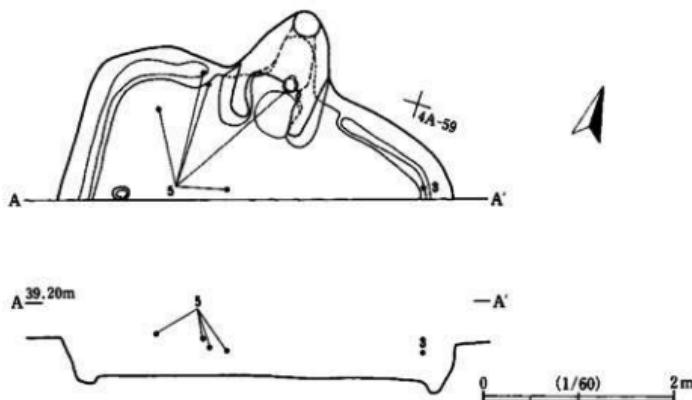
4は刀子で、刃部の先端部付近の一部が遺存しているだけである。現存長は3.1cmで、幅は8mm、厚さは1.5mm前後をそれぞれ計る。

#### 14号住居跡 (第28・29図・図版2)-4 A 1006

調査区の南西隅で、4A-58グリッドを中心とするに地点に所在し、南側の半分以上が調査区域外に入っている。13号住居跡から南に2.5m程離れている。

**規模と形状** 規模は遺構の全てを検出できなかつたので、南北方向の規模が不明である。東西は約4mを計る。南北は西壁で1.6mまで確認することができた。主軸方向はほぼ真北をむいている。壁溝はカマドの下を除いて検出し、幅は35cm前後、深さは8cm前後を計る。柱穴は検出されず、西壁から60cm程離れた位置に、長径18cm、短径14cm、深さ12cmの小ピットを検出した。検出面から床面までの深さは40cm位を計り、堀方面をそのまま床面にしている。床面は水平で、中央部が比較的堅く踏み固められている。壁の立ち上がりは直線的で、80°前後の角度をもつ。

カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。主軸方向はN-11°-Eである。堀方は壁を幅約1m、奥行き60cmの三角形状に掘り込み、断面は逆台形である。構築材は山砂である。袖部は壁より手前に60~70cmの長さで検出した。火袋部の幅は40cm前後を計る。煙道部は堀方面的



第28図 14号住居跡実測図

今まで一旦45°位から直角に近い角度で立ち上がっている。火床面はよく焼けており、赤化が著しい。カマド内出土の壺は支脚の代わりに利用された可能性があり、これらから掛け口は煙道部端部から内側に80cm程の位置にあったと考えられる。

出土遺物のうち5の壺はカマド内から倒立した状態で出土し、口縁部は底面にほぼ密着していた。

遺物1は土師器杯で、底部の全てと口縁部から体部の $\frac{1}{3}$ が遺存している。推定口径は14.8cm、器高は4.5cm、底径は6.2cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で内面は横方向のヘラ磨きが施される。体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は不定方向への手持ちヘラ削り調整が施される。色調は暗赤褐色で、胎土中には石英粒と砂粒が含まれ、焼成は良好である。

2は土師器杯で、底部の全てと口縁部から体部の $\frac{1}{3}$ が遺存している。推定口径は12.6cm、器高は3.9cm、底径は6cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は不定方向への手持ちヘラ削り調整が施される。底部及び体部下端部のヘラ削りは比較的丁寧に行われている。色調は明褐色か灰褐色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。

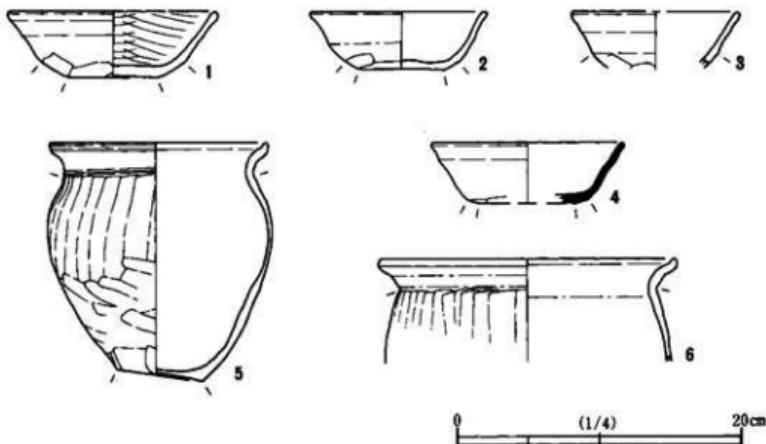
3は土師器杯で、口縁部から体部の $\frac{1}{3}$ が遺存している。推定口径は11.4cm、現存高は3.8cmを計る。成形はロクロ成形で、体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施される。色調は乳橙色で、胎土中には微細砂粒を多量に含み、焼成はややあまい。

4は須恵器杯で、全体の約 $\frac{1}{3}$ が遺存している。推定口径は13.6cm、器高は4.2cm、推定底径は6.8cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下端部には手持ちヘラ削り調整が施される。

底部は不定方向への手持ちヘラ削り調整が施される。色調は暗灰色で、胎土中には白色砂粒が含まれ、焼成は不良である。

5は土師器甕で、口縁部のほぼ全てとそれ以下の約 $\frac{1}{2}$ が遺存する。口径は15.2cm、器高は16cm、推定底径は6cm、胸部最大径は上位にあって15.7cmをそれぞれ計る。内面と口縁部はナデで、胸部は上位が縦方向で、中位が斜め方向、下半部が横方向のヘラ削り調整が施され、調整の順番も上から下へ行っている。底部はヘラ削り調整である。色調は赤褐色で、胎土中には赤色砂粒と微細砂粒が多量に含まれ焼成は良好である。

6は土師器甕で、口縁部と胸部の $\frac{1}{4}$ 程度が遺存している。推定口径は21cm、現存高は7cmを計る。内面と口縁部はナデで、胸部外面は縦方向へのヘラ削り調整が施される。色調は赤褐色か暗褐色で、胎土中には微細砂粒を多く含み、焼成は良好である。



第29図 14号住居跡出土遺物実測図

15号住居跡（第30・31図）－3Bイ004B

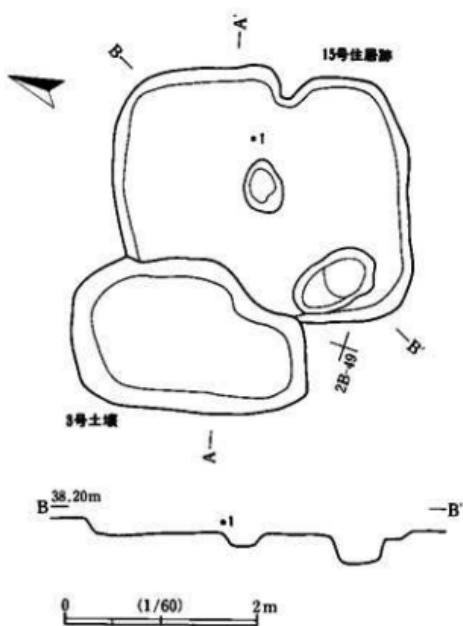
調査区のやや東側で、3C-20グリッドを中心とする南側に緩やかに傾斜する地点に所在する。調査区内で最も東側にある住居跡で、集落はここで一旦とぎれるものと思われる。一番近い16号住居跡とは7m離れ、3号土壤によって西側部分を切られる。

**規模と形状** 規模は南北3.1m×東西2.5mを計り、形状は長方形で、東側壁の一部が40cm程m内側に迫り出している。長軸方向はN-20°-Wである。壁溝及び明確な柱穴は検出されなかったが、ほぼ中央に長径55cm、短径40cm、深さ13cm前後のピットを検出した。また、南東コーナー付近に長径約90cm、短径55cm、深さ30cm程の土壤が検出された。長軸方向は住居跡のそれとやや異なっている。検出面から床面までの深さは10~15cmとやや浅く、壠方面をそのまま床面にしている。床面は中央部の一部がやや堅く踏み固められている。

カマドは検出されなかった。

出土遺物数は非常に少なく、器形を復元できるような遺物もなかった。

**遺物** 1は土師器高台付き壠と思われ、壠部と高台部との接合部分のみが遺存している。成形はロクロ成形で、ナデ調整が全面にわたって施されている。色調は橙褐色で、胎土中には5■前後的小石と多量の砂粒を含み、焼成はややあまい。



第30図 15号住居跡実測図



第31図 15号住居跡出土遺物実測図

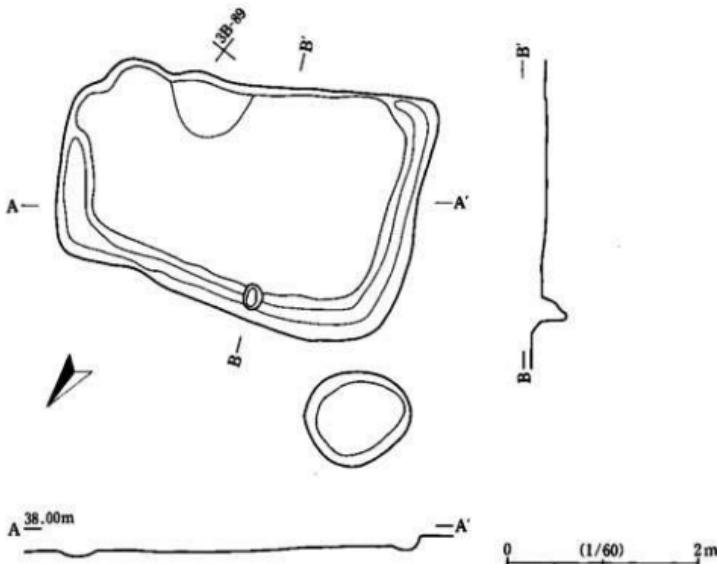
### 16号住居跡（第32図）－3 Bイ003

調査区の南側中央で、3B-78グリッドを中心とする南東方向に緩やかに傾斜する地点に所在する。8号住居跡からは南東に6m程離れている。

**規模と形状** 規模は東西3.8m×南北2.1～2.6mを計り、形状は南北方向に長く、やや不整形な長方形である。主軸方向はN-149°-Eである。壁溝はカマドのある南東壁と北東壁の一部を除いて検出され、幅20cm前後、深さ5～7cmを計る。柱穴は検出されず、北西側の壁溝内に長径26cm、短径20cm、深さ25cmの小ピットを検出した。検出面から床面までの深さは深いところで10cm程を計り、南東側ではほとんど壁の立ち上がりは検出できなかった。床面は中央部が比較的堅く踏み固められており、壠方面をそのまま床面にしている。

カマドは南東壁のやや東よりの位置に構築されているが、火床部のみを検出しただけで、規模等については不明である。

出土遺物数は非常に少なく、図示できるような遺物は全く出土しなかった。

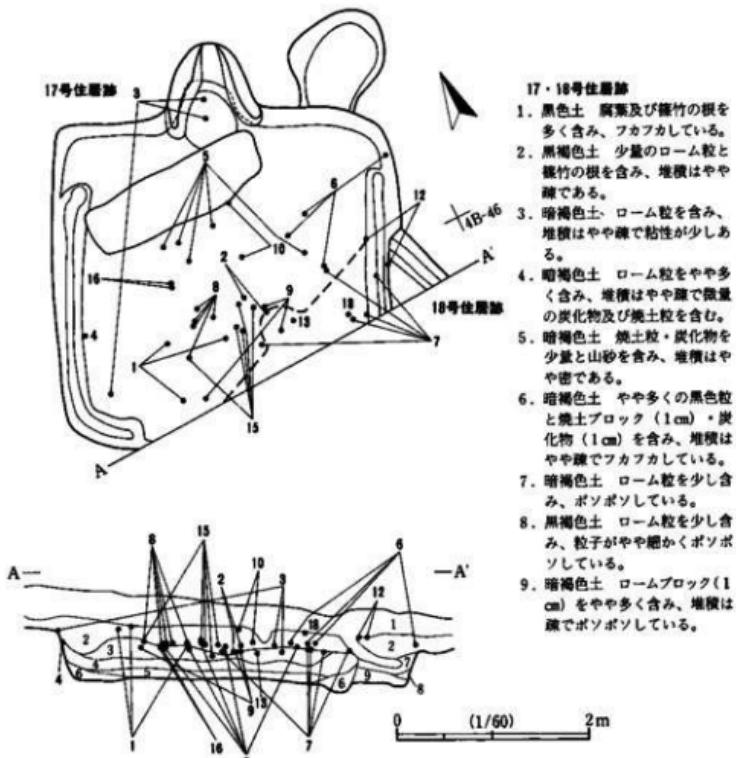


第32図 16号住居跡実測図

### 17号住居跡（第33・34図）- 4 Bイ002A

調査区の南端で、4 B-34・35グリッドを中心とする東側に緩やかに傾斜する地点に所在する。南東コーナーに当る南側は調査区外に及んでいるため未検出である。11号住居跡の東側5m程の距離で、南東コーナー部分で18号住居跡の北西壁を切っている。カマドの手前には床面まで達する搅乱を受けている。

**規模と形状** 規模は東西3.6mで、南北は北西壁で3.3mを計り、形状は正方形に近いものになると思われる。主軸方向はN-30°-Eである。壁構はカマドのある北東壁とその両コーナーには検出されず、南西壁では一旦とぎれる。幅は18cm前後で、深さは1.5~3cmを計る。柱穴は検出されなかった。検出面から床面までの深さは深いところで50cm、浅いところでも35cmを計る。壁の立ち上がりは直線的で、75°前後の角度をもつ。堀方面は全体に浅く、堀方面をそのまま



第33図 17号・18号住居跡実測図

ま床面にしている部分もある。

カマドは北東壁の中央よりやや西側に構築されている。主軸方向はN-25°-Eで、住居跡のそれとほぼ同じである。構築材は山砂と粘性の強い暗褐色土の混合土で、スサを混入している。堀方は壁を幅約1m、奥行き90cmの三角形状に掘り込み、煙道部は構築材を使って20°~35°の角度にしている。断面形は逆台形である。裾部は壁よりほとんど手前では検出できなかった。火袋部の幅は40cm前後を計る。底面は長径63cm、短径53cm、深さ5cm前後の浅い皿状に掘り窪めている。火袋部の袖部内面は焼成による赤化が認められた。

出土遺物は比較的浮いた状態で出土しているものが大部分である。土器以外では磁着度の強い大小の鉄滓（鉄塊系）が3点と、炉内滓が8点出土している。

遺物 1は土師器杯で、底部の $\frac{1}{2}$ と口縁部から体部の一部が遺存している。推定口径は14cm、器高は4.4cm、推定底径は6.8cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内面にわずかにロクロ痕が残る。体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は回転糸切り離しの後、周縁部には手持ちヘラ削り調整が施される。色調は暗褐色で、胎土中には砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

2は土師器杯で、全体の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定口径は13.2cm、器高は3.8cm、推定底径は5.6cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は回転糸切り離し無調整である。色調は黒褐色で、胎土中には白色砂粒を含み、焼成は良好である。

3は土師器杯で、全体の $\frac{3}{4}$ 程度が遺存している。口径は12.4cm、器高は3.9cm、底径は5.5cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内面には横方向のヘラ磨きが施されている。底部下端部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は回転糸切り離しの後、手持ちヘラ削り調整が施される。色調は明褐色で、胎土中には多量の砂粒が含まれ、焼成は良好である。

4は内面黒色処理された土師器杯で、完形品である。口径は13.1cm、器高は4cm、底径は5cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内面には横方向で5単位のヘラ磨きが施される。体部下端部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は回転糸切り離しの後、周縁部に手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面に「中万」の墨書がある。色調は暗褐色で、胎土中に少量の2~3mmの小石と白色砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

5は内面黒色処理された土師器杯で、底部のほぼ全てと口縁部から体部の $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定口径は13.2cm、器高は4.3cm、底径は5.4cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、外面上にわずかにロクロ痕が残る。内面には横方向のヘラ磨きが施される。体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施されるが、やや不明瞭である。底部は回転糸切り離しの後、周縁部には手持ちヘラ削り調整が施される。色調は明褐色で、胎土中には多量の石英粒と砂粒を含み、焼成は良好である。

6は土師器杯で、全体の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定口径は13cm、器高は4.8cm、底径は5cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部内外面にロクロ痕が残る。体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は右回転の回転糸切り離し無調整である。色調は明褐色で、胎土中には赤色砂粒と多量の微細砂粒を含み、焼成は良好である。

7は土師器杯で、底部の $\frac{1}{3}$ と口縁部から体部の一部が遺存している。推定口径は13.8cm、器高は3.4cm、推定底径は5.4cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、体部下端部には手持ちヘラ削り調整が施される。内面は横方向のヘラ磨きが施されている。底部は手持ちヘラ削り調整である。色調は明褐色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。

8は土師器杯で、口縁部から体部にかけて約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定口径は13.3cm、現存高は3.3cmを計る。成形はロクロ成形で、体部外面に弱いロクロ痕を残す。体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施される。色調は暗褐色で、胎土中には砂粒を含み、焼成はそれ程良好とは言えない。

9は土師器杯で、口縁部から体部の $\frac{1}{2}$ 弱が遺存している。推定口径は14cm、現存高は4.2cmを計る。成形は右回転のロクロ成形で、体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施される。色調は乳橙色で、胎土中には多量の1~2mmの砂粒と赤色砂粒を含み、焼成は良好である。

10は土師器杯で、口縁部から体部までの $\frac{1}{2}$ 弱が遺存している。推定口径は12.7cm、現存高は3.4cmを計る。成形は右回転のロクロ成形で、体部下半部はヘラ削り調整が施されているものと思われる。色調は橙褐色で、胎土中には砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

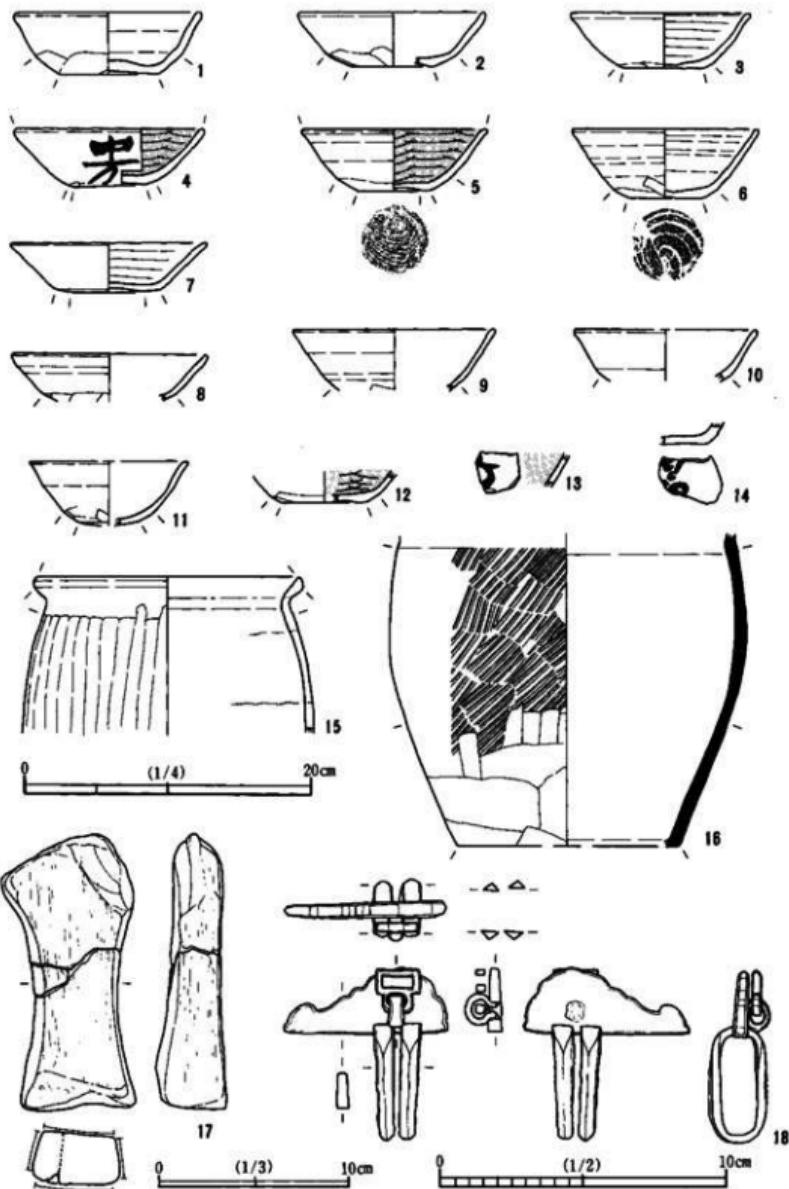
11は土師器杯で、全体の $\frac{1}{2}$ 弱が遺存している。推定口径は10.9cm、現存高は4.4cm、推定底径は4.2cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内面にはヘラ磨きが施されるが、方向等は明確ではない。体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は手持ちヘラ削り調整で、やや丸底になっている。色調は乳橙色で、胎土中には砂粒を多く含み、焼成は良好である。

12は内面黒色処理された土師器杯で、底部から体部までの $\frac{1}{2}$ が遺存している。現存高は1.9cm、推定底径は5.9cmを計る。内面は横方向のヘラ磨きが、底部内面は一定方向のヘラ磨きが施される。体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は右回転の回転糸切り離しの後、周縁部には手持ちヘラ削り調整が施される。色調は乳橙色で、胎土中には多量の砂粒を含み、焼成は良好である。

13は内面黒色処理された土師器杯で、体部破片である。外面に墨痕が見られるが、文字は不明である。色調は乳橙色で、胎土中には多量の微細砂粒を含み、焼成は良好である。

14は土師器杯の小破片で、底部から体部下端部である。底部に墨書がみられる。

15は土師器壺で、口縁部から胴部上半の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定口径は18.7cm、現存高は10.7cmを計る。口縁部内外面と胴部内面はナデで、胴部外面は縦方向のヘラ削り調整が施される。これは比較的丁寧で削りの稜を残さない。胴部内面には輪積み痕を一部残す。色調は橙褐



第34図 17号住居跡出土遺物実測図

色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。

16は土師質須恵器壺で、胸部の約 $\frac{1}{4}$ が遺存している。現存高は21.3cm、推定底径は15.6cmを計る。胸部最大径は中位よりやや上にあり25.2cmを計る。内面はヘラナデで、外面は叩き成形の後、胸部下半部にはヘラ削り調整が施される。内面の上半にはスス状の付着物が著しく認められる。色調は暗褐色で、胎土中には白色砂粒や石英粒、微細砂粒などを多量に含み、焼成は良好である。

17は砥石で、一部が破損している。長さ14.1cm、幅6.9cm、厚さ3.5cm、重量295gを計る。四面が使用されており、中央部が幾分薄くなっている。石材は粘板岩である。

18は銅製の双脚の足金物で、上部に山形の飾り金物が付くものである。足金物は短径の外径が1.8cm、同内径が1.3cm、長径の外径が4cm、同内径が3.3cmを計る橢円形である。断面形は上部の山形の飾り金物と接続する部分が長方形であるが、その他の部分は三角形で、厚さ2.5mmを計る。山形の飾り金物の先端部から約1cmあけ、山形の飾り金物に4mm程の切り込みを入れて両者は3mmの間隔をもって取り付けられている。

山形の飾り金物は前の部分が径2cm程の半球形で、小さな窪みを持つ。裾を長く引き、端部で再び1cm程の山を作る。下端部は平らなままで、上端部は面取りが施されている。厚さは4mmを計る。前方から見て左側に釣り金具が付けられている。釣り金具自体は長辺の外法が1.6cm、同内法が1.1cm、短辺の外法が0.9cm、同内法が0.35cmを計る長方形の部位の下部に、外径1.1cm、内径0.7cmの輪が付随する形である。厚さは0.3cmを計る。釣り金具は山形の飾り金物に穴を開けて、外径約1cm、内径0.65cmの金具によって取り付けられている。この金具は裏側から押さえの金物によって叩き締められている。

蛍光X線分析及び現状の肉眼観察によると、金あるいは銀による装飾や透かし彫り等の文様装飾は施されていない。また、山形の飾り金物と双脚の足金物の取り付けについては、通常銀貼付けが行われるが、同様に蛍光X線分析の結果では、その痕跡は認められない。

#### 18号住居跡（第33図）-4Bイ002B

調査区南端の4B-45グリッドを中心とする地点に所在し、周辺は東側の谷に向かって緩やかに傾斜している。大部分は南側の調査区外に入り、検出できた部分もほとんどが17号住居跡に切られている。

**規模と形状** 規模も形状も検出できた範囲が少ないので不明である。北東壁は2.6m、北東壁は90cmの範囲で検出した。主軸方向はN-30°-Wである。壁溝は北東壁で検出し、幅20cm、深さ1cm前後を計る。柱穴の有無は不明である。検出面から床面までの深さは35cm前後を計る。壁の立ち上がりは直線的で、60°前後の角度をもつ。貼床は検出した範囲では認められず、堀方面をそのまま床面にしている部分もある。

カマドは北西壁に構築されている。17号住居跡によって完全に破壊されているので、規模や方向などについては不明である。わずかに、火床面が残っているだけである。

出土遺物は17号住居跡同様、比較的浮いた状態で出土しているものが大部分である。破片資料ばかりで、図示できそうな土器はいずれも17号住居跡出土の土器と接合する資料である。

## 2. 土 壤

### 1号土壤 (第35図) - 2 B 1008

調査区北よりの、2 B-28・38グリッドを中心とする地点に所在し、周辺はほぼ平坦である。今回検出した土壤の中では、最も北に位置している。規模は1.3m×1.2mで、形状は幾分長方形気味である。長軸方向はN-15°-Eである。検出面からの深さは1~1.5mを計る。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。遺物は全く出土しなかった。

### 2号土壤 (第35図) - 2 B 1007

調査区西側の、2 A-89グリッドを中心とする地点に所在し、周辺はほぼ平坦である。規模は長径2.7m×短径1.2~1.3mで、形状はやや不整形な橢円形である。長軸方向はN-33°-Eである。検出面からの深さは40cm程を計る。断面形は鍋底形をしている。遺物は全く出土しなかった。

### 3号土壤 (第30図) - 3 B 1004

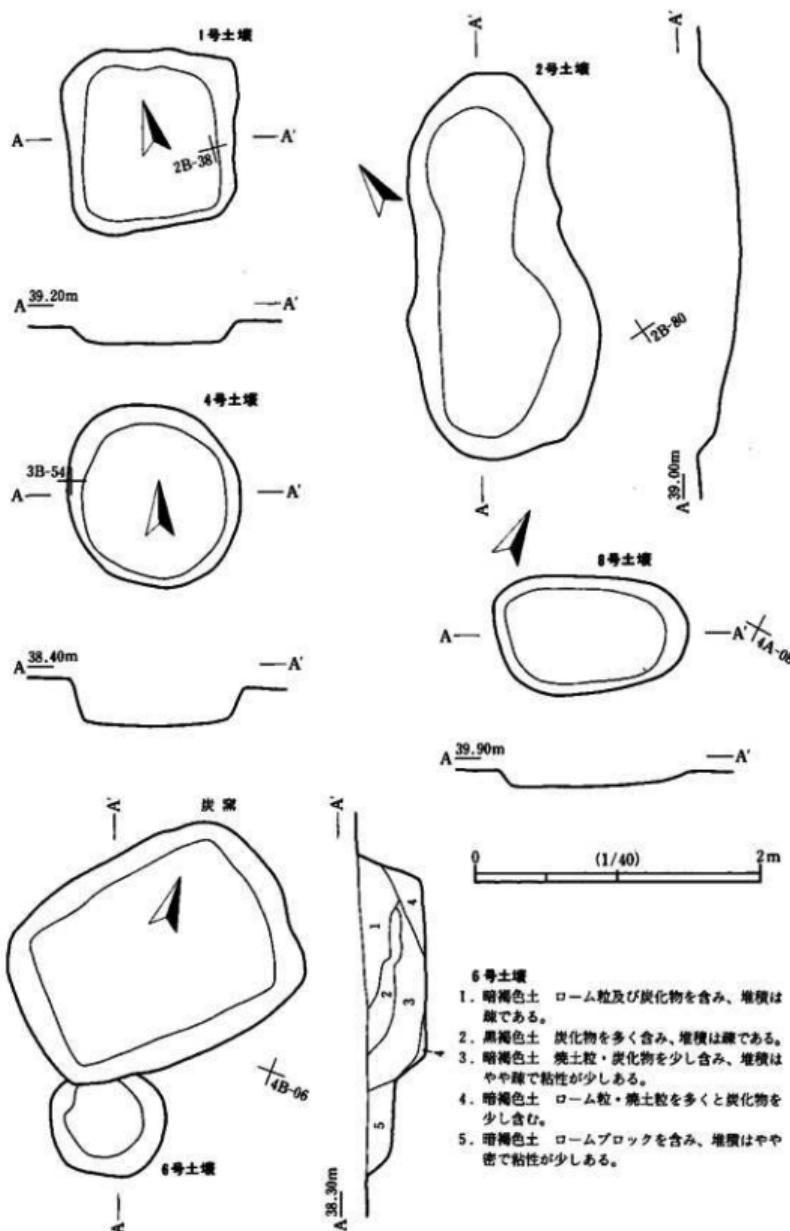
調査区東側の、3 B-47・48グリッドの地点に所在し、周辺は南東方向に緩やかに傾斜している。15号住居跡を切って構築されている。規模は2.5m×1.55mで、形状は長方形であるが、南東コーナーが矩形に内側へ入り込んでいる。検出面からの深さは20cm程を計る。断面形は逆台形で、底面はほぼ水平である。遺物は数点出土しているが、いずれも破片資料で、図示できるものはない。

### 4号土壤 (第30図) - 3 B 1006

調査区中央よりやや南側の、3 B-55・65グリッドの地点に所在する。周辺は南東方向に緩やかに傾斜している。8号住居跡の東1.5m程の位置である。規模は長径1.35m×短径1.2mで、形状はやや橢円形である。長軸方向はN-29°-Wである。検出面からの深さは25~30cmを計る。断面形は逆台形である。遺物は全く出土しなかった。

### 5号土壤 (第5図) - 3 B 1007

調査区中央よりやや南側の、3 B-67・77グリッドの地点に所在する。周辺は南東方向に緩



第35図 1号・2号・4号・6号・8号土壤実測図

やかに傾斜している。16号住居跡の北西30cmの位置で、極めて近接している。規模は長径1.1m×短径90cmで、形状はやや不整形な橢円形である。長軸方向はN-16°-Eである。検出面からの深さは5~10cmと浅く、断面形は逆台形である。遺物は全く出土しなかった。

#### 6号土壤 (第35図) - 3Bイ005

調査区南側の、3B-95グリッドを中心とする地点に所在する。周辺は南東方向に緩やかに傾斜している。近現代の焼炭窯によって切られている。2号溝とは北側60cm程の距離で接している。規模は径80cmで、形状は円形である。検出面からの深さは15~20cmで、断面形は逆台形である。遺物は全く出土しなかった。

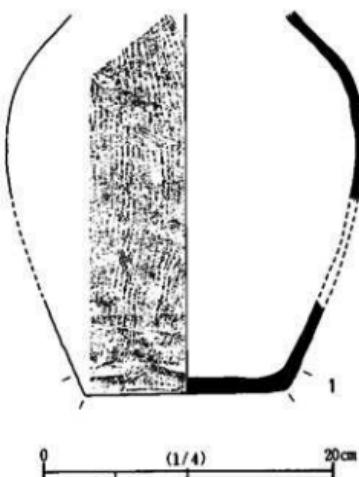
#### 7号土壤 (第5図)

調査区南西側の、4A-8グリッドを中心とする地点に所在する。9号住居跡の南西コーナーを切って存在する。規模は径90cm前後で、形状はやや不整形な円形である。検出面からの深さは40cmを計り、断面形は逆台形である。遺物は全く出土しなかった。

#### 8号土壤 (第35・36図・図版2) - 4Aイ004

調査区南西側の、4A-7グリッドの地点に所在する。9・10・12号住居跡に囲まれ、7号土壤とは約1m程の距離で接している。規模は長径1.3m×短径80cmで、形状は橢円形である。長軸方向はN-62°-Eである。検出面からの深さは5~10cmを計り、北東側の壁は緩やかに立ち上がる。

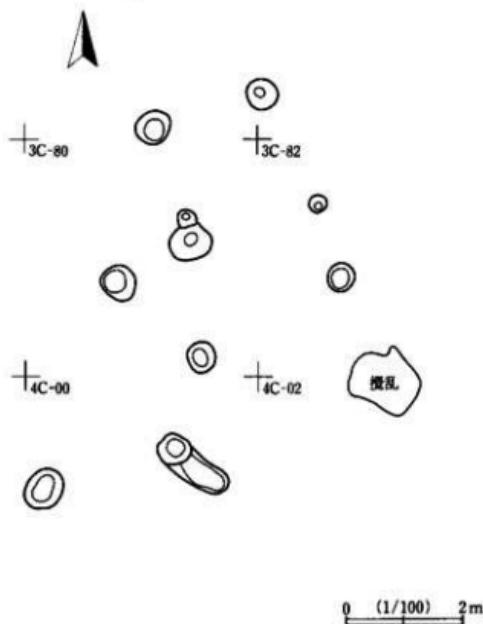
遺物 1は土師質須恵器壺で、底部と胴部の $\frac{1}{3}$ が遺存している。現存高は26.7cm、底径は13.6cm、胴部最大径は中位よりやや上にあって24.5cmを計る。成形は叩き成形で、内面は指頭による押さえの後、ナデを施す。外面は、底部付近ではヘラ削り調整を施し、胴部には横方向のナデで叩き目を一部消している。底部は一定方向へのヘラ削り調整が施される。色調は茶褐色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。



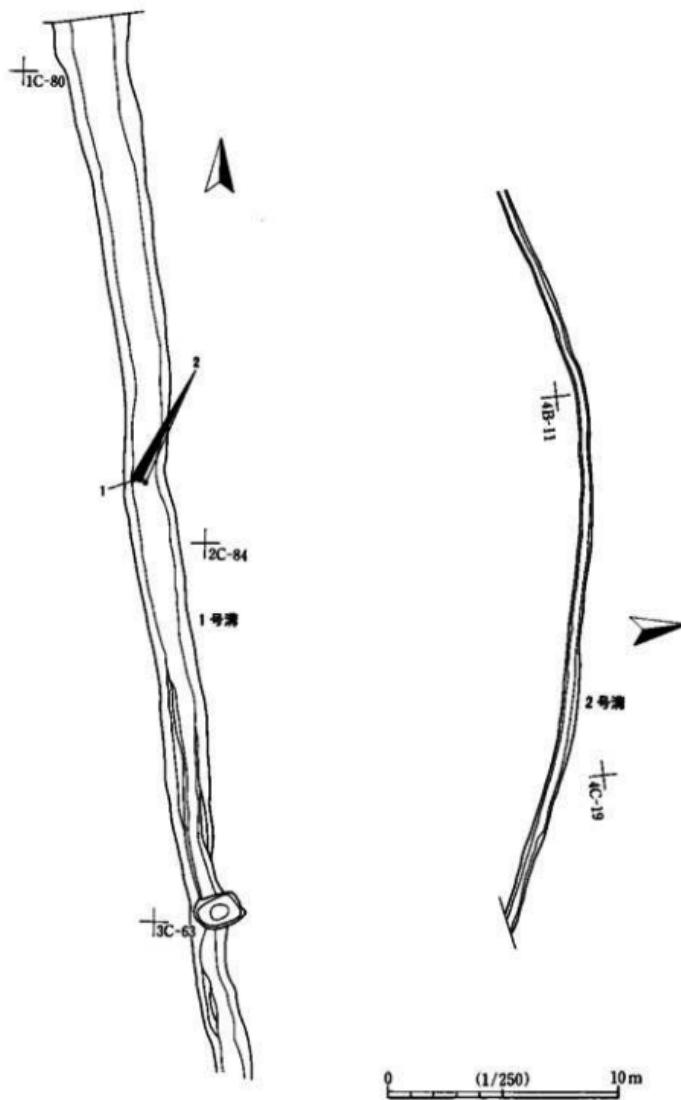
第36図 8号土壤出土遺物実測図

9号土壤（第37図）－3C-1002

調査区の南東より、3C-71・81・82・90～92・4C-00～4グリッドにまたがった地点に所在する。周辺は南東方向へかなり傾斜している。本跡は10基の小ピットからなる。各ピットの規模・形状・検出面からの深さは、ピット1が径30cm・円形・深さ25cm、ピット2が径25cm・円形・深さ30cm、ピット3が長径31cm×短径28cm・橢円形・深さ30cm、ピット4が径4cm・円形・深さ12cm、ピット5が長径38cm×短径30cm・橢円形・深さ30cm、ピット6が径15cm・円形・深さ33cm、ピット7が径25cm・円形・深さ30cm、ピット8が径22cm・円形・深さ16cm、ピット9が長径36cm×短径30cm・橢円形・深さ28cm、ピット10が長径約70cm×短径24cm・橢円形・深さ24cmで、北東隅は径25cm・深さ22cmの円形に深く掘り込まれている。各ピットが比較的近接して存在しているので、何等かの関連性があるものと思われるが、明確な根拠を得ることは出来なかった。遺物は全く出土しなかった。



第37図 9号土壤実測図



第38図 1号・2号溝実測図

### 3. 溝

#### 1号溝 (第38・39図) - 溝 1

調査区の東側で、南北に直線的に走っている。3C-54グリッドの地点で、近現代の煉瓦窯によって切られる以外は、他の遺構との重複関係は全く無い。全長46mの長さで検出し、南側の端は谷に落ちていき、北側は調査区外に続いている。幅は北端が3.3m、中央部が2m、南端が1.5mを計る。検出面からの深さは北端が50cm前後、中央部が30cm前後、南端が7~15cmを計る。断面形は鍋底状である。

遺物は北側半分と南端付近から出土しているが、破片資料が多い。1の土師器高台付き皿は、底面よりやや浮いているものの、西側の壁に近い場所から出土している。

遺物 1は土師器高台付き皿で、口縁部の一部を欠失しているだけである。口径は13.6cm、器高は2.5cm、底径は7.4cm、高台径は7.5cm、高台高は0.6cmをそれぞれ計る。口縁部はややゆがんでおり、水平になっていない。成形はロクロ成形で、内面には横方向及び斜め方向のヘラ磨きが施され、やや不規則に施されている。体部下端部には右回転の回転ヘラ削り調整が施される。底部は右回転の回転糸切り離し無調整で、高台部は貼り付けで、内外面共にナデ調整を施す。体部外面から高台部にかけて「東」の墨書が見られる。色調は明褐色で、胎土中には多量の赤色砂粒と砂粒、石英粒が含まれ、焼成は良好である。

2は土師器甕で、底部と胴部の一部が遺存している。現存高は7.2cm、底径は13cmを計る。内面はナデで、外面は叩き成形の後、底部近くは全面にわたってヘラ削り調整が施される。胴部にはヘラ削りあるいはヘラナデが施されている。底部は摩滅により調整等は不明である。色調は明褐色で、胎土中には微細砂粒を多く含み、焼成は良好である。



第39図 1号溝出土遺物実測図

#### 2号溝 (第38図・図版2) - 溝 2

調査区南側に所在し、北側に張り出す緩やかな弧を描き、1号溝とは異なり東西方向に走る。全長約22mの長さで検出し、東端は谷に落ち込んでいく、西端は調査区外に続いている。調査区の西側で10・12号住居跡を切っている。幅は40~60cmで、検出面からの深さは概ね15cm前後である。断面形は逆台形である。

遺物は全体的に散漫な出土状況を示している。破片資料がほとんどで、図示できるものは皆無である。

#### 4. グリッド出土の遺物

##### 縄文土器（第40図・図版9）

土器は、总数100点程である。早期沈線文系10点、加曾利E式17点、称名寺式2点、堀ノ内式25点、加曾利B式10点の他は縄文のみの小破片で中・後期のものと考えられる。

1・2は沈線文系土器で、1はかなり太めの沈線が口縁と平行に5条、下部4条を区切る縦沈線が1条みられる。内面は丁寧な磨きが施されている。2は細い平行沈線と貝殻腹縁文による文様で、平行沈線文は幾何学文を形成している。3・4は同一個体であり、胎土に纖維を含む。条痕を地文として沈線及び矢羽状の連続刺突文が施されている。

5～10は中期の土器である。5～7は口縁部直下に沈線あるいは微隆起帯を持ち、縄文あるいは櫛状沈線がみられる。8は口縁部に小突起を有し、渦巻きと考えられる隆帯が認められる。9・10は胸部破片で、9では沈線による無文帯が、10では微隆起帯が垂下している。

11～21は後期の土器である。11は渦巻状の沈線間に縄文（L R）を充填している。12は橋状把手が付いている。13～15は同一個体で、波状口縁の大形深鉢である。口縁部から頸部は無文帯となっている。波頂部は円形刺突文と縦沈線が垂下しており、口縁直下には2条の沈線、胸部との境は沈線によって区画されている。胸部は単節L R縄文を地文とし、垂下する沈線や4点程の沈線が斜位に施文されている。沈線間は施文後に平滑化によって縄文がほとんど消えているが、いわゆる磨消縄文ではない。16は櫛状沈線が垂下している。17は胸部で、屈曲することから、注口付土器と思われる。胴上部は無文で、下部は縄文（L R）と平行沈線が施文されている。屈曲部には隆帯を貼付け、さらに竹管による刻みが施されている。18は底部の開き具合から鉢と思われるもので、細い沈線が施文されている。19・20は共に粗製土器である。21は底部から朝顔形に開く深鉢で、現存部は無文である。

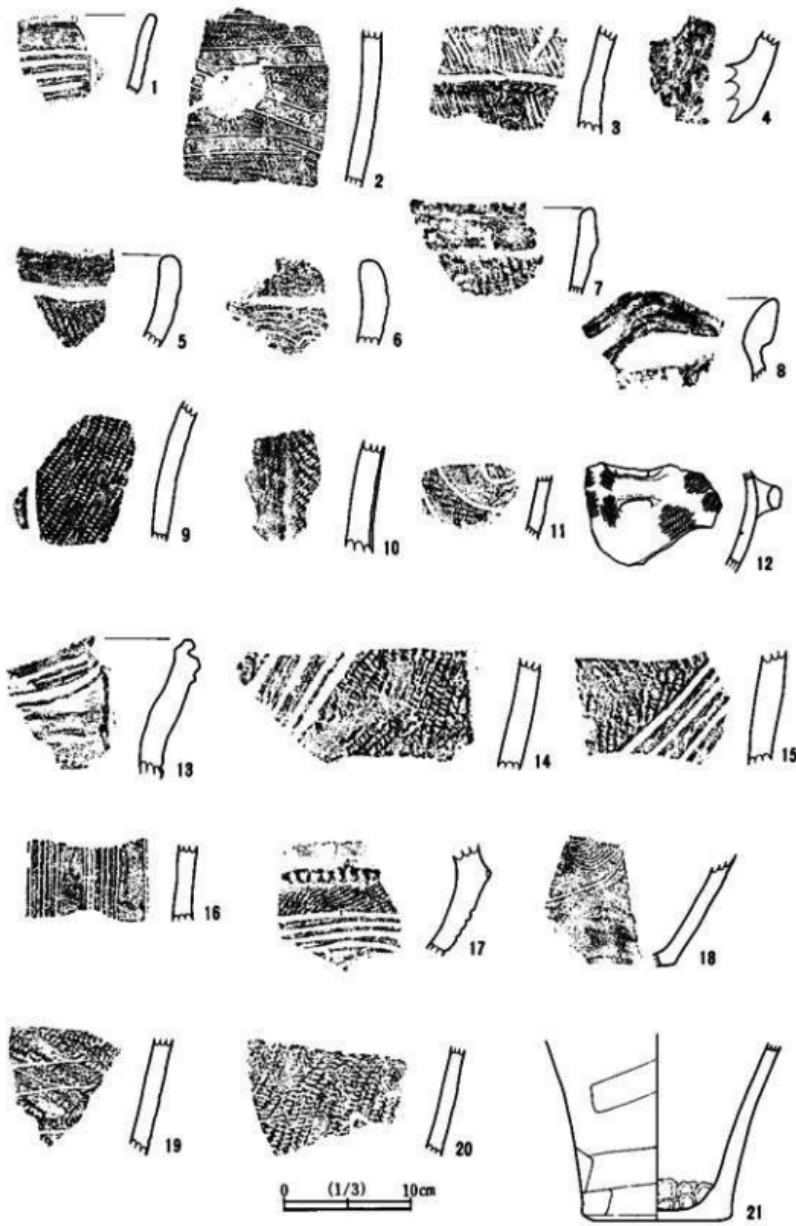
これらの土器は、1・2が田戸下層式、3・4が田戸上層式、中期のものは加曾利E 3式及び加曾利E 4式である。後期の土器は11・12が称名寺式、13～18は堀ノ内式、19・20は加曾利B式である。

#### 石 器

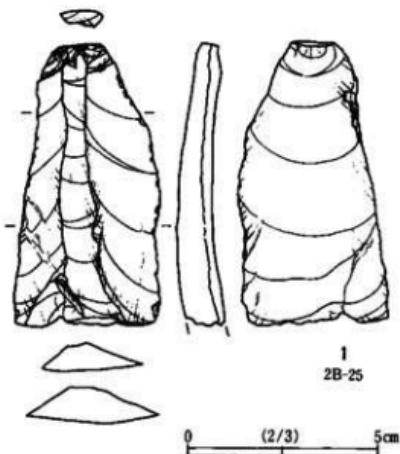
##### a. 旧石器時代（第41図・図版10）

本遺跡では、旧石器時代のブロックは検出されなかったが、上層遺構の調査に伴い旧石器時代の遺物が1点検出されている。

1は、2B-25区のIII層上面で検出された石刃である。末端に最大幅を持つ平面形を呈し、側



第40図 グリッド出土遺物-1



第41図 グリッド出土遺物-2

面形は幾分反っている。打面部は平坦打面で、頭部調整が顕著である。表面には主要剝離面方向と同方向の剝離が三面あり、縦長剝片の連続的な剝片剝離によるものであることが推察される。両側縁には刃こぼれが認められる。頁岩製、 $73\text{mm} \times 38\text{mm} \times 12\text{mm}$ 、重量27g。

#### b. 繩文時代（第42図・図版10）

この項では明らかに奈良・平安時代の所産の砥石類を除いた石器について記述する。検出された器種及び点数は、石鎌3点(1～3)、礫器1点(4)、磨石類4点(5～8)、砥石2点(9)、敲石1点(10)、石皿(11)1点、剝片2点、礫64点である。それぞれわずかな点数であり、分布も散漫な在り方を示し、特徴的な傾向は認められない。

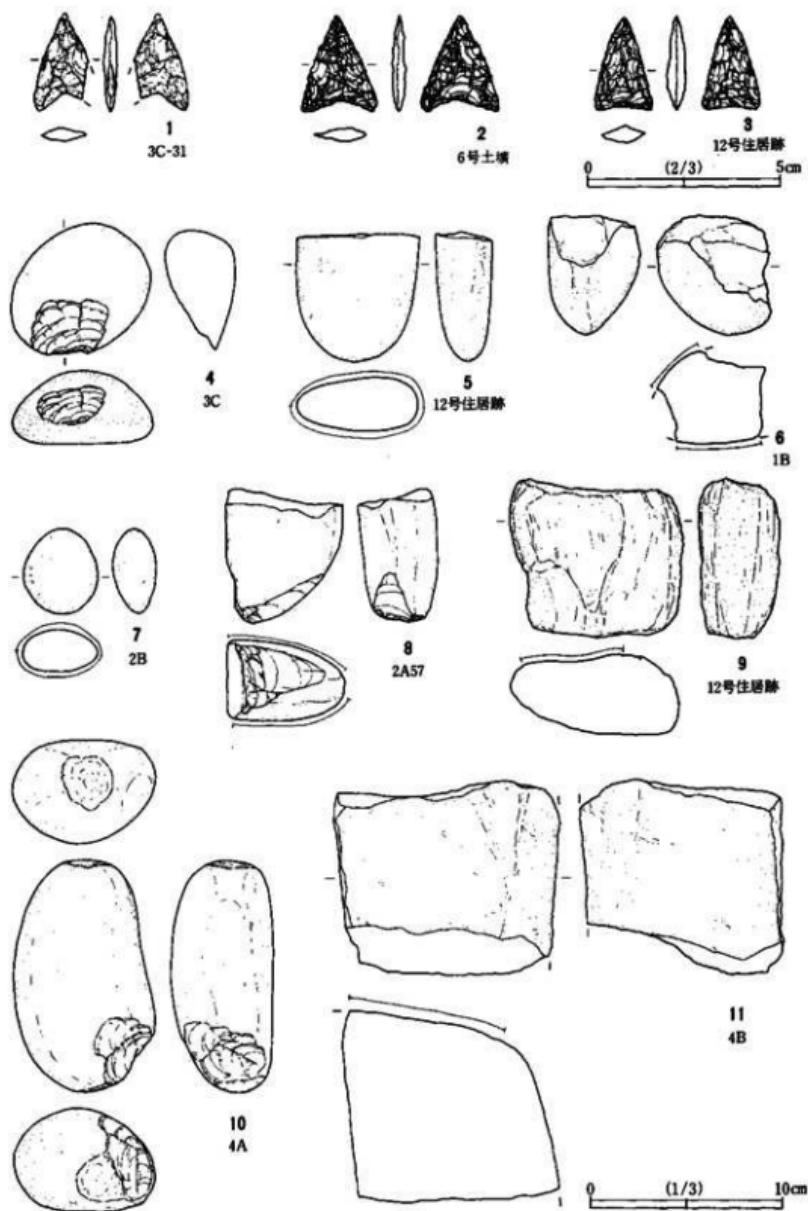
1～3は石鎌で、いずれも平面形は二等辺三角形を基調とする長身の凹基石鎌に分類される。

1は、側縁が丸味を持ち、基部がやや深く抉り込むもので、風化が激しく剝離面は不明瞭である。安山岩製、 $24\text{mm} \times 14\text{mm} \times 4\text{mm}$ 、重量1.2g。

2は、平行した微細な調整が施される精緻なもので、側縁は直線的で基部の抉りは浅い。黒曜石製、 $25\text{mm} \times 20\text{mm} \times 3\text{mm}$ 、重量1.2g。

3は、身幅が狭く側縁も直線的ですらりとした印象を受けるが、厚味があるものである。基部は弧状に浅く抉れ、平基に近い形態となる。安山岩製、 $24\text{mm} \times 15\text{mm} \times 5\text{mm}$ 、重量1.2g。

4は礫器で、梢円礫の鋭角な一辺を刃部とし、幅広の剝離と末端に微細な剝離が施される。あるいは使用による割れの可能性もあるが、縁辺の潰れは認められない。安山岩製、 $67\text{mm} \times 36\text{mm}$ 、重量213g。



第42図 グリッド出土遺物-3

5～8は磨石類である。

5は、偏平な横円錐の全面が摩耗しているが、被熱赤化しており上半を欠損する。花崗岩製、  
65mm×65mm×30mm、重量194g

6は、末端が尖るほどまでに、著しい摩耗が全面に及んでいる。安山岩製、61mm×60mm×48  
mm、重量220g。

7は、小横円錐で、摩耗が全面に及ぶ。5と同様に被熱赤化している。花崗岩製、44mm×58  
mm×23mm、重量58g。

8は、磨石+敲石のものであり、磨面は表裏面に限定されるが、左側割れ面はやや擦れており、上側の割れ面と風化的度合いに差異がある。末端は広い剝離と敲打による潰れが認められる。欠損の後、敲石として転用したものか。安山岩製、69mm×61mm×42mm、重量227g。

9は砥石である。風化が激しく砥面を一部残存するのみである。砥面は浅く窪み、縦方向の線条痕が認められ光沢を帯びる。花崗岩製、81mm×90mm×42mm、重量423g。

10は敲石である。手頃な長横円錐の両端に敲打痕が看取される。下端部では敲打によるものか剝離面が認められる。花崗岩製、119mm×74mm×53mm、重量645g。

11は石皿としたが、断片的な資料であり形状は判然としない。あるいは、台石の可能性もある。安山岩製、100mm×118mm×105mm、重量1975g。

#### 土師器（第43図・図版7）

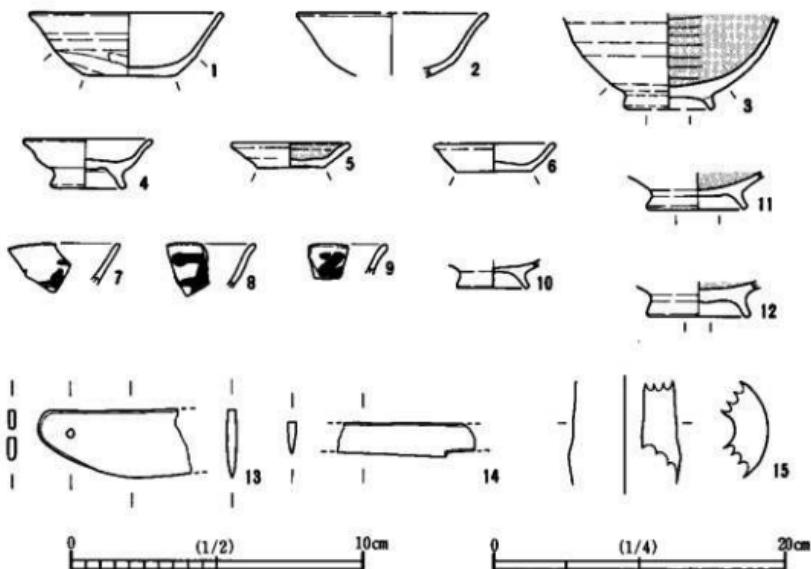
1は杯で、全体の約半分が遺存している。口径は13.3cm、器高は4.5cm、底径は6cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、外面にロクロ痕が残る。体部下半部には手持ちヘラ削り調整が施される。底部は手持ちヘラ削り調整が施される。色調は黒褐色で、胎土中には微細砂粒を少量含み、焼成は良好である。

2は杯で、口縁部から体部の約半分が遺存している。推定口径は12.9cm、現存高は4.3cmを計る。内外面共にナデが施される。色調は淡褐色か暗褐色で、胎土中には多量の雲母粒と微細砂粒を含み、焼成は良好である。

3は内面黒色処理された高台付き碗で、高台部と体部の約半分が遺存している。現存高は6.3cm、高台径は6.3cm、高台高は1cmを計る。成形はロクロ成形で、外面に弱いロクロ痕が残る。内面は横方向のヘラ磨きが施される。底部外面は指頭によるナデつけが施される。色調は淡褐色で、胎土中には微細砂粒を多量に含み、焼成はややあまい。

4は高台付き皿で、口縁部の約半分が欠失するだけである。口径は8.9cm、器高は3.4cm、高台径は5.2cm、高台高は1.3cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、ナデ調整が全面に施している。色調は暗赤褐色で、胎土中には微細砂粒を含み、焼成は良好である。

5は内面黒色処理された皿で、ほぼ完形品である。口径は8cm、器高は1.8cm、底径は4.5cm



第43図 グリッド出土遺物-4

をそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、内外面共にロクロナデで、内面には磨き等が施されず、黒色処理のされ方も通常のものと異なり、ややくすんだものである。底部は右回転の回転糸切り離し無調整である。色調は明褐色で、胎土中には少量の赤色砂粒と微細砂粒を含み、焼成は良好である。

6は皿で、口縁部の約 $\frac{1}{3}$ を欠失する。口径は8.2cm、器高は2cm、底径は5.2cmをそれぞれ計る。成形はロクロ成形で、底部は右回転の回転糸切り離し無調整である。色調は黄褐色で、胎土中には砂粒が含まれ、焼成は良好である。

7～9は杯の口縁部破片で、外面に墨書きが見られるが、共に文字は読み取れない。土器の調整はいずれもナデで、8の外面にはロクロ痕が残る。7の色調は淡褐色で、胎土中には赤色砂粒と多量の微細砂粒を含み、焼成は良好である。8の色調は橙褐色で、胎土中には多量の微細砂粒を含み、焼成は良好である。9の色調は淡褐色で、胎土中には多量の微細砂粒を含み、焼成はややあまい。

10は高台付き椀で、高台部のみが遺存している。高台径は4.9cm、高台高は5cmを計る。内外面共にナデが施される。色調は淡褐色で、胎土中には2mm前後の砂粒と多量の微細砂粒を含み、焼成は良好である。

11は内面黒色処理された高台付き椀である。底部の少強が遺存している。高台径は6.9cm、高台高は1cmを計る。内面には弱いヘラ磨きが施される。底部は回転糸切り離しで、高台部の貼付けの際にナデを施している。色調は淡褐色で、胎土中には多量の雲母粒と微細砂粒を含み、焼成は良好である。

12は内面黒色処理された高台付き椀で、高台部の少強が遺存している。推定高台径は7.1cm、高台高は1.3cmを計る。内面には二方向へのヘラ磨きが施され、その他は右回転のナデが施される。色調は淡褐色か、黒褐色で、胎土中には多量の雲母粒と微細砂粒を含み、焼成は良好である。

#### 鉄 器

13は鉄製の穂積み具で、幅は2.3cm、厚さは2.5mm、現存の長さは5.2cmを計る。片側に径3mm前後の孔が開いている。

14は刀子で、柄と刃部の一部がそれぞれ遺存している。現存長は4.7cm、刃部の幅は1cm、柄部の幅は0.8cmを計る。

#### 土 製 品

15は土製羽口で、小破片であるために全体の大きさなどは不明である。外面には鉄の付着などはみられず、炉内に直接当る部分ではないことが分かる。色調は外面の上部が幾分黒みを帯びているが全体的には褐色である。内面は赤褐色で、全体に煤が付着している。胎土中には砂粒を多く含む。

## 第5節 まとめ

今回の2,747m<sup>2</sup>を対象にした調査によって、竪穴住居跡18軒、土壙8基、溝2条を検出した。先土器時代と縄文時代の遺物は出土したが、その点数は少なく、遺構は全く検出できなかった。

これらの遺構の帰属時期は、竪穴住居跡の全てと東側に南北に走る1号溝と8号土壙は平安時代に属するものである。その他の遺構は出土遺物が全く無いものが多く、出土していくても小破片であるため、その時期を決めるのは難しい。それ以外に、図面等による報告はしなかったが、戦中・戦後に油を取るためにそのまま燃料にするために松根を掘り起こした跡と、煙炭用の炭焼き窯が数か所検出された。また、本遺跡からは鉄滓や羽口の破片などが出土し、製鉄関連の遺跡の可能性が考えられたが、それらを証明するような遺構を検出することは出来なかつた。ここでは土器や鉄製品などの遺物や、竪穴住居跡の持つ属性などの検討から、本遺跡の集落の展開を復元する手掛かりを探ってみようと思う。

遺構から出土した土器の器種は杯・椀・高台付き椀・高台付き皿・甕・瓶等があるが、甕や瓶は出土数が少なく、全体の器形を復元できるものも乏しいことから、杯を中心に椀・皿を補足的に分類していきたい。

### 杯・椀・皿の分類

I類 ロクロ未使用の杯で、ヘラ削り調整が体部外面の口縁部直下まで及ぶもの。体部の立ち上がり方などで、細分されるべきと考えるが、点数が少ないので一括して取り扱う。10号住居跡-8（以下10-8と略す）、11-1が該当する。

II類からIV類まではロクロ使用の杯であり、体部内外面の調整方法によって分類した。

II類は体部外面下半部にヘラ削り調整が施されるものである。底部の調整の有無によって1類と2類に分けた。

II-1 底部の全面或いは周縁部にヘラ削り調整を施すもので、底部の切り離し技法は残っているものを見る限りでは、回転糸切り離しである。本類は器形や法量・特徴的な体部外面の調整方法によって、7つに細分した。

II-1a 底径と口径との比率が1:1.9で、体部がやや直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に続く、箱形に近い器形をとるものである。2-1のみ該当する。

II-1b 体部下半部にやや明瞭なヘラ削りによる面取りを施し、体部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反するものである。底径と口径の比率は1:2である。器高はいずれも5cm以下である。内面にヘラ磨きの施されるものもある。3-1、3-2、6-1、12-1、14-1、14-2、17-1が該当する。

II-1c 体部の立ち上がり角度が小さく、体部は比較的直線的で、口縁部がわずかに外反するものである。底径と口径の比率は1:2である。内面にヘラ磨きの施されるものもある。2-

2、2-3、3-3、5-1、6-5、12-2~4、12-7、17-3が該当する。

II-1d 1b類に類似した器形であるが、口縁部は外反せずにやや直立するものである。6-3のみが該当する。

II-1e 底径と口径との比率が1:1.8で、器高が低く偏平な器形を示すものである。3-4のみが該当する。

II-1f 体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反するものである。底径と口径との比率は1:2である。6-4のみが該当する。

II-1g 体部の立ち上がり角度が小さく、体部が比較的直線的なものである。口径が16cm以上と大きいものである。内面にヘラ磨きが施される。10-2、12-5が該当する。

II-2類は、底部が回転糸切り離しの後、無調整のものである。

II-2a 器形的にはII-1c類に類似しているものである。底径と口径との比率は1:2以上である。6-10、10-5、17-2が該当する。

II-2b 底径と口径との比率は1:2.6で、直線的に立ち上がる体部から、そのまま口縁部に続くものである。17-6のみが該当する。

III類は体部内外面共にナデ調整を施すもので、II類と同様に底部の調整の有無によって二つに分けることができる。

III-1類は底部にヘラ削り調整を施すもので、切り離し方法は回転糸切り痕が認めらるもののが1点あるだけで、大部分は全面に渡ってヘラ削りが施されている。

III-1a 体部外面下半部に稜を作るもので、底径と口径との比率は1:1.8前後で、やや内湾気味に立ち上がる体部から、口縁部がわずかに外反するものである。5-2~5、6-8、10-3、12-5が該当する。

III-1b 体部はほぼ直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に続くものである。底径と口径との比率は1:2.5で、器高が4cm以下と比較的浅いものである。内面にヘラ磨きが施される。6-7と17-7が該当する。

III-2類は底部が回転糸切り離しの後、無調整のものである。

III-2a 体部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反するものである。底径と口径との比率は1:2前後である。10-4と10-6が該当する。

III-2b 体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反するものである。底径と口径との比率は1:2.6である。10-7のみが該当する。

III-2c 体部が直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に続くもので、底径と口径との比率は1:1.8である。6-9のみが該当する。

IV類は内面に黒色処理が施されるものである。

IV-1 底部は回転糸切り離しの後、全部或いは周縁部にヘラ削り調整を施し、体部下半部

にヘラ削りないしナデ調整が施されるものである。底径と口径との比率は1:2.3前後で、口径が13cm前後でやや深い印象をもつ。1-1、12-8、12-10が該当する。

IV-2 底径と口径の比率が1:2.5~2.8で、底径の比率が最も小さいものである。体部下端部にヘラ削りないしナデ調整が施される。体部は幾分内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反するものもある。1-2、2-4、5-6、17-4、17-5が該当する。

V類は椀で、内面に黒色処理が施される。高台の付かないもの（V-1）と付くもの（V-2）とに別れる。

V-1a 外面にヘラ削り調整が施され、口縁部直下まで及ぶ。箱形に近い器形である。12-9のみが該当する。

V-1b 体部は内湾気味に大きく立ち上がり、口縁部が外反するものである。底部はやや突出している。7-1のみが該当する。

V-2a 体部がやや内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁部に続くものである。8-2のみ該当する。

V-2b やや深めで内湾する体部から、口縁部が強く外反するものである。8-1のみ該当する。

VI類は高台付き皿で、内面にヘラ磨きが施されるVI-1（溝1-1）と、施されないVI-2（10-13）とに二分される。共に口縁部は外反する。

以上のように分類を試みたが、対象となる土器の絶対数が少ないのでに対して、分類数が多く、やや煩雑になってしまった感がある。ここでは本遺跡における主体となる土器群を主に、各類の共伴関係についてみていく。また、県内における奈良・平安時代の土器の編年は、「房総における歴史時代土器の研究」（以下「研究」と略す）においてほぼ確立されていると考えられるので、これに基づいて検討していきたいと思う。

住居跡内における各類の共伴関係を見ると（表1）、II-1b・1c類を主体として他の類をほとんど伴わないもの（1群）と、II-1b・1c類とIII-1a類ないしIV類が共伴するもの（2群）と、II-1b・1c類とII-2類・III-2類が共伴しているもの（3群）の三つに大きく分けることが出来る。1群を出土する住居跡としては3号・14号住居跡が、2群は1号・2号・5号・12号住居跡が、3群は6号・10号・17号住居跡がそれぞれあげられる。

これらの各群の中で共通しているII-1b・1c類のうち、II-1c類は本遺跡で最も出土点数が多い杯である。II-1b類とIII-1a類は体部外面の調整がヘラ削りとナデの違いはあるものの、器形的には類似しており、この体部がやや内湾気味に立ち上がり口縁部が幾分外反する杯と、底径と口径との比率が1:2以上で体部から口縁部にかけて比較的直線的になる杯が主体的な土器であると言える。

表1 類別土器共伴關係表

	I	II-1a	II-1b	II-1c	II-1d	II-3a	II-1f	II-1g	II-2a	II-2b	III-1a	III-1b	III-2a	III-2b	III-2c	IV-1	IV-2	V-1a	V-1b	V-2a	V-2b	VI-1	VI-2	
1号住																	—	—						
2〃		—		T													—							
3〃			T	—																				
4〃																								
5〃																T		—						
6〃																								
7〃																								
8〃																								
9〃																								
10〃	—																T	—						
11〃	—																							
12〃		—	T															T	—					
13〃			T																					
14〃																								
15〃																								
16〃																								
17〃																			T					
1号構																								—

このII-1b類とIII-1a類の杯は、「研究」の中の成田市宗吾西鷺山遺跡のV期とIX期とした時期の杯に同様のものを見ることができる。また、II-1c類は法量的には一定しており、底径と口径との比率が1:2以上と底径の縮小化が進んでいることなどから、同様の時期の中において良いかと思う。

器形的にII-1b類に類似性を有するII-2b類は、底部が回転糸切り離し無調整であることから、II-1b類より後出の土器であると考えられる。これは、III-2a類とIII-1a類の関係においても同様のことが言える。

黒色処理の施されている土器に関しては、椀よりも杯の方が多い。V-1a類の土器は、「研究」の印旛郡栄町大畠遺跡の第IX期とした土器群の中に類似した椀が見られる。IV-1b類の椀については類似したものが無いが、同遺跡の第XI期の段階の椀は、体部がかなり立ち上がり、「前代に比べると底部と体部との境を大きく面取りし」ということが指摘されており、7-1はそれらの傾向がみられないことから、第XI期以前の段階のものと見ることができる。黒色処理された杯については、器形自体はII-1c類に近似し、それよりも底径と口径との比率が大きくなっていることなどから、これとほぼ同時期のものと捉らえて良いかと思う。

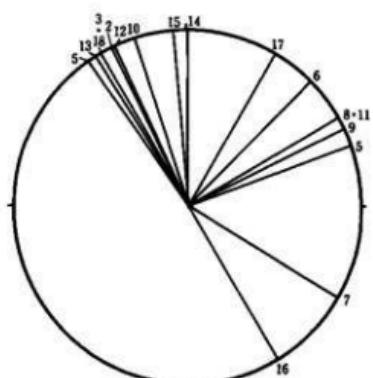
また、高台付きの内面黒色処理された椀と高台付き皿の出現についても、9世紀の後半代からとする点において「研究」内で一致している。

これらのこととを総合すると、本遺跡の土器群は9世紀の第3四半世紀を中心として一部第4四半世紀にかかるものとして捉らえることが可能かと思う。そこで、上記で区分した3群の土器群の時間的推移について見ていくと、1群と2群はいずれもII-2類とIII-2類及びV類・VI類土器を共伴していないことから9世紀の第3四半世紀に、3群はそれらの土器を共伴していることから9世紀の第4四半世紀にそれぞれ比定することができる。そして、1群と2群とはIV類土器の有無によって、1群から2群への時間的推移を見ることができると思われる。

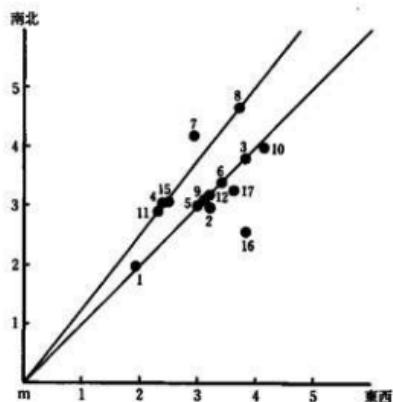
先にあげた住居跡以外のうち、器形を知ることの出来る土器を出土した住居跡に付いてみて見たい。先ず、IV類土器の見られる1号住居跡とV-1類土器の見られる7号住居跡は2群土器の段階に、V-2類土器の見られる8号住居跡は3群土器の段階にそれぞれ帰属させて良いかと思う。

この他、土器以外の住居跡の切り合い関係で見ると、9号・11号住居跡は10号住居跡を切って構築されていることから、3群以降の段階とすることができます。また、12号住居跡は13号住居跡に切られているので、1群或いはそれ以前の段階とすることができます。同じ様に18号住居跡は17号住居跡に切られているので、2群或いはそれ以前の段階とすることができます。

**住居跡の規模・形状と主軸方向** 主軸方向では、北ないし北西を向く1号～3号・10号・12号～14号・18号住居跡、北東を向く5号・6号・8号・9号・11号・17号住居跡、南東を向く7号・16号住居跡との3つの纏まりを持つことが分かる(第44図)。この内8号住居跡は、カマドが東側の長辺に設けられており、11号住居跡は北東コーナー部に設けられている。また、南東方向を向く7号・16号住居跡も8号住居跡と同様に長辺にカマドが設けられている。なお、カマドが設けられていない4号・15号住居跡はこの分類の対象とはしなかった。



第44図 住居跡の主軸方向



第45図 住居跡の規模

規模は1号住居跡を除いて一辺が3~4mの範囲に収まり、飛び抜けて大形の住居跡は存在していない。形状では正方形のものと長方形のものとに分かれ、正方形のものが過半数を占めている。長方形のものは南北方向に長く、16号住居跡だけが東西方向に長い。正方形のものでは1号住居跡が2m四方と一番小さく、形状もやや不整の正方形である。そのほかの住居跡は

表2 番号一覧

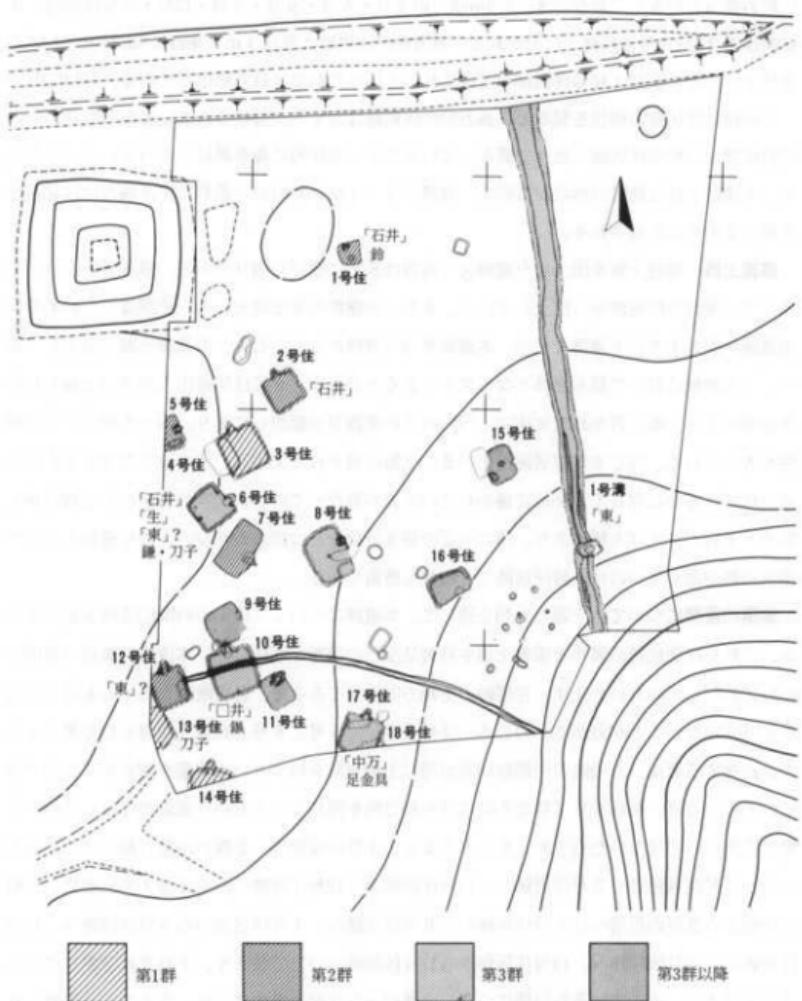
遺構番号	遺物番号	器種	位置	内容	その他	
1号住居跡	1	杯	体部外面	正位	石井	黒色土器
6号住居跡	3	〃	〃	正位	石井	
〃	4	〃	〃	側位	石井	
〃	8	〃	〃	正位	生	
〃	10	〃	〃	正位	口井	
〃	15	〃	〃	?	?	
〃	16	〃	〃	逆位?	東?	
〃	17	〃	〃	?	?	
〃	18	〃	〃	?	?	
〃	19	〃	〃	?	井?	
〃	20	〃	〃	?	石?	
10号住居跡	6	〃	〃	正位	口井	
〃	15	〃	〃	?	?	
〃	16	〃	〃	?	?	
〃	17	〃	〃	?	?	
〃	18	〃	〃	?	?	
〃	19	〃	〃	?	?	
〃	24	〃	〃	?	?	
12号住居跡	16	〃	〃	正位	東?	
17号住居跡	4	〃	〃	正位	中万	黒色土器
〃	13	〃	〃	?	?	〃
〃	14	〃	底部	?	?	
1号溝	1	高台付き皿	体部外面	正位	東	
3Aグリッド	8	杯	〃	?	?	
	9	〃	〃	?	?	
	10	〃	〃	?	?	

比較的整った形をしており、3～3.5m四方の2号・5号・6号・9号・12号・17号住居跡と4m前後の3号・10号住居跡とに分かれる。長方形の住居跡は南北3m×東西2.5m前後のものが主体で、7号・8号・16号住居跡などはこれらと比べてかなり長方形化している。(第45図)

この様に住居跡の形状を見ると、長方形の住居跡はカマドが設けられていなかったり、その付設位置が方形の住居跡と比べて異なっているなど、全体的に趣を異にしている。このことから、本遺跡では住居跡の形状が方形で、規模が3～4mのものが一般的で、主軸方向は北西と北東の2方向に区分される。

**墨書き土器** 墨書き土器を出土した遺構及び内容は表2に挙げた通りである。最も多い字が「石井」で、複数の住居跡から出土している。また、印旛郡市文化財センターで調査した野毛平向山遺跡や野毛平木戸下遺跡などの、本遺跡周辺の遺跡からも「石井」の墨書き土器が出土しており、この地域において最も主体となる文字であると言える。6号住居跡出土の9の土器と10号住居跡の2の土器に書かれた文字は、「井」の字の筆運びが類似しており、同一人物による可能性も考えられる。同じ6号住居跡出土の8の土器に書かれた文字は、他の全ての文字が正位に書かれているのに対して、側位に書かれている点が異なっている。文字の書かれる土器は杯と皿で、土器のタイプも種々あり、特に一定の書き分けなどは認められない。破片資料も含めて出土点数が最多のは6号住居跡で、内容も豊富である。

**集落の展開について** 土器の分類を通して、本遺跡について3段階の時間的推移を見てきたが、これらに住居跡の属性と墨書き土器や鉄製品などの遺物を加味して、本遺跡の集落の展開について検討してみたい。先ず、住居跡の主軸方向を見てみると、各段階とも必ずしも同一方向をとっていないことが分かる。むしろ、2号と3号、5号と6号、10号と12号と13号等のように、近接する異なった段階の住居跡同志が同じ主軸方向を持つという現象を認めることができる。このことは、住居を立て替える時には主軸方向を同じくするという意識が存在していたと考えて良いのではないだろうか。そう考えると、1群の段階から2群の段階に移行するの当たりて、3号住居跡から2号住居跡へ、13号住居跡から12号住居跡への立て替えを、更に、2群の段階から3群の段階へは5号住居跡から6号住居跡へ、7号住居跡から8号住居跡へ、12号住居跡から10号住居跡へ、14号住居跡から17号住居跡への立て替えを、それぞれ想定してみることができる。そして、それ以降については異なった状況の発生により、今までとは異質の9号・11号・15号・16号住居跡などが作られるようになったのではないだろうか。文字で一番多い「石井」と書かれた墨書き土器は2群段階にも見られ、明らかに3群段階との関連性が認められる。しかし、3群段階の住居跡からは鎌や鐵・刀子といった鉄製品や銅製の太刀の飾り具等が出土しているのに比して、これ以降の住居跡群との間には大きな隔たりがあるといえる。3群の土器は9世紀の第4四半世紀の時期を想定したが、この時期を境に本遺跡の集落の展開に関する大きな転換が生じたものと考えられる(第46図)。



第46図 集落展開図

今回の調査範囲は集落全体から見れば、ほんの一部にしか過ぎず、先に挙げた野毛平木戸下遺跡では、掘立柱建物跡を伴う住居跡群が検出されており、集落の中心部に当るものと思われる。また、同じく谷を挟んだ台地上に所在する野毛平植出遺跡でも平安時代の掘立柱建物跡と竪穴住居跡が検出されている。今回調査した範囲内の遺構の分布状況を見ると、西側に集中して存在し、東側では1号溝を境にして全く認められなくなる。この1号溝は出土遺物から住居跡群と同時期の遺構と考えてよく、この溝が集落の東端に存在することと出土土器に「東」の文字が書かれていることとはあながち偶然とは言えないであろう。つまり、今回検出した住居跡群は同一台地上に所在する野毛平木戸下遺跡の東端の部分に当たり、1号溝はその東端を画する溝として機能していたものと考えられる。本遺跡の性格や展開を考えていくに当たっては、それらの遺跡の内容を加味しなくてはならないことは明らかであり、行き過ぎた推論は大きな過ちを招くことになるので、今後これらの調査成果を含めて、検討していく必要があると考える。

#### 参考文献

- 『財団法人印旛都市文化財センター年報2－昭和60年度－』 財団法人 印旛都市文化財センター 1986
- 『房総における歴史時代土器の研究』 房総歴史考古学研究会 1987
- 『財団法人印旛都市文化財センター年報3－昭和61年度－』 財団法人 印旛都市文化財センター 1987
- 『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書IV－佐原地区(1)－』 財団法人千葉県文化財センター 1988

## 第2章 七榮古込遺跡

## 第1節 発掘調査に至る経緯

成田市の南東に位置する新東京国際空港は、旅客及び貨物の輸送による航空機の便数が年々増加してきた。これにより新しい滑走路や関連設備の建設が急務となり、新東京国際空港公団では、関連する事業の推進を計ってきた。一方、新滑走路の建設予定地内を含めた周辺地域は古くから農業生産を基盤とした地域であり、県内でも有数の畑作地帯として知られるところである。そこで公団は、新東京国際空港から2km程離れた富里町七栄・古込地区に農業用代替地の造成事業を計画した。

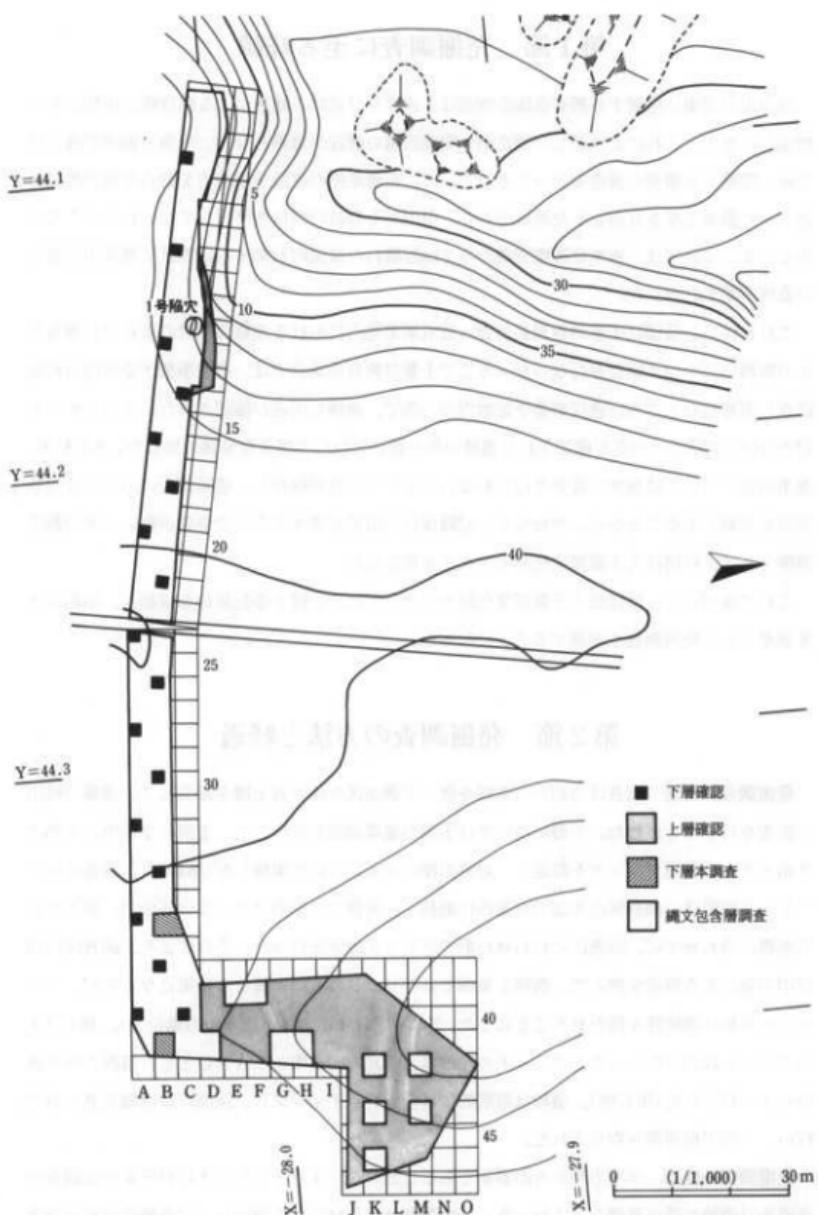
これに伴い、公団は千葉県教育委員会へ造成事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会を行なった。そこで千葉県教育委員会では、造成事業予定地内の現地踏査を実施したところ、造成事業予定地内的一部分で、遺跡の所在が確認された。そのためその旨を公団へ回答し、所在が確認された遺跡の取り扱いについて慎重な協議を重ねた。その結果、農業用地については現状の変更を行なわないこととして現状保存し、道路部分については現状保存が困難であることから、やむなく、記録保存の措置を講ずることで協議が整い、その調査機関として、財団法人千葉県文化財センターを指定した。

これに基づいて、財団法人千葉県文化財センターでは、公団と委託契約を締結し、昭和57年度事業として発掘調査を実施することになった。

## 第2節 発掘調査の方法と経過

**発掘調査の方法** 調査は当初から重機を使って調査区全体の表土層を除去して、遺構の検出と調査を行うことにした。下層については上層の遺構調査と平行して、遺構のない所から順次2m×2mの確認グリッドを設定し、対象面積の4%について実施した(第47図)。調査区内のグリッド設定は、調査区の大部分が東西に細長く、東側では矩形になっているので、敢えて公共座標に合わせずに、調査区に合わせた形でグリッド設定を行った。これにより、調査区のほぼ中央部にある農道を挟んで、西側と東側ではグリッドの方向が異なる結果になったが、グリッドの呼称は連続性を持たせることにした。グリッドは4m×4mを一つの単位とし、他に大・小グリッドは設けなかった。グリッドの呼称は、南北方向を南からA～Oとし、東西方向を西から1～47とした(第47図)。遺物は原則的には全点ドッティングし、図面作製は簡易造り方で行い、一部平板実測を取り入れた。

**発掘調査の経過** 年度当初からの事業であることから、4月1日から4月13日までは調査の準備及び現場の環境整備などを行った。発掘調査は4月14日から開始し、包含層の有無及び表土層の厚さを確認するための試掘調査を行った。そして、その結果に基づいて重機による表土



第47図 七栄古跡遺構及びグリッド配置図



第48図 七栄古込遺跡周辺地形図(1/5,000)

層の除去を行った。表土層の除去を終了した部分から、順次遺構検出のための精査を行っていた。これにより、谷にかかる斜面部分を除いて、縄文時代の包含層の存在が明らかになったので、手掘りによる包含層調査を実施した。また、B35・B40グリッドの地点では、遺構検出作業中にIII層上面から先土器の遺物が出土したので、周辺について先土器の本調査に移行した。上層の包含層調査が終了したところから、順次下層の確認調査を実施したが、先土器の遺物集中地点は確認できなかった。これにより、5月22日に全ての調査を終了した。

### 第3節 遺跡の位置と環境

七栄古込遺跡は、印旛郡富里町七栄字古込503-3他に所在する。東関東自動車道富里インター・エンジから北西に800m程度行ったところで、東関東自動車道に面する台地上である。成田市の市街地からは南へ3.2kmの距離にある。

富里町は北総台地の中央部に位置し、印旛沼・利根川・太平洋に注ぐ各河川の分水界にあたる。南西からは印旛沼に注ぐ鹿島川の支流である高崎川、北西からは同じく印旛沼に注ぐ江川が、東側からは太平洋に注ぐ木戸川の各小支谷が迫ってきている。北側からは利根川に注ぐ根木名川の支流及び小支谷が、複雑な樹枝状に入込み台地を開析している。本遺跡の南東約1.5kmの東二本櫻付近がちょうどこの真ん中にあたり、比較的平坦な広い台地を形成している。

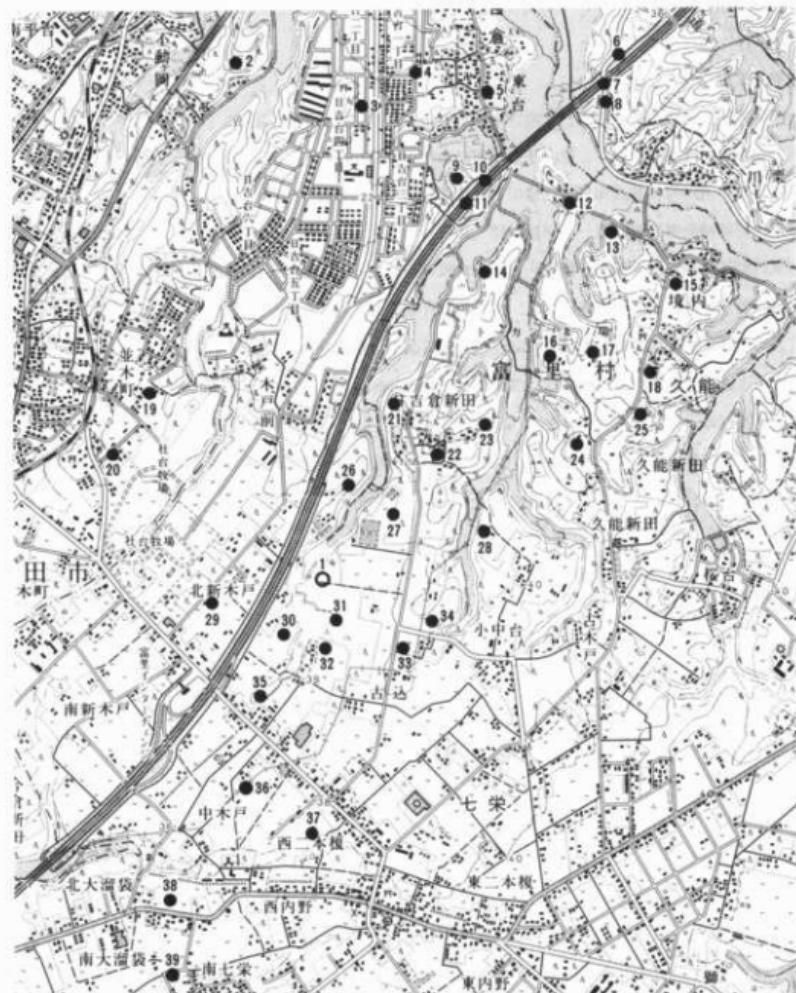
本遺跡は根木名川水系に属し、標高は40m前後を測る。「千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区－」では、本遺跡を含む台地すべてと、南側の最奥部の小支谷を挟んだ台地の一部が古込遺跡となっている。今回報告する部分は、そのうち最も西に位置し、小支谷によって小さく開析され、北側に突き出した舌状台地の基部に位置する。

本遺跡周辺の小支谷最奥部の台地上及びその背後に広がる平坦な台地上には、余り多くの遺跡は知られていない。多くは各河川の中・下流域に多く分布している。

先土器時代は、多量のナイフ形石器や東内野型尖頭器を出土した東内野遺跡、多量の尖頭器と石刃を出土した南大溜袋遺跡や舞子穴VI遺跡、北大溜袋遺跡、南内野遺跡などが報告例として挙げられる。これらはいずれも高崎川・江川支流の小支谷に近接しているが、根木名川水系に属するものとしては、未調査ではあるが北新木戸I・II遺跡があげられる。

縄文時代は、草創期・早期は先土器時代の遺跡と重複する例が多いが、前期以降になると、向台遺跡・稻荷谷津遺跡・久能寺沢遺跡などのように、河川の中流域に遺跡の立地が移行していく。

古墳時代以降では、この傾向が更に強まり、各河川の中・下流域及び印旛沼東岸に大規模な集落や古墳群が形成されるようになる。根木名川流域では日吉倉古墳群・川栗台古墳群・团巣台遺跡群・郷部北遺跡群などが挙げられる。印旛沼東岸では公津原古墳群・同遺跡群等が、い



- |                |            |              |               |
|----------------|------------|--------------|---------------|
| 1. 七榮古込遺跡      | 2. 大田遺跡    | 3. 鳥山遺跡      | 4. 東台遺跡       |
| 5. 城ノ越遺跡       | 6. 川栗台遺跡   | 7. 東和田遺跡     | 8. 子ノ神遺跡      |
| 9. 古山遺跡        | 10. 向台遺跡   | 11. 日吉倉遺跡    | 12. 下谷津遺跡     |
| 13. 久能寺沢遺跡     | 14. 稲荷谷津遺跡 | 15. 境内遺跡     | 16. 井戸尻遺跡     |
| 17. 宮谷遺跡       | 18. 久保台遺跡  | 19. 向台遺跡     | 20. 中台遺跡      |
| 21~23. 日吉倉新田遺跡 | 24. 久能庚塚遺跡 | 25. 横谷津遺跡    | 26~29. 北新木戸遺跡 |
| 27. 日吉倉新田前遺跡   | 28. 小中台遺跡  | 30. 北新木戸II遺跡 | 31~34. 古込遺跡   |
| 35. 北新木戸I遺跡    | 36. 中木戸遺跡  | 37. 西二本櫻遺跡   | 38. 北大留袋遺跡    |
| 39. 南大留袋遺跡     |            |              |               |

第49図 七榮古込遺跡周辺主要遺跡分布図(1/25,000)

ずれも発掘調査が行われたものとして挙げられる。

#### 参考文献

- 『千葉県南大瀬袋遺跡の調査』 考古学ジャーナル78号 戸田哲也 1973
- 『公津原』 千葉県企業庁 財団法人千葉県地域振興公社 1975
- 『獅子穴VI遺跡発掘調査報告』 富里村教育委員会・同調査会 1975
- 『東内野遺跡発掘調査概報』 同調査団 1975
- 『東内野遺跡第二次発掘調査概報』 富里村教育委員会・同調査団 1976
- 『東内野遺跡第三次発掘調査概報』 富里村教育委員会・同調査団 1977
- 『公津原II』 千葉県教育委員会 財団法人千葉県文化財センター 1979
- 『成田市郷部北遺跡群調査概要』 成田市郷部北遺跡群調査会 1982
- 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1) - 東葛飾・印旛地区 -』 千葉県教育委員会 1985
- 『富里町南内野遺跡 - 県立富里地区(仮称)高等学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』 千葉県教育庁施設課 財団法人千葉県文化財センター 1985

## 第4節 検出された遺構と遺物

### 1. 遺構

#### 1号土壙（第50図・図版12）

調査区西側のB-10グリッドの地点に所在する。北側から延びる谷頭に面する。長軸方向はN-82°-Wで、ほぼ等高線に沿って作られている。形状は長楕円形で、断面形は短軸で漏斗状に、長軸では箱形になる。規模は検出面で長径2.7m×短径2m、中段での長径は2.15m×短径80cmを計り、検出面からの深さは最高で2.5mを計る。底面はほぼ平坦である。遺物は全く出土しなかつた。

### 2. 遺物

#### 縄文時代の土器・土製品（第51・52図・図版13・14）

土器は、総数約500点で、内訳は早期条痕文系71点（I群）、纖維を含む前期の土器215点（II群）、浮島系122点（III群）、前期末葉から中期初頭の土器86点（IV群）である。他に土製の块状耳飾1点である。土器は主にA0～A8グリッドから出土した。

#### 第I群土器（1～8）

第1類 胎土中に多量の纖維を含むもの。1・2は同一個体である。口縁部には凸帯による区画と小突起がみられ、凸帯上及び口唇部には刻み目が施されている。表面はほとんど地文がみられず、裏面の条痕は鮮明である。3は幅広の口唇部上に沈線が認められ、さらに刻みが施文されている。5・6は表裏面の一方に条痕が施文されている。

第2類 第1類に比較して纖維の量が少なく、条痕が明瞭なものである。4・7・8は表裏両面に明瞭な条痕が施文され、4では口唇部にも認められる。

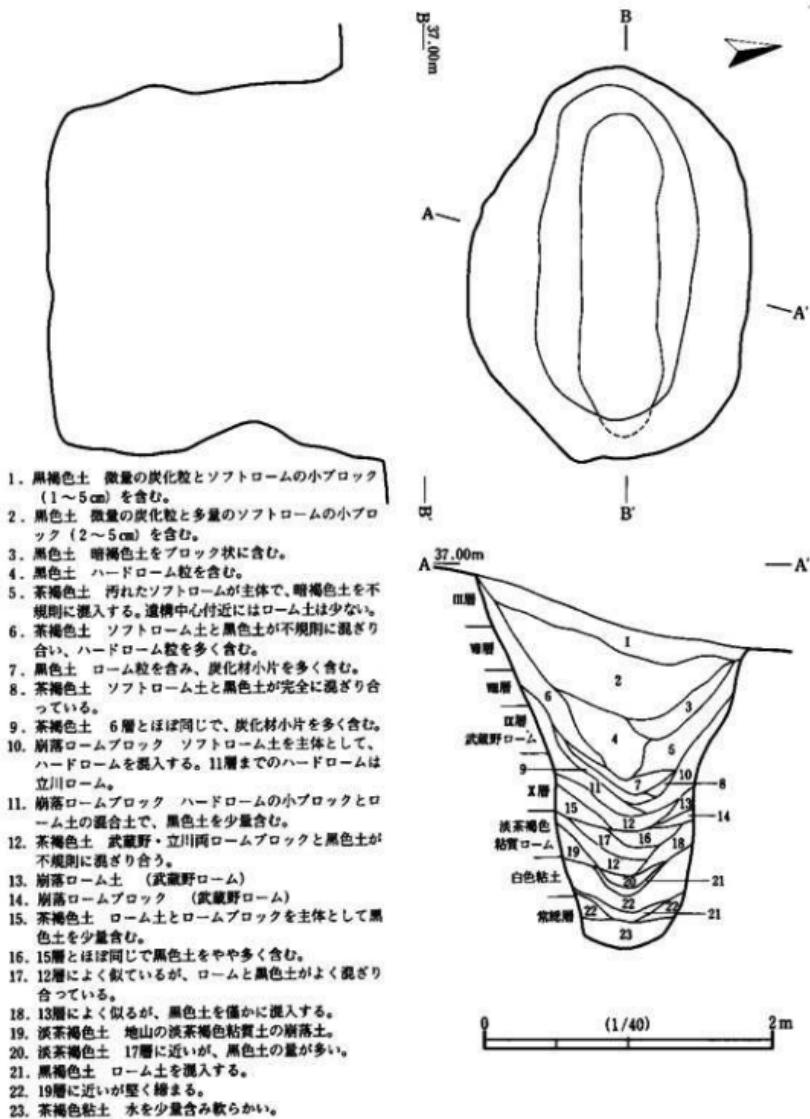
#### 第II群土器（9～21）

第1類 縄文のみが施文されるものである。9～11・13は組紐による文様を持つ。12は単節縄文によって、羽状縄文の構成を成している。14はループ文が多段に施されている。15は無節（L）が施文されている。

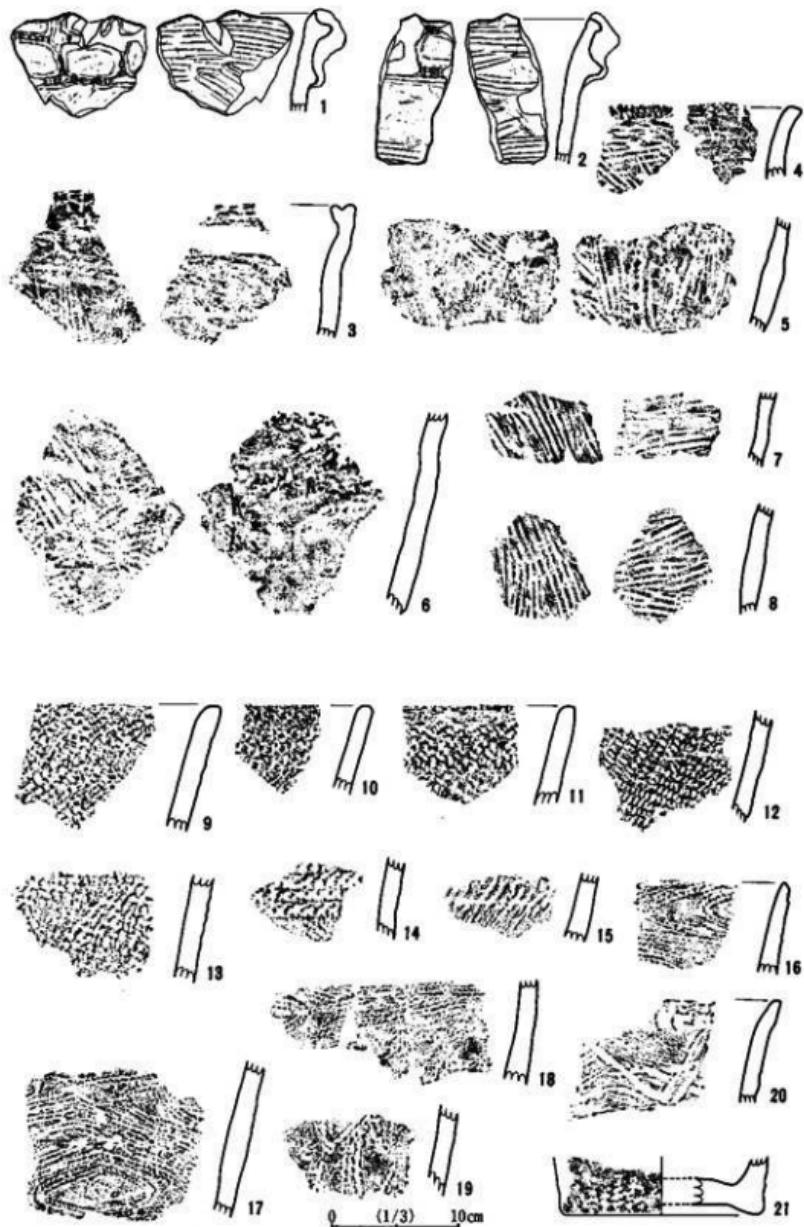
第2類 燐糸文が施されるものである。16～19は同一個体と思われるもので、燃りの異なる原体2本を添わせて、一方を右巻き、もう一方を左巻きにして回転したものである。17の場合、回転方向を変えることによって、菱形の文様となっている。19は胴部の破片であり、縦に回転されている。20は地文に燃糸文を配し、半截竹管による沈線が施されている。

#### 第III群土器（22～36）

第1類 貝殻による文様を有するものである。22は口縁部直下から貝殻腹縁文のみが多用されるものである。23は粘土紐横み上げの痕跡を明瞭に残す土器で、口縁部には指頭状の押捺、



第50図 1号土壤実測図



第51図 グリッド出土遺物－1

胸部は貝殻による文様を有する。24は口縁部に長い沈線が垂下している。26・29は貝殻腹縁文を地文として、沈線が曲線状に施文されている。28は三角文の土器である。

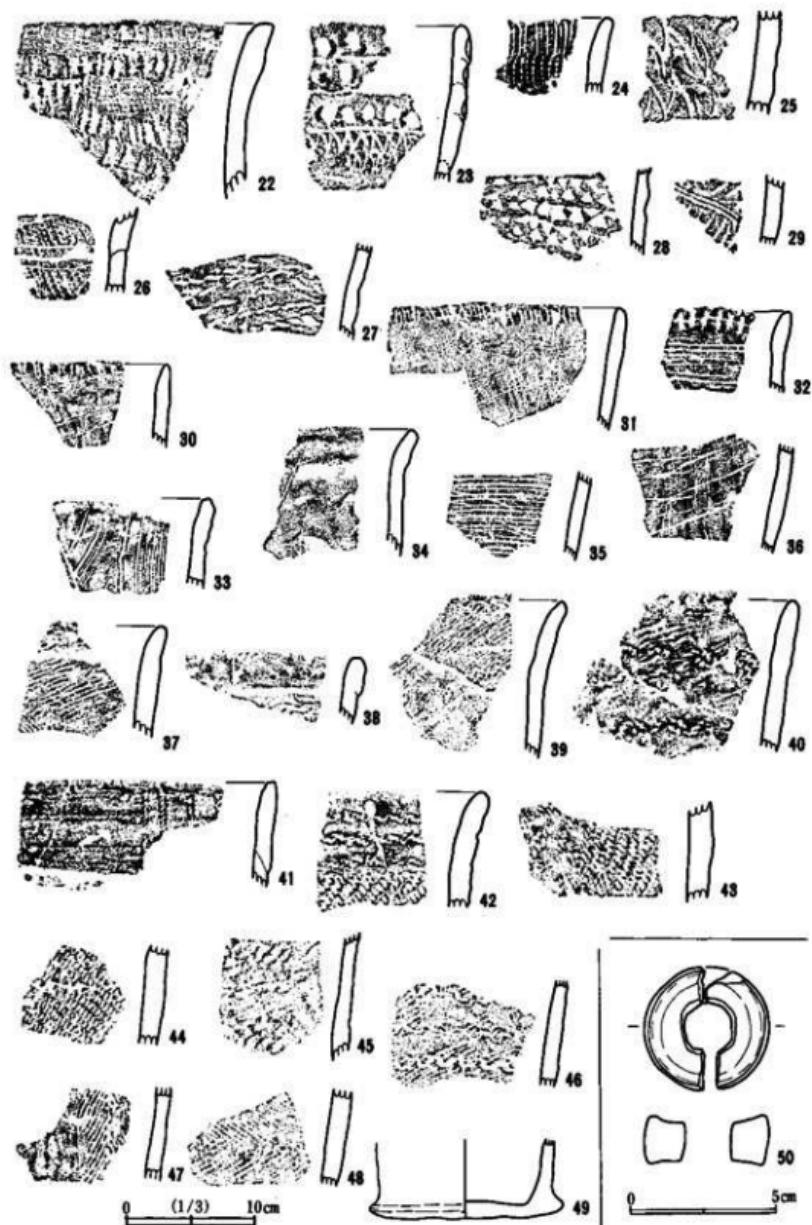
第2類 沈線による文様を有するものである。口縁部破片では短沈線を持つもの（30～32）と持たないもの（33・34）がある。胸部には比較的単純な沈線が施文されている。30・31と36は同一個体で、縦方向のケズリが顕著に認められる。

#### 第IV群土器（37～48）

口縁部文様のうえでは、口縁部直下から縄文が施文されるもの（37・39・40）と口縁部に縄文原体が押捺されるもの（41・42）等があるが、概して縄文による文様のみの土器群である。縄文には無節・単節があり、結節が認められるものや結束によって羽状縄文を成すものがある。また、複合口縁を呈しているものも存在する。37は結束による無節羽状縄文を地文として、口縁部に浅い線状の凹みが認められる。48と同一個体であろう。38は複合口縁で結節文がみられる。39・40は口縁部直下から結節を伴う縄文が施文されてる。40には口唇部に刻みが施されている。41は幅の広い複合口縁部に結束した無節縄文を縦横に4段押捺したものである。42は口縁部に3段の単節縄文を押捺し、同じ原体を用いて横回転施文したものである。43と同一個体である。44～46はいずれも結節を伴う縄文が横回転施文されている。46は胎土中に多量の長石を含む。47は無節縄文を結束し、縦回転施文したものである。

玦状耳飾（50）は二つに割れているが環状を呈する。外径4.33×4.0cm、内径1.7cmと推定され、厚さ1.7cmを測る。土製円盤を作成した後、中央部に孔をあけ、切目を付けたものである。孔及び切目は竹籠状のもので抉り取ったとみられ、ケズリの痕跡を残しているが、そのほかの面はていねいな磨きが施されている。表裏面は周縁がやや突出している。

I～IV群の土器は、調査範囲が狭く限定されているため、出土地点から分類の傾向を捉えることは難しい面がある。I群に関しては、出土地点から明らかに区分できる。すなわち、第1類はA19～A22グリッドから80点が出土し、第2類はB4～A12グリッドから10点が散漫に出土したに過ぎない。第1類は、口縁部の隆起や隆起上の刻み等の特徴から、条痕文系土器の中でも末期のもので茅山上層式以後のものであろう。第II群土器は、文様のうえで2類に分類したが、両者とも出土箇所はA0～A8グリッドに集中している。第1類は組紐やループ文がみられることから関山式新段階的様相が現れ、第2類は黒浜式である。第III群土器も第II群土器同様にA0～A5グリッド周辺に集中し、出土地点からは分離できない。貝殻腹縁文、三角文や口縁部直下の短沈線等から浮島式でも新しい時期と考えられ、浮島III式から興津式にかけての土器である。第IV群は、3箇所から出土している。結節を伴う縄文土器はA0～A2グリッド、結束を伴う縄文土器はA8～A14グリッドから、結節を伴わない無節の縄文土器がA32～A36グリッド出土である。下小野式の範疇で捉えられる土器群である。玦状耳飾は前期後半に多く出する傾向にあるが、当遺跡の場合、土器は伴出していない。



第52図 グリッド出土遺物-2

## 石器

### a. 旧石器時代 (第53図・図版15)

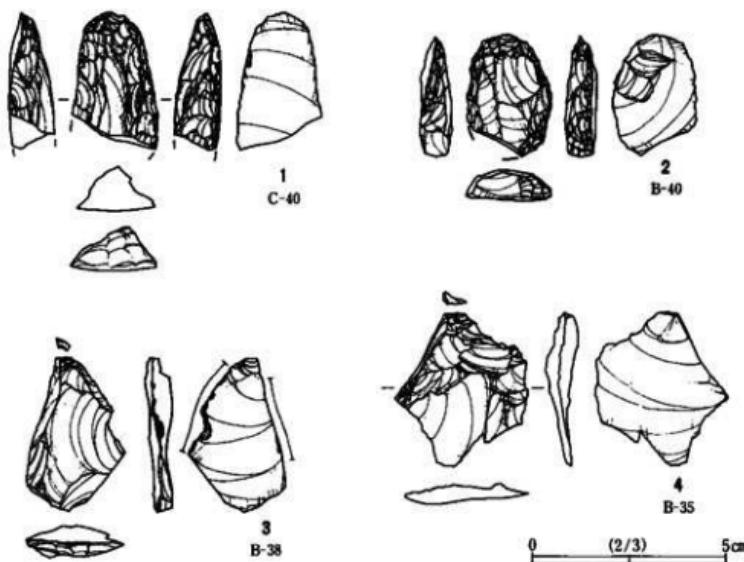
本遺跡では、先述したように、上層遺構検出の過程で旧石器時代の遺物が検出されB-35・40区を中心に下層の拡張がなされたが、遺物の集中地点は認められず、それぞれ単品の資料であった。また、明らかに旧石器時代の遺物と思われるもの2点を加えてここで記述しておく。

1は削器とした。やや下端が広がるような形状を呈し、周縁に腹面からの急角度な剥離を施し刃部としている。下端部を欠損しているため形態は明確でなく、あるいは搔器の可能性もある。頁岩製、34mm×22mm×12mm、重量7.4g。

2は搔器である。1と同様に下端を欠損するが、刃部が一部残存し、急角度の狭い剥離が認められる。素材を斜位に用いており、背面は周囲からの精巧な調整がなされるが、器面全面には及んでいない。頁岩製、30mm×22mm×8mm、重量5.9g。

3は細部加工を有する剝片である。腹面右側縁にノッチ状の微細な調整が施され、また両側縁には刃こぼれが認められる。頁岩製、39mm×25mm×8mm、重量4.4g。

4は幅広の剝片である。背面には打面方向からの剥離が著しいが、周囲からの剥離が認められ、打面更新の剝片の可能性がある。頁岩製、39mm×35mm×8mm、重量5.2g。



第53図 グリッド出土遺物-3

b. 繩文時代（第54・55図、図版15）

繩文時代以降の石器としては、やや石鎌がまとまって検出されたが、他の器種はごく僅かであり、数量的には目立った特徴はない。器種構成は、石鎌10点（1～10）、ビエス・エスキュー1点（11）、細部加工を有する剥片1点（12）、磨製石斧1点（13）、磨石2点（14、15）、敲石1点（16）、剥片8点、礫8点である。

1～10は石鎌であり、基部に着目すると、抉りの深いもの（1～4）、浅い抉りを有するもの（5～9）、抉りを持たないもの（10）などに分類される。

1は調整が精緻なもので、両側縁が膨らみ、基部は深い抉りにより棒状に脚部がのびる。チャート製、25mm×18mm×6mm、重量1.5g。

2は薄手で、丸みのある側縁を持ち脚部は尖る。先端からの加熱により上端から右脚部にまで欠損している。チャート製、25mm×20mm×4mm、重量1.4g。

3は三角形を基調としているが、やや表面右脚部が長く、プロポーションを崩している。黒曜石製、17mm×16mm×5mm、重量0.6mm。

4は片脚部を欠損しているが、3と同様の形状を呈するものであろう。黒曜石製、15mm×12mm×4mm、重量0.4g。

5は最小のもので、基部は弧を描いて浅く抉れる。石英製、11mm×13mm×3mm、重量0.3g。

6は調整が粗いもので、両側縁の肩が張り脚部が跳ねる。安山岩製、20mm×16mm×4mm、重量1.0g。

7は先端を欠損するが、やや内湾した両側縁を持ち、基部の中心のみが抉れる。黒曜石製、21mm×14mm×4mm、重量0.8g。

8は主要剥離面を残し、基部は浅く弧を描いて窪み、脚部は尖る。チャート製、24mm×17mm×4mm、重量1.0g。

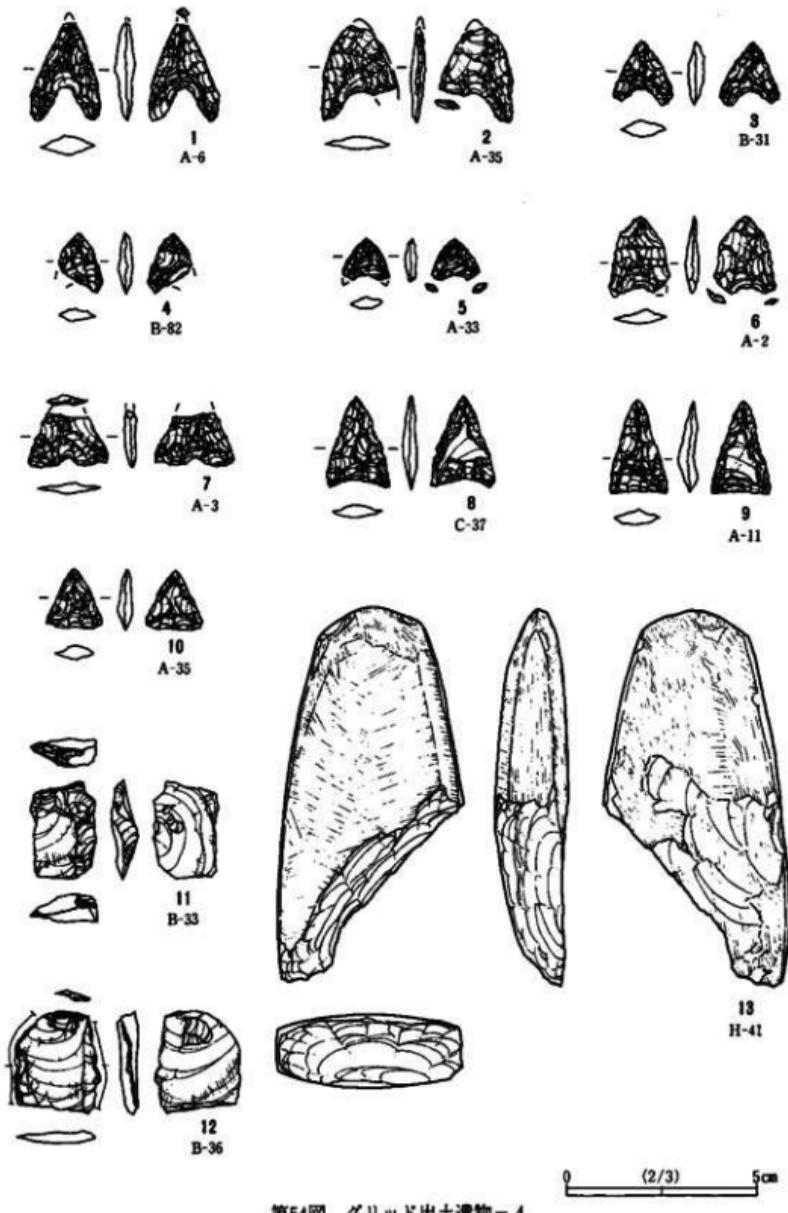
9は長身のもので、基部はほとんど平基に近い。主要剥離面を残す。チャート製、24mm×15mm×4mm、重量1.2g。

10は両側縁は直線的で、基部が丸みを持って膨らむ。小さいわりには調整は粗い。頁岩製、15mm×14mm×4mm、重量0.7g。

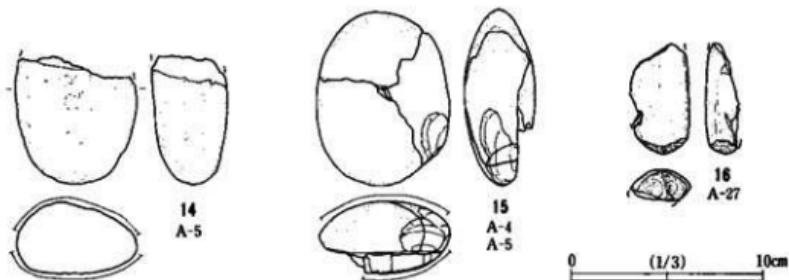
11はビエス・エスキューである。側面で下端から抜ける剥離と、背面で上端から微細な階段状剥離が看取され、下端の後には漬れが認められる。黒曜石製、25mm×17mm×7mm、重量2.2g。

12は細部加工を有する剥片である。石刃状剥片を素材として、両側縁に微細な調整が連続する。あるいは旧石器時代の所産の可能性がある資料である。黒曜石製、26mm×22mm×6mm、重量2.3g。

13は磨製石斧である。先端から右側縁にかけて大きく欠損しているが、定角式磨製石斧に属



第54図 グリッド出土遺物-4



第55図 グリッド出土遺物-5

するものであり、入念な整形が施される。緑泥岩製、 $96\text{mm} \times 49\text{mm} \times 19\text{mm}$ 、重量111g。

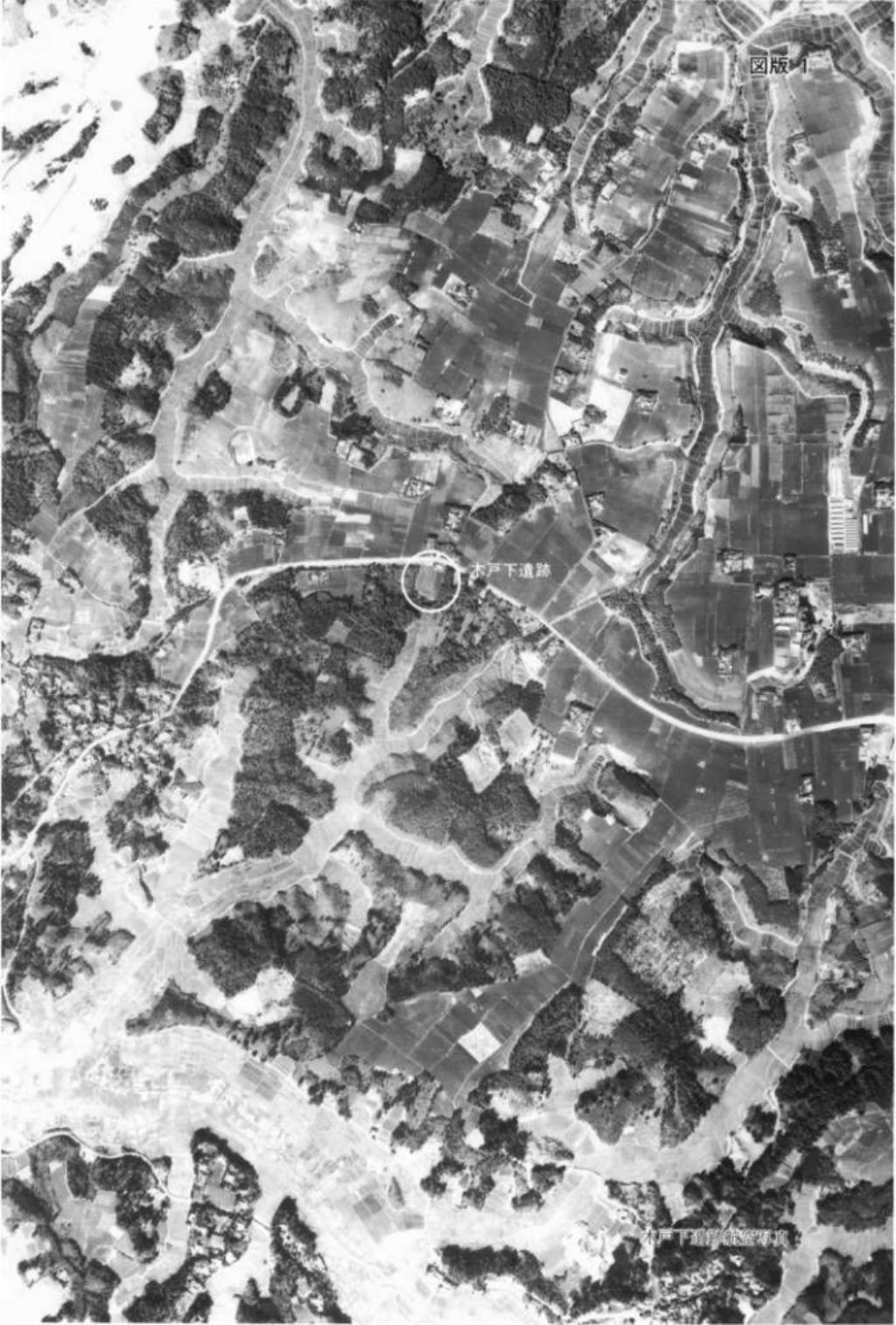
14は磨石である。表裏に摩耗が顕著であり、被熱赤化している。花崗岩製、 $67\text{mm} \times 63\text{mm} \times 39\text{mm}$ 、重量203g。

15は磨石である。摩耗は側面にまで及ばない。被熱赤化して脆くなってしまっており、4点に割れたものがA 4、A 5区に分かれて検出されている。安山岩製、 $91\text{mm} \times 69\text{mm} \times 37\text{mm}$ 、重量272g。

16は敲石である。棒状砾の末端に2方向からの敲打痕が認められ、縦方向に欠損している。安山岩製、 $57\text{mm} \times 31\text{mm} \times 18\text{mm}$ 、重量31g。

# 写 真 図 版

大戸下遺跡



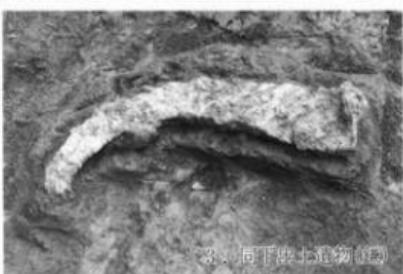
図版 2



1. 2B・3Aグリッド全景



2. 3A・4Aグリッド全景



图版 4



1 . 2号住居跡全景



2 . 9号・10号・12号住居跡全景

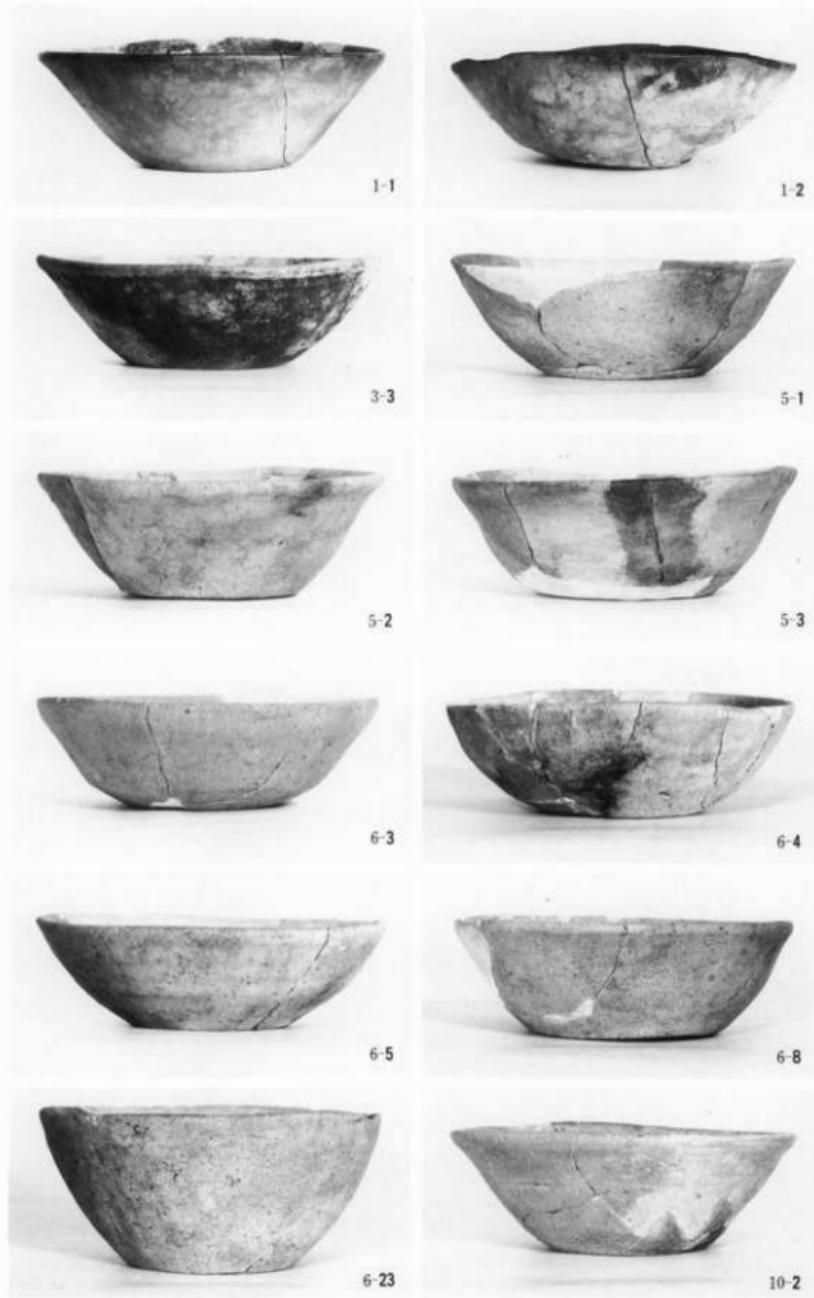


1. 12号住居跡全景

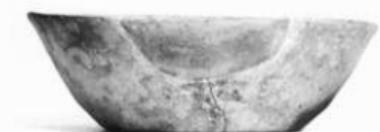


2. 13号住居跡全景

図版 6



出土遺物 - 1



10-6



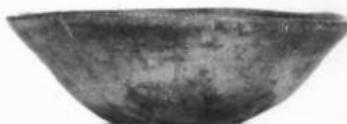
12-2



14-4



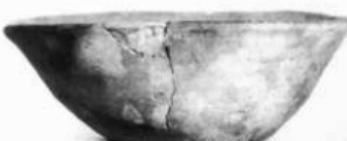
12-8



17-4



1号満-1



9-1



G-1

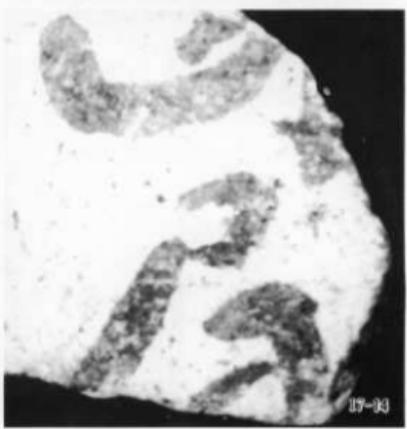
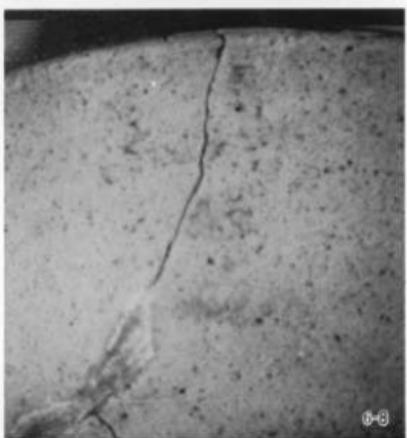
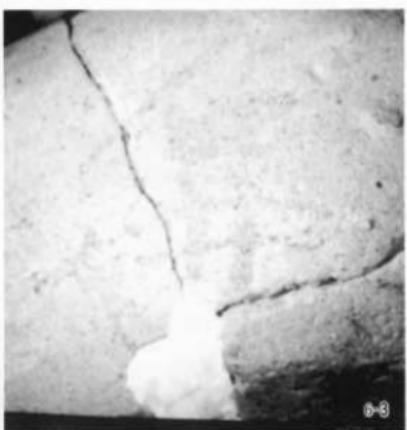


G-5

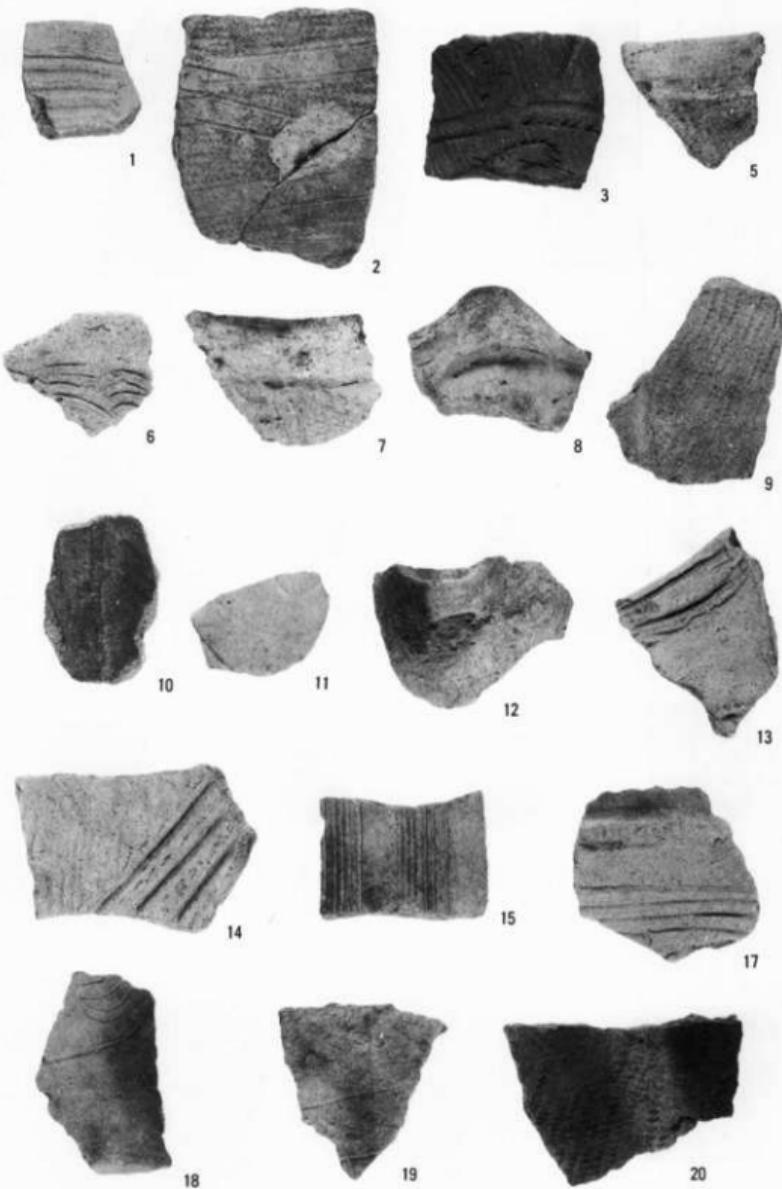


17-18

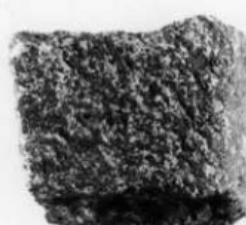
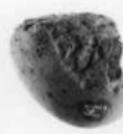
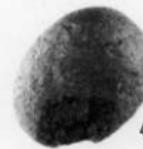
図版 8



出土遺物 - 3



図版 10



出土遺物 - 5



1. 七榮古達遺跡遠景



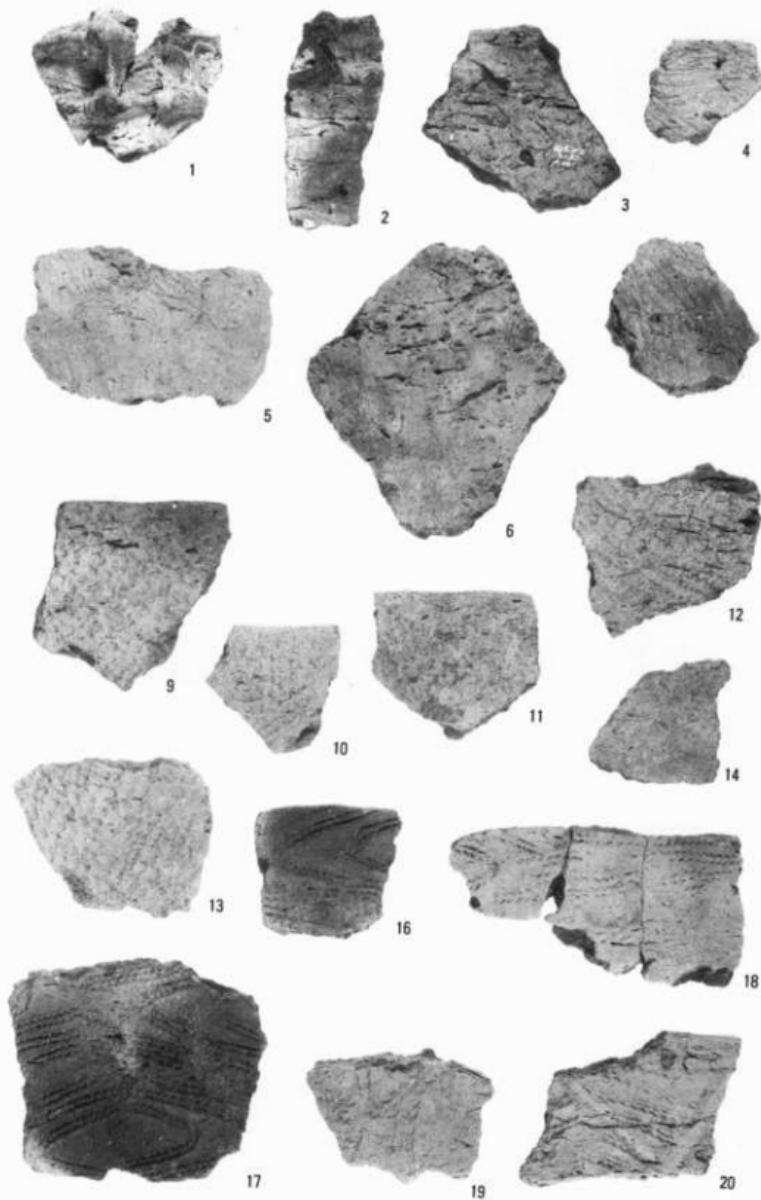
2. 七榮古達遺跡近景



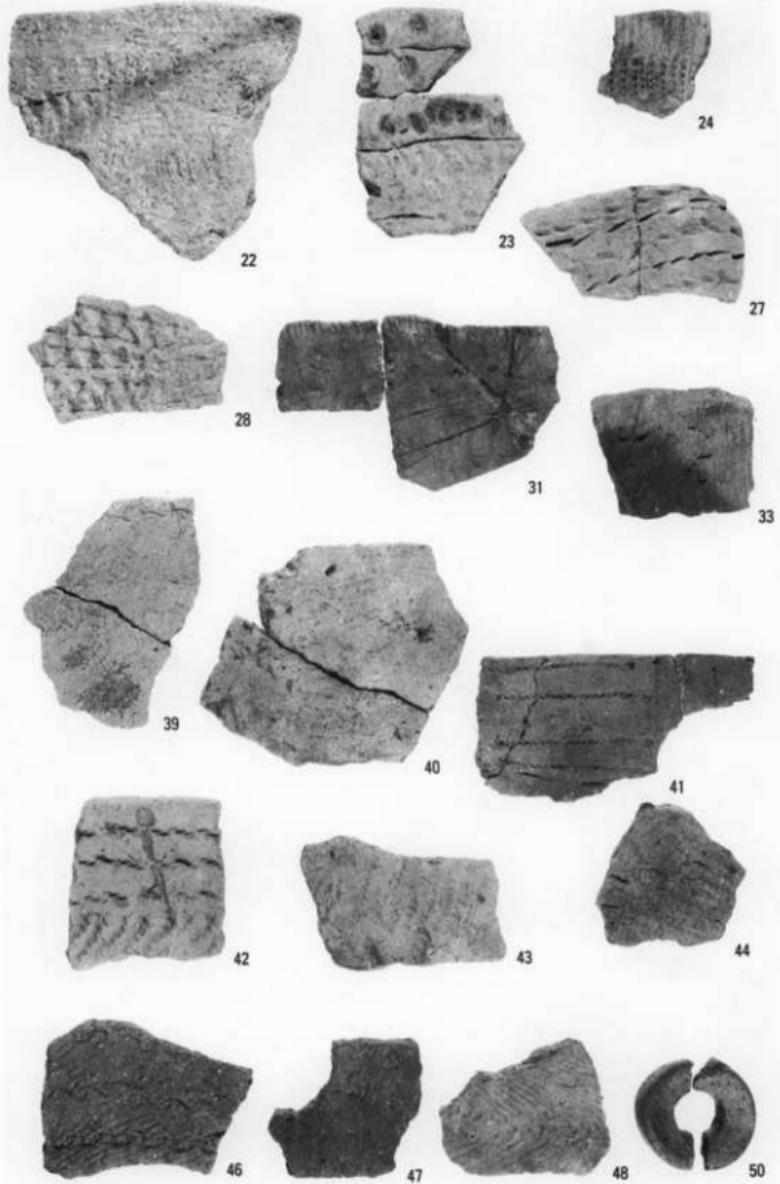
1. 1号土壤全景

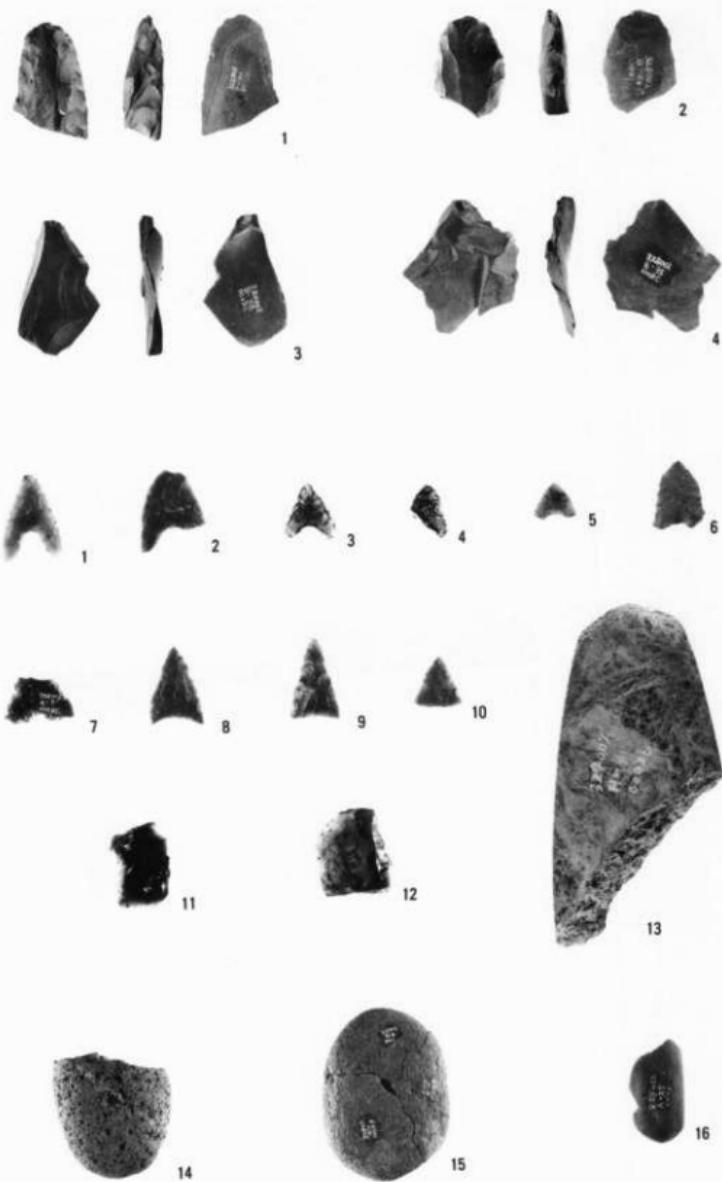


2. 同上土层断面



図版 14





**新東京国際空港  
埋蔵文化財発掘調査報告書VI**

**—成田市木戸下遺跡・富里町七栄古込遺跡—**

---

平成2年3月26日 印刷

平成2年3月30日 発行

発行 新東京国際空港公団  
東京都中央区日本橋本町2丁目4番地

編集 財団法人 千葉県文化財センター  
千葉市葛城2丁目10番1号

印刷 株式会社 弘文社  
市川市市川南2丁目7番2号

---